
女の子にモテたいっ！

よるきつね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女の子にモテたいっ！

【Nコード】

N9385H

【作者名】

よるきつね

【あらすじ】

最低ランクの魔法使い、リユータ。

女の子にモテたいと流れ星に願った夜から、彼の日常は徐々に変化をむかえる。女の子たちとの出会い。悪の秘密結社との遭遇。そして、リユータに秘められた不思議な力の予兆が現れ始める……。

主人公の死

「女の子に、モテたい……」
それは切実な願いだった。

エイルーク魔法学園の校庭近くの道。その脇にある芝生の上に寝転がって、リユータ・アストレイムはため息を吐いた。

男なら誰だって女の子にモテたいという心を持っているはずだし、リユータもたくさんの女の子といちゃいちゃしたいと思っていた。

だが、魔法使いとして最低位であるFランクのリユータに、女の子がすり寄ってくるはずもない。

（僕なんかには、人間としての価値なんかないってことなのかな）
見上げた空はわずかに赤く染まっただけで、小さな雲がゆっくりと流れていく。それから校舎に目を向けようとしたが、少し高い段差があつて見えなかった。

校舎を見るのを諦めて校庭へと目を向けようとした、その時。

空から女の子が降ってきた。

実際には、段差の上から落ちてきただけではあつたが。

リユータはとっさに、その女の子を抱きとめた。思わぬ衝撃を受けて、身体の痛みにつめく。

少女が驚いたような声を上げた。

しばらくリユータは痛みに苛まれていたが、どうにか落ち着きに戻ってきた。腕の中を見ると、小柄な体格をした栗色の髪の少女が抱えられている。

その白く柔らかい肌が、指先に触れて心地良い。もしかしたら少女の匂いまで伝わってきたようで、リユータの胸が激しく不規則に鼓動を打った。

「……ごめんなさい」

少女は小さく呟くように謝りながら顔を向けて、じっとリユータの顔を見つめてきた。女の子の顔がこれほど至近距離にあった経験

などリユータにはなく、思わず顔が赤くなる。

と、少女も頬を紅潮させて顔を逸らした。

慌てた様子でリユータの身体の上からどいて、少女が立ち上がる。仕方ないこととはいえ、なんだか残念な気持ちになった。

間近で見ても少女は十分可愛かったが、身体が離れて全体を把握できるようになると、なお可愛らしく見えた。茶色のブレザーにミニスカートといった制服姿がとても似合っている。

リユータは少女に問いかけた。

「あの、だいじょうぶ？」

「ん……へいき」

少女が答えてくるが、どこかそっけなかった。

けれども頬を赤く染まっているところをみると、まだ先ほどの出来事に照れているだけなのかもしれないが、

(やっぱり、可愛いなあ……)

心の中でしみじみと呟く。と、何故だか少女の身体がぴくりと震えた。

なんとも言えない沈黙が続いていたが、不意に少女が顔を上げる。どうやら段差の向こうを気にしているようだった。

「えと、それじゃ」

言葉少なに呟くと、少女はいきなり走り出した。リユータは思わず少女へと手を伸ばすが、彼女は校庭のほうへと去って行ってしまふ。

思わずため息をつく。今の出会いをもっと有効に活かせたなら、もっと楽しい学園生活が送れたらうに。

そう考えた瞬間 目の前に人間が降ってきた。

男女の二人組。リユータはぎょっとして、前へと伸ばしていた手を引っ込めた。その二人組はリユータに気づいた様子もなく、少女を追うように走り去っていく。

姿はほとんど小さくなり、やがて見えなくなった。

「なんだっただ……？」

ただ一人取り残されて、リユータは呆然と呟いた。

校庭を抜け、学外へ。

それでも二人組は諦めずに追いかけてきているようだった。すでに日も暮れようとしている。

このまま家に帰るわけにもいかず、アイリは、目についた近くの公園へ駆け込んだ。周りには木々が生え茂り、公園の中央にはそこそこの大きさの噴水があった。幸いこの時間帯には、人は誰もいないようだった。

アイリは足を止めて二人組を待ち構えた。彼らが追いついて来るまで、ゆっくりと精神を落ち着けていく。

だんだんと物事を考える余裕が出てきた。いままでのことを思い返してみる。

神器。聖杯。そして、神器を狙ってきた二人組の男女。そういえば、さつきぶつかった少年はなんだったのだろうか。

『可愛い……』

アイリは少年の言葉を思い出し、顔を赤くすると、ゆっくりとかぶりを振った。

最後にそんなことを言われたのはいつだっただろうか。最近は気味悪がられるばかりで、そんなことを言われたことなどない。

アイリにとって少年の言葉は十分に恥ずかしいものだった。

たとえそれが 実際と言われた言葉ではないとしても。

少年の考えも、そしてその他の人間の考えも、しょせんは他人なのだから気にする必要はない。

そう自分に言い聞かせて、アイリはまっすぐに前を見据えた。

忌まわしい二人組がすぐそこまで迫っている。

『左右から挟み撃ちにする！』

聞こえてくる言葉。妥当なところだろう。魔法使いの連携は普通、片方が攻撃して片方が防御するというものだが、下手をすれば相手が逃げだしかねない状況では当てはまらない。

二人組は確実にこちらを仕留めようとしている。
アイリのすることも決まっていた。二人を同時に相手などできないのだから、各個撃破するしかない。

左右に分かれた二人にタイミングを見計らい、アイリは右へ、女のほうへと姿勢を低くして駆けだした。相手に動揺はない。

『焼き払ってあげる……』

呟きとともに、女の腕が前へと突き出される。

女が炎の魔法を開始するのと寸分の差もなく、アイリも対抗するために水流の魔法呪文を唱え始める。あり得ない速さの対応に、女の顔にも驚愕の色が広がった。

放たれた炎と水流が激突する。

一瞬だけ拮抗したあと、水流が炎を打ち破り、飛沫を上げながら女を吹き飛ばした。

だが、

『くっ、この小娘……』

苦しそうにうめいているが、それだけだった。仕留めそこなった。この状況は好ましくない。

『くらいやがれっ』

聞こえてくるその声に、アイリは横から襲ってきた男の拳をバックステップで避けた。拳の風圧がアイリまで伝わってきている。

今のアイリにとっては敵に対する恐怖よりも、どちらかと言えば苛立ちのほうが強かった。

(……手ごわい)

できるだけさっさと片付けよう。

教室に戻ったりリユータが帰る準備をしていると、階段のほうで賑やかな声がした。なにがあったのかとそちらを向くと、一人の男子がたたくさんの女の子たちに囲まれている。

囲まれているのは上級生であるクオン先輩だった。

顔も人当たりも良く、さらにはAランクの魔法使いでもある。そんな先輩が女子にモテるのはなかば当然のことで、女子からは黄色い声が飛び交っていた。

リュータはしばらくその光景を羨ましく眺めていたが、情けなくなつて目を逸らした。かばんを片手でひっ掴むと、教室を出る。

校舎の外はもう日も暮れかけていて、薄暗くなつていた。道路では車の騒音が響いている。

いらいらしながら家への帰り道を歩く。いったい、自分とあの先輩はなにが違うのだろうか。顔も、魔法も、すべては生まれ持った才能の違いのはずだ。

なんでそんなもので人生を決められなければならないのだろう。

もつと違う生まれ方をしていれば、自分だって……。

空を見上げると、きらきらと星が輝いていた。その満天の星空の中で、一筋の尾を引いて流れ星が飛んでいく。

リュータは幻想的とも思えるその光景を見ながら、ぼつりと呟いた。

「もつと女の子にモテるように……僕の、人生を変えてください」
言い終わると同時に、流れ星も消えていく。非現実的なことだと分かっていたが、それでも願いが叶ってくれたらと思わずにいられなかった。

そしてまた、情けなさがこみあげてくる。

リュータはそつと、ため息をついた。

空を見上げていた顔をおろして、また道を歩きはじめ。学校でぼんやりと考え事などしていたせいで、帰る時間がかかり遅くなつてしまった。近道のために、いつもは迂回していた公園の中を突っ切つて帰る。

人の声も車の騒音もどこか遠く感じられる。夜の公園はひと気もなく静かだった。

けれども意識のどこか奥のほうで、リュータはその音を感じ取っていた。なにかの音がしている。人の声ではない。

等間隔に置かれた電灯が辺りを照らしていた。
得体の知れないものを感じながら、明かりの中を進んでいく。
と、

「……!？」

飛んできた。女の子だった。身体を地面に打ち付けて、リュータの足元で止まった。

栗色の髪をした小柄な少女。それは学園で、リュータの上に落ちてきた少女に違いなかった。少女は何度かむせたように咳きこんで、苦しげに息を吐きだしている。

リュータは訳も分からずにうるたえた。

公園に足音が響く。

闇の中からぬつとにじみ出るように、男の姿が現れる。少女を追って行った二人組の片割れだった。

「さあて、神器を回収させてもらおうか」

男の低い声。

神器という言葉には、リュータも少し聞き覚えがあった。だがそれを思い出す暇はない。

男が空へかざした手の先に、魔力で形作られた漆黒の剣が出現する。その剣先は、違うことなく少女の身体へと向いている。

理解は一瞬だった。

その剣は間違いなく少女を打ち抜くつもりだ。うめいている少女が防御魔法を唱えようとしてもおそろく間に合わない。そして、リュータは魔法を使えない。最低位のフランクとはそういうことだ。

剣が夜の冷気を切り裂いて飛来してくる。

なにもできないと頭では考えているのに、自然と身体は動いていた。思考は後からついてくる。少女の前に立ちふさがり、受け止めるように両手を広げた。

不思議とその行動に後悔はなかった。

瞬間が引き延ばされ、リュータの目には、すべての出来事がゆっくりと動いていくように見えた。それは、結局のところ錯覚でしか

なかったが。

急速にやってきた寒さに肌が震える。この時期にこれほど寒いはずがなかった。身体の一部が、異常なまでに熱を持っている……。音も、光景も、周囲の出来事はどこか遠くに感じられ、心は自然と落ち着いていた。

熱源を見下ろすと、漆黒の剣が自分の胸を貫いているのが見えた。どこか、遠くで少女の声が響いた気がした。

欲望のストラテジー

『なんでこんなことになってしまったのだろう』

『まだ女の子とデートもしていないのに』

『たくさんの女の子といちゃいちゃしたかった』

欲望だらけの思考。

冷たい地面に横たわるその少年を、なんとも言えない視線で見下ろしながら、アイリはどうしても思わずにはいられなかった。なぜ人生で最後に考えることが、これほどまでに情けないことなのだろうか。身を挺して庇ってくれた時は非常に格好良かったので、余計にそう思えてしまう。

実際にはそれが、少年の最後の考えにはならないのだとしても。

黒髪の、どこか優しそうな顔立ちをした少年。歳は離れていないように見える。十五か、十六といったところだろう。

その少年は仰向けの姿勢で、暗い周囲へ淡い光を放ちながら、わずかに空中に浮かんでいた。

剣を突き刺された胸からは血が溢れて、彼の着ている学生服を汚していた。魔力で作られた剣はすでに霧散し、傷跡だけが残っている。だが、その傷跡も徐々に消え去ろうとしていた。

アイリがなにかをしたのではない。刺された傷は、もはや魔法でもどうすることもできないほどに深いものだった。

けれど、アイリの目の前で傷跡が消える。わずかな痕跡すら残していない。それと同時に、少年の身体も地面に降りた。放たれていた光も見えなくなる。

しばらくして、少年は意識を取り戻し、その身体を起こした。彼はまだ少しぼんやりとした目で、アイリを見る。

「君は、そうか……よかった」

死をまぬがれた少年が最初に口にしたのは、安堵の言葉だった。アイリが無事だったことを、純粹に喜んでいられるらしい。

知らないうちに、アイリの胸に暖かいものが満ちる。

と、少年は思い出したように、慌てて自分の胸を見下ろした。自分が受けた傷を確認しようとしているのだ。

「ない？」

そこに残るのは、破けた制服と大量の血だけ。肝心の怪我はどこにもない。

アイリは、困惑する少年に告げた。

「大丈夫。神器が治した」

「神器……。そうか、すごいな」

彼の言葉に、アイリはうなずいた。実際にその光景を見た側として、おそらく彼以上に驚きを感じている。

血まみれの破れた制服に手を当てて、アイリは緩やかに呪文を唱え始めた。流れるような旋律とともに、ゆっくりと制服から血が除かれていく。さらに呪文を唱えると、破けた制服が修復されていく。前の状態と完全に同じとはいかないが、そのまましておくよりましだろう。

「あ……」

その光景を、少年が羨ましそうな目で見ていた。実際には、彼から魔法が羨ましいという思念が伝わってくるため、そう見えただけかもしれないが。

少年は修復された制服をじっと見ていたが、ようやく落ち着いて余裕がでてきたのか、公園の中を見回した。

わずかながら声をひそめるようにして、問いかけてくる。

「あの、さっきの奴らは？」

「神器が無くなったのを見て、いなくなった」

「無く、なった？」

「あなたの身体を光が包んで、聖杯の形をした神器は弾けて消えた。たぶん、一回きりの蘇生用」

少年がぎょつとして、地面に腰を下ろしたまま後ずさった。なにやら言葉にならないことが彼の口から出てくる。その慌てぶりも、

分からないではなかった。一般的に、神器と呼ばれるものは大変貴重で、信じられないような高値がつく。蘇生の効果を持った神器だとしたら、なおさらだ。

しかし、それでも、

「あなたが助かったほうが、大事。……無事で良かった」
笑みを向ける。

そんな仕草をするのが、アイリには久しぶりに思えた。けれど、少年に対して自然と笑みが漏れる。

「……ありがとう。優しいんだね」

少年も表情を柔らかくして、そんなことを言う。

その一言に。

「夜……もう遅いから。それじゃ」

「え、ちよっ!?!」

困惑の声を聞きながら。

月と夜の闇に見守られながら、恥ずかしさに耐えきれなかったアイリは、少年に背を向けて逃げ出した。

空に浮かぶ三日月は、どこか目を細めているようにも見えた。そんな月の弱い光に照らされて、リュータは遅い足取りで自分の家へと向かっていた。

胸のあたりに手を当てても、綺麗にふさがった傷跡は痛みを伝えることもなく、先ほどの出来事の現実味を感じさせない。

あのあと、少女は説明を欲するリュータに背を向けたまま、あっさりと姿を消してしまった。なにかもが無くなって、死にかけてことすら嘘のように思えてくる。

考えていると、いつの間にか家へとたどり着いていた。

「ただいま」

言いながら、薄暗い中で玄関の靴を確認する。相変わらず親は帰ってきていないようだった。研究者である両親が家にいないのは、リュータにとって別に珍しいことではない。

明りが洩れていた居間を覗くと、妹がソファに寝そべりながらテレビを見ていた。帰りの挨拶が聞こえたというよりも、物音でこちらに気づいたのだらう。妹はあくまでテレビから視線を離さず、リユータを向かないままに言ってくる。

「おかえりー。どうしたの、こんな時間まで」

「……ちよつと落とし物を」

まさか死にかけていたなどとは言えない。

妹は、リユータの話にさして興味がなさそうだった。別にそれほど仲が悪いわけではない。ただ彼女にとって、魔法学園に在籍しながら魔法の使えない兄など、尊敬できるものでもないということだらう。

「ご飯食べる？ カレーできてるけど」

「ん……いいや」

「そう」

妹はそっけなく言うてくる。

不思議と今は食欲がなかった。あんな体験をしたのだから、当たり前なのかもしれないが。

重たい足取りで階段を上る。

二階の突き当たりにある自分の部屋。

リユータは床へ適当にかばんを放り投げると、後ろ手に戸を閉めて、ベッドへと倒れこんだ。電気もつけないので部屋は暗い。

静かな闇のなかで、リユータは今日の不思議な出来事を振り返った。

突き刺さった剣、自分から流れ出て行く大量の血。考えるとまた身に焼けるような痛みが甦ってくるような気がした。時間が経ってからそれらのことを思い出し、恐怖に身体が震えた。あの時は麻痺していた感覚も、今は正常に働いている。

死んでいてもおかしくはなかった。

リユータが今生きていられるのは、偶然の結果だ。もし少女が神器を持っていなければ、その効能が蘇生でなければ、今頃は冷たい

死体となつて公園に転がっていた。

考えて後悔する。余計なことを考えてしまった。だが、一度脳裏に浮かんだ悪い考えはとどまることなく、リユータの頭の中に絶えずわき上がってくる。

なにもできずに、夢を叶えることなく死んでいく。それはとても恐ろしい事だった。未練なら数え切れないほどある。

(でも、今は生きてる……)

だから、とぼんやり考えながら　リユータの思考は、まどろみのなかに消えていった。

その日は、空に厚い雲が覆っていて、とても快晴という天気ではなかった。

朝になつて学園へ登校したアイリは、何分か歩き、ようやく校舎への長い道のりを終えた。広い学園の敷地も考えものだ。そう思いながらも彼女が飛行魔法で学園に通わないのは、歩くことが健康に役立つからだった。

やっと見えてきた明るい煉瓦造りを模した校舎。その玄関の屋根には、いつもと違い、大きな垂れ幕がかかっていた。

さして垂れ幕に興味もなく、視線を下へ戻す。朝も早く人影はまばらで、その姿はどこか疲れがにじんで活気がない。その大半は歩きたくて歩いてきたわけでもないのだろう。飛行魔法を使えない生徒というのも、数多くいる。

そしてその地面を歩く人々の中に、アイリは昨日の少年を見つけた。

少年へと近づこうとして、アイリは聞こえてきた心の声に足を止めた。

『僕は……たくさんの女の子と、絶対に仲良くなつてやるんだ……！』

少年は、なんだかやる気に満ち溢れていた。もしも、昨日の事件で頭のねじが緩んだのなら、それは仕方のないことではあったが。

なんにしろ、近づきづらいことは事実だった。

昨日は恥ずかしくなって逃げてしまったので、今日こそはお礼や説明を、と思っただけだ。

アイリがどうするか悩んでいると、後ろのほうから呼びかけるような声が掛けられた。が、無視して少年を見続ける。声の相手に興味はない。

「うう、二年生になってもアイリちゃんが冷たいよ……」

少し声の調子を落として呟きながら、それでも同級生のルーナはくじけずにアイリの隣に並んできた。緑色の長い髪をしたその少女は、力無くうなだれながら、さめざめと泣きそうな表情を浮かべている。

春になって二年生に上がり、今でもアイリに話しかけてこようとするのは、もはや彼女くらいのものであった。

アイリがじつと一方向を見ているのに気づいたらしく、首をわずかに傾げ、不思議そうに尋ねてきた。

「どうかしたの？」

「別に」

相手を見ないままにはぐらかす。特に理由はないが、彼女に知られるのは面倒なことになりそうではあった。

少年が校舎のなかへ消えて行く。ルーナさえいなければ、とも思うが、少年にどう話しかけたらいいか困っていたのも確かなので、彼女に苛立ちの矛先を向けるのは八つ当たりでしかない。

アイリは隣にいる少女に知られないよう、そつと溜息を吐く。

ルーナはどこか納得できないような考えと態度でもって、アイリの向くほうを観察していたが、結局なにも分からなかったらしい。

彼女は詮索を諦め、あらかじめ持ってきた話題を話そうとしてくる。

内容は、学校が主宰する企画の事だった。アイリが少し視線を上げると、垂れ幕にダンジョン大会の受付が今日の三時までだと書かれている。代表者一名が受付をし、三人一組で参加をすることになるらしい。

話が始まる前に把握できたのは、それぐらいだった。

相手の心を読んで、話す前に内容を知るのはいけないことだ。それは分かっていた。かといって、止めるかと言えば、それは別問題だったが。

アイリは、そんなことはおくびにも出さず、ようやく口を開いたルーナを見やる。

「ところでさ。ダンジョン大会が企画されてるでしょ。実力の向上を目的にしてるから、学校から賞金も出るんだって」

別に話さなくても内容は分かるのだが。それでも、本当に楽しそうにルーナは言う。

優勝したいとか、そういうことではなく、彼女は純粋に交友を目的に誘って来ているらしかった。

「誰かもう一人誘ってさ、その大会と一緒に出ない？」

「興味ない」

そっけなく言い返す。その言葉に、彼女は明らかにがっかりしたようだった。その表情が落胆の色に染まる。

だいたい、彼女は誰を誘うというのだろう。アイリは他の人間にさしたる興味が無いし、そして他の人間はアイリのことを嫌っていた。勝手に他人の心を読むような読心魔法の使い手と、仲良くする人間がいるはずはないのだ。アイリも、別に他人と仲良くなるうとは思わない。

だが、しかし、

(昨日の男の子となら……)

ほんのり頬を赤く染めながら、彼の名前すら知らないことに気付く。

読心魔法は便利なものだが、それでもいくつかの欠点があった。

まず、多人数に使用するのが困難だということ。そのため誰の思考を読み取るうとするのかという指向性が必要になる。

そして、当たり前前に思っていることや、その時にまったく考えていないことなどは読み取ることができない。自分の名前についてじ

じっくり考えている人間など、そうそういるはずがなかった。だから、少年の名前は分からない。

(……………)

分からないことと言えば、ルーナもそうだった。

彼女からは悪意や打算が感じ取れないため、単純にアイリと仲良くしようと近づいてきているだけだった。だが、そのきっかけとなった思考を読んでいないため、どうして彼女が仲良くしてようとするのかが分からない。

アイリがいくら考えても、結論は出なかった。

どうでもいいことだ、と切り捨てて、アイリは一人で校舎の中に向かおうとする。

しかし、思いついたことがあって、ふと立ち止まった。

他人と仲良くなるうとし、友達もたくさんいるはずのルーナであれば。もしかしたら。

ルーナも、急にアイリが立ち止まるのを見て、足を止めた。様子を窺うような考えが、彼女から伝わってくる。

アイリは彼女に背を向けたまま、多少の躊躇はあったものの、それでも問いかけた。

「もし、人と仲良くなるには、どうしたらいい？」

聞いてもどうしようもないことではあった。だが、一人で考えるよりは、誰かに尋ねたほうが良いようにも思える。性格的なこともあって、アイリは他人と話したりしないし、楽しく話すための方法を考えたりもしない。

けれど、今朝はそのせいで、少年に話しかけられなかったのだ。

唐突な質問に、ルーナは少し困惑したようだったが、ぱあっ、と花が開くように感情を明るくさせた。

めずらしくアイリに頼られたことが、嬉しいらしい。

彼女は、少し考え込むようなそぶりを見せると、

「……………むう。その人がして欲しいことをしてあげることじゃないかな？　そして決して裏切らないこと」

「なるほど」

構って欲しくないのになぜ彼女が構ってくるのかは分からなかったが、彼女の言っていることには、素直に納得できる。

アイリは誰にともなく、小さくうなずいた。どうすれば、彼が自分のことを好いてくれるかは分かった。

昨日の少年と仲良くなるための戦略。その人にとって、して欲しい事をしてあげること。アイリの知っている、彼の願い。

つまり。彼がたくさんの女の子と仲良くできるよう、手伝ってあげればいいのだ。

アイリはもう一度、今度は大きくうなずくと、少年の姿を探して歩き始めた。

後ろで、誰かの声が聞こえた気がした。無視。

木目に沿って指を動かすと、指にざらざらとした感触が伝わってきた。

昨日あんなことがあったのに、リュータはまるでいつもと変わらない日常を過ごしていた。

役に立たない授業を熱心に聞き、当然のように魔法が使える同級生に嘲笑われ、いつものように放課後になった。

そして。

校舎の広間にある木製の長椅子の上で、彼はどうすれば可愛い女の子たちといちゃいちゃできるかについて考え込んでいた。俯いて、人の姿が目に入らないようにすると、余計なことを考えずに集中することができる。

魔法は必要だった。間違いない。魔法が使えなければ、この学園においては劣等生のままだ。いままで使えなかったからといって、諦めるわけにはいかない。今日からでも必死に特訓するべきだ。

あとは、女心を知ることだろうか。残念ながら、そんなことを相談できるほど、リュータには特に親しい女友達はいなかった。妹に聞くのは論外だ。果たして、本で知識を補えるだろうか？

女の子にモテるために、問題はいくらでもあった。
それでも、

(絶対、僕はやってやるんだ……！)
さらに決意を固くする。

死ぬような目に遭って、今は偶然生きている。だが、それでも次にいつ死ぬとも限らないのだ。一度も幸せな思いをしないまま、死ぬわけにはいかない。

いつか来る死への恐怖が、リユータを突き動かしていた。それは、一度経験したからこそ、強くリユータに働きかける。

今まではモテることを願うばかりで、努力もせずに漫然と生きてきた。だが、これからはそういうわけにはいかない。

まずは魔法の練習をしようと決める。拳を握り締め、顔を上げ、立ち上がるうとして。

「うわっ!？」

少女の顔が目の前にあった。リユータはぎょっとして身体を逸らす。そこにいたのは、間違いなく昨日の少女だった。

「こんにちは」

「う、あ……こ、こんにちは」

その少女に訊きたいことはいくらでもあった。

だが、とりあえず、

「ぼ、僕はリユータ。リユータ・アストレイム」

名乗り、手を差し出してみる。

少女は、恐る恐るといった様子で手を伸ばしてきた。リユータの目を一瞬、じっと見つめたかと思うと、すぐに視線を逸らす。

「アイリ」

視線が合わないまま、短く告げられる。

手が触れる。その肌はひんやりと冷たかった。

同じ状態で話すために立ち上がると、リユータはさっそく、気になっただけのことを尋ねようとする。

「あの、昨日の」……」

「 人が多い。話は、他の場所で」

人差し指を口に当てて、少女が言った。

その言葉に辺りを見回すと、ひしめき合うというほどでないにしろ、かなりの人数の生徒が広間に集まっていた。リユータも話し声で人の多さに気づいて良かったはずだが、それだけ考え事に集中していたらしい。

「何でこんなに人が多いんだ……？」

もう放課後であり、大抵の生徒たちは家へ帰宅しているはずだった。

そんな疑問に、アイリが答えてくる。

「ダンジョン大会があるから」

「ダンジョン大会……？」

思わず、リユータは聞き返す。どこかで聞いたような気はしたが、魔法の使えないリユータには関係のない話なので、今まではすべて聞き流していた。

ダンジョン大会について説明しようとしたのか、アイリが口を開いたが、それを遮って叫び声が響く。二人して、そちらを向いた。

見ると、人の合間を縫うようにして飛ぶ小さな妖精を、一人の少女が慌ただしく追いかけている。走ってくる少女の叫んでいる内容を聞くに、妖精が壊した物の賠償金額の話らしい。

妖精は女の子らしい容姿と声をしていたが、しゃべり方だけは男の子のような癖があった。

「心配しなくても、大会の賞金で全額返してやるって！ 受け付けはしてきたから」

「迷惑なことばっかしてるあんたと、誰が組むのよ。受け付けは代表者一人でできるけど、ダンジョンはそういうわけにいかないわよ」
噛みついてくる少女に、その妖精は不敵な笑みを返した。少なくともそう見えた。顔がどこか引きつっていたようにも思えたが。

妖精はその場に空中で止まると、きよろきよろと視線を辺りに向け、そして周囲の人間はそろって顔を逸らした。妖精の視線が、リ

ユータとぶつかる。

ばっ、と手を広げて腕をこちらに向けてきた。

「あー、その、えーと……い、一緒に大会に出るのはこの二人だ！」
その言葉を聞きながら、思わずリユータは左右を見回した。波が引くように周囲の人混みが離れて行く。

隣にいるアイリだけが、まるで動じるものは無いかのように身じろぎもせずに立っていた。

妖精に怒っていた少女がこちらに顔を向け、ぼつり。

「……だれ？」

「……」

その言葉は、とりあえず、リユータの心の内さえ代弁しているように思えた。

ダンジョン大会の罫

その妖精は手の平ぐらいの大きさで、短い桃色の髪をしていた。背には薄く透明な、虫のような羽。花を模した黄色いひらひらのスカートが、何度も揺れる。可愛らしい顔の中では、二つの瞳が活発に動いていた。全体として実に可愛らしい妖精の女の子に見えたが、話し方は男の子のような癖があり、女の子と言いつ切るのは難しそうだった。その小さな身体の周りには細かな光の粒が無数に輝いている。

自らのことをエミルと名乗ったその妖精は、ぶかぶかと空中に浮かびながら、びしっとリユータを指さしてきた。いつもより人の集まる広間にあつて、周囲の話し声に負けずに言ってくる。

「ということだから、一緒に優勝を目指そうぜ！」
「……………」

つまりは、ダンジョン大会と呼ばれる競技で賞金を得るために、リユータたちを利用するつもりらしい。競技は、人工ダンジョンに挑戦して宝石を持ち帰るまでのタイムを競うとのことだった。

競技の内容を聞いていなくても、関わり合いになりたくないのは確かである。が、ここまで聞いて今更無視することができないのも事実だった。

リユータが悩んでいると、横にいたアイリが無感情な瞳を向けてくる。最初は意味が分からなかったが、どうするのかと問いかけているのかもしれない。

しかし、そんなことを問われても、彼としても答えようがなかった。

リユータが黙っていると、これ幸いと思ったのかエミルは続けた。きた。

「実力を試す絶好のチャンスだぜ!？」

「ないし。そんな実力」

試すまでもなく一番下だ。

「優勝すると賞金が！」

「いや、いくらだか知らないけど、その賞金で壊した物を弁償するんだろ……？」

被害者らしい女の子が、怖い目でエミルを睨みつけていた。

「あー、ええと、優勝すれば女の子にモテモテにつ！」

「む、むう……」

弱いところを突かれて、リユータは口ごもる。だが、優勝できる可能性など無いに等しい。どちらかというとな面倒事に巻き込まれる方が嫌だった。

断るための口実を探して、妖精から視線を逸らす。

そうしていると、偶然というべきか、リユータは広間の端にクオン先輩の姿を見つけた。Aランクの魔法使いにして、女の子にモテモテ、なにごとにも器用にこなす有名人。やはり今もたくさんの女の子たちに囲まれて談笑している。

と、クオン先輩はリユータのほうを見ると、なにかに気付いた様子で驚いた顔を見せた。周りの女の子らになにごとかを話すと、すたすたとこちらへ近寄ってくる。

(え？ なんでだ？)

理由が見つからず、リユータは困惑した。だが、クオン先輩の目的は彼ではなかった。先輩は、リユータの背後にいるアイリへと話しかける。

「やあ、久しぶりだね」

クオン先輩が言う。どこまでも爽やかに。

どうやら、二人は知り合いらしい。どのような関係かと思いつながらアイリを見つめると、期せずして視線が合った。どこか気まずさを感じて、リユータは視線を逸らす。

そんな様子を見守っていた先輩が、もしかしたらアイリが挨拶を返してくれるのを待っていただけかもしれないが、彼女は無言だった。アイリに問いかけた。

「この場所にいるということは……君もダンジョン大会に出るのかい？」

「……知らない」

後ろでちょこんとリュータの制服を掴みながら、アイリが簡潔に答える。

自分のことなのだから知らないことはないだろうとリュータは思ったが、服を掴む彼女の仕草に疑問は氷解した。リュータの選択に合わせるということなのだろう。

おそらく彼女は、リュータに話があつてきたのだろうから、確かに別行動する理由もない。

リュータは気になって、優しい表情を浮かべている先輩へと尋ねた。

「先輩は……大会に出るんですか？」

気にも留めない相手からの質問にも、クオン先輩は表情を変えず、「うん……女の子たちに一緒に出てくれと頼まれてね。断るのも悪いから」

さらりと告げられた言葉に、思わず殺意が沸く。かといって、殴りかかっていっても敵わないのは目に見えていたが。

遠くから女の子の声が聞こえてくる。

「ああ、すまないね。呼ばれてるみたいだ。もし君たちもダンジョン大会に出るのなら、気持ちのいい勝負をしよう。それじゃあ」

クオン先輩はそう言うと、こちらに片手を上げる仕草で別れの挨拶をして、背を向けて去っていった。ただ、爽やかな笑みだけを残して。

そんな先輩の後ろ姿を見つめながら、なんとも形容しがたい敗北感を感じていたリュータは、唐突に気付いた。

（そつだ、勝てる……！もしかしたら……っ）

このダンジョン大会は、唯一にして最大のチャンスなのだ。ダンジョンを探索して宝石を見つけるのなら、運の要素が多分に出てる。

この大会ならば、クオン先輩に勝つことができるかもしれない。逆に言えば、この機会を逃せば自分は一生あの天才に勝つことはできない。

「……のった」

「へ？」

呟いたリュータに、ぷかぷかと宙に浮かんで様子を見ていたエミルが、不思議そうに首を傾げた。

そんな彼女に、リュータは言い直す。

「大会の話、僕も乗った！ 絶対に優勝しよう……！」

「お、おう！」

戸惑いの表情をさっと明るくして、エミルが声を上げた。

「え？ 本当に出るの？」

不審そうに問いかけてきたのは、エミルを追いかけていた少女だった。少し忘れかけていたが、まだその場に残っていたらしい。エミルに金を弁償してもらわなければならないのだから、当然か。彼女は呆れたように口を半開きにしたまま眉根を寄せて、エミルとリュータを交互に指差している。

「うん。出るつもりだけど、いけないかな？」

「いや、まあ、あたしは弁償してもらえたらなんでも構わないけど、気乗りしない声。それでも、別に止める理由もないと判断したらいい。だからといって、リュータたちが本当に優勝するとは信じていないだろうが。」

名も知らぬその少女から視線を逸らすと、リュータは背後を振りかえった。アイリがじつと、無感情な瞳でこちらを見つめている。その視線になんとなく気遅れしながらも、リュータは言った。

「あの、すまないんだけど……一緒に出て欲しいんだ」

クオン先輩に大会に出るかどうかわ問われて、彼女は知らないと答えた。それをリュータの選択に合わせるつもりだろうと思ったのは、勝手な予想でしかない。

断られる可能性もある。リュータは唾を呑んだ。

だが、
「頑張る」

アイリは、どこにもやる気を見いだせない無表情のまま、そんな風に答えてきた。

エミルは思う。

自分は幸運かもしれない。

なんだか知らないが、二人はダンジョン大会に参加する気になつたらしい。

にやにやと笑いをこらえられないままに、エミルは嬉しさに宙を一回転する。

(よっし。へんな女に付きまとわれた気はどうすつかと思つたけど、どうにかなりそうだ！)

もし優勝できないようであれば、どさくさに紛れて逃げだしてもいい。そう考えると、厄介事はなくなったも同然だった。

エミルは心の中でこぶしを握りしめる。

馬鹿な男のおかげで万々歳だ。まさか自分が優勝できないとも思えないが、万が一ということもある。

大会終了後、どうやって逃げ出そうかとエミルは算段をつけ始めた。

どうやら、始まる前から逃げる算段をしているらしい妖精の思考。それをぼんやりと読み取りながら、アイリは先ほどのやり取りを思い返した。

もしかしたら。無視すればよかったのかもしれない。

リュータの制服を掴んだまま、アイリはそんなことばかり考えていた。急にやる気を見せだした彼の背中を、じつと見つめる。

リュータはどうやら、上級生であるクオンのことが嫌いらしい。

だから、自分がクオンのことを無視して、あまりいい印象を持っていないところをリュータに見せれば、もっと仲良くなれたかもしれない。

なかった。

そんな難しいことが自分にできるか、アイリには分からなかったが。

リュータは妖精と少しばかり話すと、どうやって優勝するか考え始めていた。妖精とは違い考えがはつきりと もっとも読み取るうとするやる気が違うから当たり前だが 伝わってくる。どうやら、本気で優勝するつもりらしい。先ほど参加を持ちかけられて、もうすでにそんな考え方ができるのは、純粹にすごいことだと思えた。

（順応性が、高い……）

しかし、アイリにしても、誰かと目的を目指すのは楽しみに思えた。友達付き合いをなくして久しく、最近はめっきりそんな経験がない。頑張ろうという気にはなってくる。

つまり。

結局のところ、アイリも順応性が高いのだった。

人々の歓声が聞こえてくる。

広間にある、校庭とは反対側の出入り口は、校舎に囲まれた中庭へつながっている。普段は噴水や花壇があり、昼時にここで友人たちと食事を取る者も少なくない。だが現在、その中庭は様変わりしていた。何らかの魔法によってだろうが、噴水は退けられ、代わりというべきか石と土でできたダンジョンの入口が、煉瓦造りを模した校舎に隣接するようにして大きく口を開いていた。薄暗く、入口の奥はよく見えない。

そのダンジョンの入口の前にはたくさん生徒がひしめき合っていた。それらは全員参加者で、腕にチームの番号が書かれた腕章をつけている。離れたところに役員席があり、主宰陣である学園の教師たちが椅子に座っている。上空には、魔法で映像が映し出されていて、大会が開始されればダンジョン内部の様子が実況されるらし

い。その映像を見ようと校舎の窓際に、参加しない生徒たちが詰め寄っていた。

(うーん……)

ぐるりとたくさん参加者たちを見回し、それからアイリに元気良く話しかけて無視され続けているエミルという図を眺めてから、リュータは首を曲げて自分自身の姿を見直した。あまりに周囲の熱気がすごく、どうして自分はここにいるのだろうなどと思えてくる。が、クオン先輩への妬みを別にしても、そもそも女の子にモテたという悩みを抱いていたのだから、この大会への参加は有意義なものはずだった。

大勢の生徒がこの大会に注目している。

たとえそれが、見る者にとって暇つぶしに過ぎないのだとしても、優勝すれば、自分の学園生活は変わるはずだ。

これは、女の子にモテるための第一歩なのだ。

静まり返る中庭。

「七 ……六 ……」

リュータは高らかに響くカウントダウンの声を聞いた。教師の証しともいえる緑のペンダント。それを首に下げた中年の男が、小さな台に乗って数を数えている。たしか審判だったはずだ。先ほども、彼がルール内容を話していた気がする。

宝石を見つけ、最初に持ち帰ったチームが優勝。

腕章さえしていれば、チームの誰が宝石を持って帰ってもゴールとみなす。

他チームを妨害してはならない などなど。

他にも細かいルールはあったが、大体はこのようなところだろう。数えられる数はどんどん小さくなっていく。エミルはリュータの肩辺りを、さすがに緊張した様子で飛んでいた。それに引き換え、アイリは何を考えているのかもわからない無表情。頼もしさを感じるべきなのかもしれない。

リュータはその二人から入口へ視線を戻し、そして、

「スタート!!」

ひととき大きく審判の音が響いた。

その声に、一斉に選手が走り出す。大きく口を開けたダンジョンの入口へ、選手たちが殺到した。その勢いに、リュータは圧倒された。

「あいつらに先を越されちゃう!」

傍らに浮かんでいる妖精の叫び声。選手たちの走る音に紛れながらもなんとか聞こえてくる。

先を越されるといっなのはエミルの言うとおりだったが、前方は完全にふさがつていてリュータたちが通れるような隙間は無い。

どうするべきか困っていると、アイリがすっと手を伸ばし、喚いて一人だけ飛んで行こうとする妖精を押さえつけた。リュータにはもはやどうすることもできず、前方の成り行きを見守るしかない。

と 走り出した選手の前で地面に穴が開き、一瞬で生徒たちが雪崩れるように飲み込まれていく。

「ちょっ!?!」

驚きの声を上げたのはエミルだった。

リュータたちの見ている前で、選手たちが深い暗闇の中に消える。ハイテンションに響くアナウンサーの声。

「おおおっとおっ! 一瞬で選手たちの半数以上が飲みこまれていきましたっ。序盤にして波乱の展開。いったいどうなってしまったのかあっ!?!」

「ふ、ふざけんなああ!?!」

エミルの叫び。他にもちらほらと聞こえてくる。

それらを耳にしながら、リュータは表情を硬くしながら呟いた。

「……ま、まずい。大会役員が本気すぎる」

逆に言えば、半数の選手が減ったため、優勝するチャンスが増えたことになるのかもしれないが。

それでも、喜んではいられなかった。

横から、ふらふらとエミルがリュータに問いかけてくる。

「どーすんの……？」

最初とはテンションの違った声。その気持ちもわからないではなかった。もっとも、単に叫び疲れただけかもしれないが。

ともかく、冷や汗を浮かべながらリユータは答えた。

「ま、待とう」

「待つ？」

問いかけてくるエミルに、リユータは頷く。

入口のほうを指差して、

「ほら、入口は大きな穴が開いたけど、左右の壁際は細い道が続いてる。でもさっきの罠のことを考えると、片方の道はまた罠が」
言った瞬間、右側の壁から棒が突き出して、先へ進もうとしていた生徒を穴の奥へと押し出した。悲鳴とともに生徒たちが穴へ飲みこまれていく。

「あー………罠があるかもしれないから、誰かが行くのを待つって様子を見ようかと」

「む、無謀と勇気は違っつて言うしねー。トップを突っ走りたいけど、ここは我慢するぜ……」

格好良さそうなことを言うものの、エミルは顔を引きつらせて渴いた笑顔を浮かべていた。

二度目の罠を目にして、ここにきてリユータは最初に説明されていたルールの意味を知った。

チームの誰が宝石を持って帰っても、ゴールとみなす。

胸中の強い苛立ちをどこに吐き出したらいいかわからずに、仕方なく、リユータは心の中で毒づいた。

(この競技は参加者の大半を脱落させる事を前提に作られている

！)

妖精という生き物

入口のど真ん中に落とし穴を開ける大掛かりな罠。更には左右に残った通路の片方さえも罠が仕掛けられているという、念の入れようだった。

もとよりチーム全員が帰還できることなど、ダンジョン大会を主催した教師たちは考えていなかったのだ。何らかの障害は用意されているだろうとリユータは思っていたが、ここまで悪質な罠が配置されているなど予想できるはずもない。

なんとか心を落ち着かせながらリユータが様子を見てみると、左側の通路を進んでいた参加者たちが順調にダンジョンの奥に消えて行き……つんざくような悲鳴が入口まで響いた。そして、少なくとも参加者たちが、進むでも罠にかかるでもなく、恐怖によってスタート地点に取り残された。だが、罠の恐ろしさに二の足を踏む参加者が多かったが、それでもこのまま入口で固まっているわけにもいかず、進むうとするとするチームもちらほらと現れ始める。

で、

「なあ、卑怯だと思わないか？」

「あー、いやー、魔法の使えない自分としてはしょうがない手段と
いうか……」

言ってくる上級生の刺々しい言葉に、リユータは苦笑いを浮かべて言い訳する。他チームが積極的に進むうとする後ろを、リユータ達は追うようにして歩いてきた。これなら恐ろしい罠があったとして、餌食になるのは自分たちではない。もっとも、先を歩く彼らにしてみればいい気分ではないだろうが。それを承知で、リユータたちは彼らの後に続く。通路は少し下り坂になっていて、間違つて上級生たちに追いつかないよう、気をつけなければならなかった。

そのまま歩いていると、

「ん？ なんだこりゃ？」

通路の途中でそう呟いたのは、リユータに小言を漏らしていた上級生だった。彼は足を止めて、横の壁を見つめ始める。呼ばれて、残り二人の上級生もその場所に集まった。いつのまに彼らに近寄ったのか、エミルも羽をはばたかせ、上級生たちの上から問題の壁を覗き込んでいる。

「うわっ、ボタンだ！」

その声で初めてエミルの存在に気づいたのか、上級生が邪魔そうな目で頭上の妖精を見つめた。リユータはそれには構わず、上級生の陰に隠れている壁を想像した。なんでもないはずの通路の土壁に、ボタン。

（怪しい、よな……）

押してみたい気持ちにはなるが、見なかったことにするのが無難だ。どうやら上級生たちもそうすることに決めたらしく、呆れたような溜息を吐きながら先へ進もうとする。

「えいつ」

……が、見ぬふりをできない者もいたらしい。

そこには輝くような笑顔のエミル……と、フードをかぶった名も知れぬ上級生の少女が一人。二人の指が同時にボタンへと突き出されていた。

エミルの軽快な声と、さらに輪をかけて軽快な効果音とともに、ボタンが壁の中へと押しこまれる。

そして 遠く、背後の上り坂のほうから、地響きのような音が鳴り響いてくる。リユータは嫌な予感に振り返るが、実際は見ないでも状況が想像できた。

通路をふさぐほどの巨大な岩が。

こちらに向けて下り坂を転がってきていた。

「逃げるお おおおおっ!？」

岩の出す轟音に負けぬ、大声。

それを叫んだのは誰だったのか、などと悩む必要はなかった。自分の喉が、張り裂けそうな痛みを訴えている。無意識の内に叫んで

いたらしい。逃げることまでは無意識に頼れず、リユータは意識的に足を動かす。

どこまでも続く一本道。当然と言つべきか、足を止めることのできないこの苦行も、どこまでも終わることがない。リユータは誰に言つてもなく他の五人にがなつた。

「なにか魔法はないのか!？」

「こんだけ走りながら魔法なんて使えるかつ!」

上級生によつて即座に言い返される。確かにこの状況では精神集中どころの騒ぎではない。

どうしようもないかと思われたその時、エミルが叫ぶ。

「見る! 脇道があるよ!」

彼女の言う通り走る先には横へ抜ける脇道があつた。そこへ飛び込めば巨大な岩も襲つてこないだろう。

だが、

「駄目だ」

リユータはみんなを止めようと声を出すが、時間は無かつた。しかし彼の考えを察したのか……それとも同じ考えにたどり着いていたのか、脇道に逃げ込もうとしている妖精をアイリが無造作に掴んだ。

エミルのくぐもつた叫び。妖精を掴んだまま、アイリはリユータの横を追走してくる。

リユータたちが真っすぐ走る中、上級生のチームは脇道に飛び込んでいった。そして、すぐさま聞こえてくる悲鳴。

振り返る余裕もなく走り続ける。と、後ろから大きな音が聞こえた。途端に、リユータは疲労から足をもつれさせるように地面に倒れ込む。恐る恐る振り返ると大きな岩は、徐々に狭くなつていらしい道につつかえて、その動きを停止していた。

ようやくアイリの手の中から脱出したエミルが、ぷはつと息を吐く。

「ど、どういうことだったの?」

「わ、罨だつたんだ……。これ見よがしに脇道を造つて、そこに逃げ込ませるための……」

驚いているエミルに、リユータは息も絶え絶えに告げる。それには疲れ切つた身体に多大な労力が必要だったが、その甲斐はあつたようだった。エミルは感心したように頷いた。

「は……。凶悪すぎるぜ、このトラップは。よくこんな気付いたね」

「いや、気付いたのは僕だけじゃないみたいだし……」

そう言つて視線をアイリに向けると、彼女は特に疲れた様子もなく無表情に首を傾げ、こちらを見返してきていた。

その様子に、リユータは苦笑するしかない。

(情けないな、僕は……)

女の子が平気な顔をしているのに、こんなに疲れ果てて地面に突っ伏しているなんて。

どうにか身体を起こすと、リユータは壁にもたれかかった。身体を起こしたのは意地のよなものだったが、そこまでだった。日々の運動不足を痛感する。それでも、毎朝歩きで学園まで通っているのだが。他の参加者たちはどうしているのだろう。少数の妖精や亜人種たちとはともかく、運動不足の魔法使い達がこの激しい運動に耐えられるものだろうか。もしかしたら、普通の魔法使いたちはもつとひどい有様なのかもしれない。かといって、アイリの平然とした様子からするに、やはり自分が体力のないだけかもしれないが、しばらくして、リユータはゆっくりと立ち上がった。

アイリは黙つたまま、こちらの体力が回復するのを待つてくれていたらしい。色々考えながら休んでいると、だいぶ楽になってきた。一番騒がしそうなエミルは、と言えば……。先ほど転がってきた大きな球状の岩と、通路の隅の間に生まれた隙間に潜り込んで遊んでいた。確かに身体の小さいエミルなら入り込めないことはないが、そもそも罨は人間しか想定していないのかもしれない。落とし穴など宙に浮く妖精が落ちる訳はないし、その後の突き出す棒もよほど

運が悪くなければ妖精にはぶつからないだろう。

わずかな隙間からにゅっと足だけ出ている光景を、リュータはじつと見つめた。エミルはこの競技で、一番有利な立場にいるのかもしれない。

（いや、あの身体でどうやって宝石を運ぶのか、ってことかもしれないけど）

小さな妖精の姿が完全に巨岩の向こうに消える。

彼女に聞こえるように少し大きめの声で、リュータは呼びかけた。「おーい、変なことするなよ。待たせて悪かったけどそろそろ行くから」

だが、その言葉を言い終わる前に、興奮した様子でエミルが帰ってくる。

彼女は腕を大きく広げながら自分の見た光景を語る。

「すごかったぜ。あの脇道に槍が突き出してるの、槍っ！」

「や、槍？」

「そうそうっ。一緒にいた奴ら、あれにやられたんだと思うんだけど、影も形もないんだよ。きっと魔法で飛ばされたんだろうね！」

どこか興奮したようなエミルの言葉に、リュータは素直に納得した。

いくら畏といっても、学校主催の大会にすぎないのだから、何らかの安全対策が施されていて当然だろう。致命傷と思える打撃を受けそうになった時、定められた場所に転移させられるのか。もちろんそうなれば、その人物は失格として扱われるに違いない。

「そんなこと、事前に説明されなかった気がするけどな……」

主催陣に文句を言うように、リュータはつぶやく。

ともあれ、そんなことを考えていても仕方ないのだろう。

「はあ……、いこうか」

「んー？ おうっ！」

快活に応えてくる妖精ほどに元気は出なかったが、幾分か楽になつてきた足に力を込める。そして何事もなかったかのように、アイ

りはてくてくとついてくるのだった。

行く手には、薄暗い通路が再び続く。

ところどころに松明が配置されていたが、その数は多くない。遠くのほうに赤い炎の灯りがぼんやりと見えたが、こちらの足元までとどいてはいなかった。先ほどまで一緒にいた上級生たちは魔法で明かりを作っていたが、いまはただ、エミルの周りに浮かんだ光の粒だけがうつすらと地面を照らしている。

先頭のエミルはやたら騒がしく喋っていて、うんざりとした気分
でリュータは通路を進んだ。けっこうな距離を進んだのだと思う。

そして、

「……………！」

道が開けた。

いくつもの通路が、その場所につながっているようだった。別の
通路から同じくたどり着いた他チームと、はち合わせる。

「うおうっ、いきなりでてくんな!？」

びっくりしたようにエミルが言う。

彼らも驚いた様子でリュータ達を見たが、すぐに視線を空間の奥
へと移した。それにつられるようにしてリュータ達もその空間を観
察する。

通路と比べて明らかに広いその空間は、何本もの松明で明るく照
らされていた。壁は相変わらず土や石を押し固めたように造られて
いたが、他よりもなめらかに整えられて見えた。

そして、空間の奥には石の台座があり、そこにきらきらと輝く宝
石が置かれている。

「宝石だ！」

気づいたのは他チームとほぼ同時だった。だが、いち早く動いた
エミルが先行する。置かれている宝石は一つだけ。先に奪わなけれ
ばゴールできなくなる。

しかし、心配する余地もないほどに速く、エミルは音を置き去り
にして一直線に飛行する。走り始めたリュータも含めて全員、誰も

それに追いつけない。

(いや、待て……っ)

今までのことを思い出す。ダンジョン。罨。宝石が置かれるこの場所に、罨がないわけがない。

「きゃあああああああ!？」

エミルの悲鳴。

突然、真横の壁に穴が開き、周囲のものの吸引を始める。小さな妖精は必死に羽を動かして、飲み込まれまいと抗っていた。穴の中では鉄でできた口が開閉を繰り返し、穴に飲み込まれたものを噛み砕こうと耳障りな音を響かせている。もつとも、実際には噛まれる前に安全装置が働いて、魔法で転送されるのだろうか。

他チームとは横一列、どちらが先に宝石にたどり着くか分からなかった。当然、誰が宝石を持ち帰ってもかまわないのだから、エミルのことは無視する他にない。

罨に飲み込まれても危険はないのだから。

「たーすけるー!？」

無視。

優勝するためにはしかたないことだ。

だが、心に小さなとげが刺さっていた。そのとげがなんなのかわからないが、それがそのまま、心の心臓とでも言うべき場所を貫こうとしている嫌な感覚。なにかを忘れている気がするのに、それを思い出せない。

だが、なにか大事なことであつたはず。

「……罨は、妖精を想定してない」

声に、リユータは足を止めた。競り合っていたチームが、エミルのかかった罨を避けながら走り去っていく。

今の言葉は、自分が無意識に呟いたのだろうか。なんにしる、それによつてはつきりと思ひ出した。

罨が妖精を想定していないのは構わない。だが想定していないなら、安全装置が妖精を転移させるかどうか、分からなくなってしまう

う。もし魔法が働かなければエミルはあの鉄の口の餌食になるだろう。

徐々に後ろへと引つ張られていくエミル。あわてて駆け寄ると、リュータは必死に手を伸ばした。なかなか手が届かないことが、苛立ちを誘う。もしかしたら馬鹿な真似をしているのかもしれない。妖精だから危ないかも、などという変な予感を信じたせいで、優勝を投げ捨てているのかもしれない。

だがこの行動に後悔はなかった。
早くエミルを助けなければ。

「……………」

届いた。エミルの小さな手をぎゅっと右手で握り締める。

その場から退避しようとしたが、想像以上の吸い込む力に抵抗されて、リュータはうめき声を上げた。どうにか地面に踏ん張るものの、そのまま後ろにさがれるとは思えなかった。諦めそうになる心はどうにか押さえていると、急に、左手を強い力で掴まれる。リュータはエミルの手を握り締めたまま、一気に後ろへと引つ張られた。そして、吸引力の圏内から逃れる。

地面に倒れたリュータを、アイリが無表情で覗きこんでいた。彼女が左手を引つ張ってくれたらしい。

「うー、あー、死ぬかと思っただぜ……………」

リュータと同じにぐったりした様子で地面に転がりながら、エミルが呟いた。それから彼女は、リュータやアイリのほうに顔を向けると、何度か躊躇するように口を開閉してから、

「その……………あ、ありがとう」と小さく言った。

恥ずかしくなったのか目を逸らすと、そのままエミルは視線を台座のほうに移した。そして、疲れた顔を悔しそうに歪める。

「ああ、宝石が取られる……………」

「しょうがないさ……………。ここまで来ただけでも頑張ったほうだ」リュータがそう慰めても、彼女はまだなにかを言いたげだった。

自分が罨に引つ掛かった後ろめたさからなのか、結局なにも言つてこなかったが。

もう一つのチームは宝石へ目前まで迫っていた。罨にかかることもなく、順調に進んでいく。今となつては、その姿を、ただ黙つて見ていることしかできない。

優勝はしなかった。だが、自分が選んでこの結果になつたのだから、文句を言うわけにはいかなかった。いや、そもそも諦めるのが早すぎるのかもしれない。可能性に過ぎないが、宝石がこの場所にしかないとは限らないのだ。他にも同じような台座があるのではないか。

どちらかと言えばそれは、自分への慰めのようなものだった。リユータ自身、自覚はあつた。そして、他のチームが台座までたどり着く。

地面に転がつたままで、リユータは悔しさに唇をかみしめる。エミルは遅々とした動きで宙に浮かぶと、リユータの肩あたりに腰を下ろしてきた。

他チームの一人が、輝きを放つその宝石に手を伸ばす。リユータはそれを絶望に染まつた表情で見た。

そして、その指が宝石に。
触れた瞬間、宝石が爆発四散し、手にした生徒たちを吹き飛ばした。

「ふ、ふざけんなあああ！？」

リユータは思わず叫んだ。それはエミルも同様ではあつた。

気づけば、アイリも半眼になつてその光景を見つめている。落ちて着いていた彼女まで無表情を崩すと、もうどうしようもないのではないかという気分になつてくる。

吹き飛ばされた生徒たちは、急に地面に開いた穴へ飲みこまれていった。あの爆発を受けて彼らは無事なのか気になるところではあつたが、とにかく台座の宝石は偽物だつたらしい。

宝石自体が罨なのだと、誰が思うだろう。

「い、いや。前向きに考えよう……まだチャンスはあるってことだ」
言ってみるが、説得力はどこにもなかった。エミルはどこか疲れ
切った表情でリユータの話を聞いている。

そして、それ以上に話すだけの体力は、リユータにも残されてい
なかった。それでも、優勝するためには、また歩きだすしかない……。

寶石

一時、休憩。

ダンジョン大会が始まってからだいぶ時間が経った。

突風、水鉄砲、宝箱の形をした怪物に動く骸骨の集団。フードを目深にかぶった魔法使いが大きな力と戦っているのを見たし、リユータと同年齢の女の子二人組がどこから湧いた触手に足を絡めとられて逆さ吊りになってもいた。なんでもありの罾や怪物の数々に、リユータはいいかげん限界近くまで疲弊していた。エミルたちも同様だろう。どれだけの時間が経ったのか分からないが、他のチームの姿を見かけることも減り、音もなかなか聞こえてこない。それでもたまには遠くから物音が聞こえるので、自分たち以外全滅したということはないのだろうが。

それでも、他のチームと会う前に、自分たちがやられてしまうかもしれない……などと思った時、

「……………」

リユータは目を細めた。

赤みがかつた明かりが、土に囲まれた通路の奥の暗がりからこちらへと近寄ってきている。思わず声を上げかけて、やめる。もしかしたら何らかの罾や新たな怪物の可能性もあった。迂闊に行動しない方が良い。

「うおっ、なんだありゃ!? おおーい！」

「……………」

とりあえず思ったのは、エミルの周りに光の粒が浮かんでいたため、自分たちがここにいることは筒抜けで、声を上げないのは無意味だったということだが……すぐさまエミルの胴体を片手で捕まえると、リユータは握り拳をぐりぐりと彼女の小さな頭に押し付けた。

「いてえ!?! ちょ、なにすんのさ!?!」

「やかましいっ!」

一瞬の迷いもなく相手に声をかけたエミルに、リユータは理由を告げるでもなく怒鳴りつけた。いつまでもそうしているわけにもいかず、遅まきながら体勢を整える。戦うためではなく逃げるためである。

が、心配は杞憂に終わった。

暗い通路の奥から現れたのは、一応、リユータも見知った相手だった。好感を持てるかどうかは別として。

実力も成績も、及びもつかないほど優秀な上級生。クオン先輩とその仲間であるう二人の女の子たちだった。リユータは安堵の息を吐いたが、向こうも似たようにほっとした表情を浮かべている。

「君たちも無事だったのか……」

クオン先輩が話しかけてくる。その声には、疲れの色さえ見えな。平然と立つその姿への劣等感を消すことができず、リユータはうつむいて石の転がる地面を見つめた。蹴り飛ばすと、石と石のぶつかる音が静かな通路に響いた。

「ちっ、さっさと罫で全滅してればいいと思ってたのに。しぶとく残りやがって」

それは、あまりにも本音すぎた。リユータは思わず嘔き出す。

もちろん、言ったのはエミルだった。クオン先輩はともかくとして、その取り巻きだかなんだかの女子二人。胸のリボンで判別するに、三年生と一年生。が彼女に詰め寄って、手を伸ばして捕まえようとす。その腕の合間を器用に飛びまわり、エミルは怒る女子たちを華麗に避けていた。

リユータはなにをすでもなくその光景を眺める。

エミルの敵をつくる力はある種の才能なのかもしれない。すごいとは思っても、欲しいとは思えない才能ではあるが。そして、それとは反対の才能を持っているのが、クオン先輩という男だった。

彼は喧嘩する三人を指で示しながら、爽やかに言ってきた。

「こんなやりとりの最中に言うのもどうかと思うけどさ。このダンジョンは厳しいし、僕らで協力できないかな？」

こちらのチームの、誰に対して、というような言葉の内容ではなかった。が、おそらくアイリに言っているのだろう。視線もどちらかと言えば彼女に向かっていているような気がする。

だが彼女は無言のまま、ついつと視線を横に逸らすと、その辺を飛んでいた妖精をあつさり捕まえて指先で弄くり始めた。

「うにゃあつ!?!」

足だの羽だのを引つ張られて奇妙な声を上げるエミルのことは、この際どうでもよかった。クオン先輩から提案を受けたアイリは、まるで喋る様子もなく先輩を無視している。何か理由があるのだろうか……。

そんなアイリの態度を目ざとく見つけた上級生のほうの女子が、腹を立てたらしく声を荒立てた。

「ちよつとあんた、わざわざクオンくんが話してるのに。なによ、その態度は!」

「お、落ち着いてください。協力しようってそばから喧嘩しても仕方ないですし……」

アイリに詰め寄ろうとする女上級生の間に、リュータは割って入った。彼女は鬱陶しそうな表情でこちらを見たものの、クオン先輩の邪魔はしたくなかったのか、案外大人しく身を引いた。

リュータはちらりとクオン先輩に目を向ける。

同じように争いを止めようとしていたらしい先輩は、笑顔で言ってきた。

「協力してくれる、ってことでいいのかな?」

少なくともそれは、利用できるだけ利用しよう、などという笑みではなかった。表情で心の裏が読めるほどリュータは鋭くないが、そういう先輩ではないだろう。

そんな先輩に対してリュータは、自覚できる程にぎこちない作り笑いを浮かべた。人間として、女の子にモテまくっている先輩は気に入らなかつたが、この競技だけで考えるなら先輩の提案は願ってもない事だつた。

相談しようとしてゆっくり後ろを振り向く。と、アイリがエミルのことを逆さ吊りにしているところだった。気にしないことにして、問いかける。

「十分メリットはあるし、協力しようかと思うんだけど……。嫌なら言ってくれば」

自信のなさそうなその言葉に、アイリは足首を掴んだ妖精を目線の高さまで持ち上げ、

「平気」

とだけ答えた。

その言葉にほっとして、リュータは先輩に向き直った。なにも訊ねられなかったエミルの口汚い野次が聞こえたが、気にすることはないだろう。

「ところで、協力ってどうするつもりなんですか」

「うん？ 魔法使いが何人も集まれば、できることだって増えるだろう？」

先輩は当たり前のように言ってくる。

様々なことに対応できるという意味では、間違っていないのかもしれなかった。それぞれ違う分野を得意とする魔法使いが、互いを補い合うという意味では。

(魔法使いが何人も集まれば、か……)

急に居心地の悪さを感じ始め、リュータはまたアイリのほうを振り向くと、彼女のいじっていた妖精に手を伸ばす。彼女は無言で無表情のまま、あっさりと渡してくれた。桃色髪の妖精も、手足を引っ張られるよりはましだと思ったのか、大人しくしている。

そしてリュータは、その小さな妖精を盾にするように、先輩との間に掲げた。突然の行動に先輩が驚いたような表情を見せるが、気にしない。

フランクの魔法使い、リュータ・アストレイム。

それが自分だった。

魔法使いとは名ばかりで、実際は魔法の知識が多少あるだけに過

ぎない。魔法自体はなにも使えないのだから、先輩が言う意味での協力などできるはずもない。

なのでリユータは、魔法使いでありなんとなく手軽なエミルを盾にしたのだが。

(いや、違うか……)

自分の考えの一部を、すぐさま否定する。

先輩はもとから、リユータの魔法に期待などしていないだろう。

いくら生徒によって専攻する魔法などがあるにしても、Aランクの魔法使いであるクオン先輩は、学生程度の魔法ならばほとんど一人でカバーできるだろう。魔法使いが増えることによって、手数が増えるという利点はあるのかもしれないが……。

だが、協力を持ちかけてきた理由は間違いなく。

(アイリ、だ……)

元から先輩の言葉はアイリへと向けられているように思っていた。アイリがなんらかの特殊な魔法を使えるのだとしたら、それを先輩が知っているのだとしたら、協力の申し出も考えやすい。

まだアイリが魔法を使うところを見ていないが、これからそれもわかるのだろうか。

(それとも……、なんだ。先輩がアイリに恋してるとか)

このクオン先輩が。いつも女の子に囲まれている、この先輩が。アイリも非常に可愛らしいから……あり得ない可能性とは言い切れなかったが。なんだかむかむかする。

その辺りは考えても仕方ないだろう。

それからクオン先輩と二人で話しあい、協力するにあたって、どのように行動するかといったことを決めていく。しばらくして、話し合いが終わった。

エミルの肩を掴んだまま、アイリのほうを振り向くと、

「……………？」

彼女はリユータの足元を見つめたままわずかに頬を赤くして、なぜだか硬直して動かなくなっていた。

赤い炎に吞まれて、ブヨブヨした緑の粘着物が溶けて消える。このダンジョンを徘徊する魔法生物である。

魔法を使ったクオン先輩が、掲げていたその腕を下ろした。

「いこう」

そのクオン先輩の言葉を合図に、それぞれ再び歩き始める。

通路は人一人しか通れない、というほどではない。エミルとクオン先輩が先頭をつとめ、リユータと女上級生が真ん中。そして最後に尾をアイリと下級生がついて来ていた。隊列に深い意味などなく、せいぜい優秀なクオン先輩が畏やモンスターに対処するため一番前を歩いている程度のものであった。それぞれ別のチームの人間が隣り合っているのは、片方が先頭を歩かされて全滅したり、不満が出ないようにするためである。

(別の不満ならもう出てるけどさ……)

黙々と歩きながら、人知れず嘆息する。

急に作られたこの協力体制は決していい雰囲気とはいかなかった。主に女子たちの間で険悪な空気が流れている。どちらかといえば、クオンチームの女子が一方的に嫌悪の感情をあらわにして、エミルたちは気にもしないという様子ではあったが。

そのエミルはといえば、

「ひゃっふーっ。真っ暗だぜーっ！」

魔法の赤い炎が消えて視界の悪くなった通路にあって、むやみやたらにはしゃいでいた。その割に、エミル本人の周りに浮かぶ光の粒によって通路が照らされ、自分たちは明かりの魔法がいらないうような状況だった。

うるさくしてモンスターが寄ってくるのでは、という懸念もあったが、リユータははしゃぐ妖精の明るさに救われていた。誰もしゃべらない重い空気のままでは、息が詰まってしまふ。

彼女のはしゃぎ声を聞きながら、真っすぐ通路を進んでいく。

「うにゃっ」

(うにゃ……?)

エミルが変な言葉を呟きながら、宙を一回転して、通路の途中で動きを止めた。光の粒の残滓が空中に軌跡を作る。

「これは……」

驚いたようにクオン先輩の声。

「ど、どうしたの、クオンくん？」

女上級生が問いかけながら近づいていく。それについていく形でリュータたちも近づいていった。妖精も先輩も、二人して側面の壁を見つめている。その光景にすでに嫌なものは感じていた。

クオン先輩はわざわざこちらを振り向くと、状況を説明してくれた。

「壁にボタンが付いてるんだ」

それは、想定していた状況だった。前にもあったのだから当然と言えた。

リュータは重い気分のまま、先輩に告げる。

「さつき、ボタンを押して岩に追いかけてたチームを見ましたよ」

それは、自分たちだったが。

そこまで言う必要はないだろう。

「そう、なのか……。じゃあやつぱり、怪しいし無視したほうがいかな」

「それが無難だと思います」

先輩に言って、リュータは妖精に視線を向けた。

「ボタン……ボタンかあ……」

複雑そうな表情でうめくエミル。

リュータはくぎを刺した。

「押すなよ」

「いや、まあ、押したいけど。さすがに……うーん」

前回、一回押して懲りたらしい。それは殊勝な心がけと言えた。

だが、不意に 無言で佇んでいたアイリの腕がボタンへと伸び

る。ぎよつとする暇があったかどうか。結局、彼女の指はなににも触れることは無かった……間に合いはしなかった。彼女の指の、その先に、妖精の姿があった。

「ええいつ！」

そんな掛け声とともに、エミルによってボタンが押しこまれる。リュータは誰かが噴き出したような音を聞いた。

誰だったのか、少なくともアイリ以外の誰かだというのは間違い無い。

なににしろリュータも叫んでいた。

「またか、お前はあああああああつ！？」

叫んだ途端、ボタンのついていた壁がガラガラと崩れ落ちる。思わず、その場にいた全員が身構えた。

こんどはなにが起こるのだろう。まさかワンパターンに、巨大な岩が転がってきたりはしないと思うが。

すると、

「……………？」

もちろん、岩が落ちてきたりはしなかった。それどころか吊り天井も落とし穴もない。そもそも選手に対して危害を加えようとするトラップ自体がない。

リュータは目を見張った。

「ほ、宝石か……っ！？」

壁が崩れて現れた空間。その奥に、数え切れぬほどの宝石がそれぞれ等しい輝きを発していた。

こんな畏だらけのダンジョンにあつて、ボタンを押さなければ現れない宝石など、見つかるはずがない。ダンジョンの設計者はどれだけ狡猾なのだろう。

「あ、ああ……………」

リュータは思わず一歩踏み出し、更に前へ進んで宝石に触れようとする。同じように、ようやく見つけた宝石の輝きに魅せられてふらふらと歩み寄る女上級生が視界に入つて、そこでリュータは冷静

さを取り戻した。

「ちよ、ちよつと待った！」

驚く上級生たちに、リユータは偽の宝石を掴んで吹き飛ばされた参加者の話を伝えた。今にも宝石に触れようとしていた上級生が、苦い顔を浮かべる。本当なら、先にゴールするために嘘をついていると疑われても仕方なかったのだが、いままでの罫の容赦なさを知っているからだろうか。上級生たちはまったく異論を唱えなかった。自分の手で宝石を見つけていい気になっているエミルをぬかして、五人で輪を囲んで、どうすれば真贋を見分けられるか相談し合う。意外にも、一番過激な意見を主張したのはアイリだった。

「魔法で、吹っ飛ばす……」

「……………」

乱暴だが、確かに有効な方法に思えた。何らかの衝撃に反応して宝石の偽物が爆発するなら、この方法ですぐに見分けることができる。問題があるとすれば肝心の宝石が脆かった場合、壊れてしまうということだったが、

「大丈夫だろう。あんなに罫が危険だったのに、もし宝石が壊れやすかったらゴールできなくなってしまう」

「でも、クオン先輩。ゴールさせないためにわざと脆くしてるかも知れませんか」

そう言ったリユータに、クオン先輩は爽やかな表情で答えた。

「審判は、宝石が全部なくなったら失格とは誰にも言っていないかった」

「……………。そうですね」

心底から納得できるような理由ではなかった……が、なんとはなしに毒気を抜かれてリユータは頷いた。そばで浮かれていたエミルが、横から顔を覗かせる。

「どーするか決まった？」

「ああ、うん。魔法で衝撃を加えてみよう……」

「うっし。そんじゃさっそく………でえりゃあああ!!」

リユータが言い終わるのも待たずに素早く呪文を唱えると、エミルは魔法を解き放った。リユータの目の前をほとばしる紫電が横切る。裂かれる空気の感触と衝撃音を感じながら顔を横に向けると、情け容赦ない電撃が絶え間なく宝石を襲っていた。激しい光に長く直視することすらはばかられる。

「や、やり過ぎだ……」

「ふっふっふ、これでもCランクへの昇格試験を受ける資格を手に入れたばっかだからね。これくらいお手のもんだぜ！」

「Fランクの僕が言うのもなんだけどさ……Aランクの先輩の居前でそれを誇るのも悲しいような」

「いいんだよ、あんなの化け物だから」

「……本人の前で言うことではないと思うよ」

その本人であるクオン先輩はと言えば、なにを反論するでもなく爽やかに苦笑いを浮かべていたが。そんな表情を人間は浮かべることができないのだと、リユータはいま、初めて知った。

やがて耳障りな音がやみ、光が周囲に拡散していく。視線を宝石のほうに向けると、そこには、無傷のまま宝石が残っていた。その放つ輝きも陰る様子がない。

最初に宝石を取ろうとしていたあの女上級生が、ふたたび前へと進み出る。それを見て、リユータは誰にも知られぬように数歩下がった。人体にのみ反応して爆発する可能性を考え、一番乗りは遠慮させてもらう。

そして、ゆっくり、上級生の指が宝石に触れた

「……………っ」

何も起こらなかった。

宝石を手に取り、女上級生は手のひらに乗せたその宝石を、指を握ったり開いたりして何度も確かめていた。

「本物、か……？」

リユータが立ちすくんでいると、アイリがすたすたと奥へ歩み寄って、宝石を数個拾い上げた。

両手の上に宝石を乗せるアイリを見ながら、リユータは感慨深く息を吐いた

後は帰るだけだ。全滅の危機が何度もあったが、それでもここまで来た。もつとも、帰りはクオン先輩たちとの競争になるだろうが……。

ふと横を見ると、エミルが邪悪な笑みを浮かべている。

彼女はその細く小さな手を振り上げ、

「うぎゅっ!？ ちよ、はなっ、変態っ!」

リユータはまたエミルの胴体をわしづかみにした。練り上げられていた彼女の魔力が霧散していく。

「何しようとしてたんだ……?」

「決まってるだろ。あいつらを亡き者にしてしまえば優勝はあたしたち」

「他チームの妨害は失格なんだよ、馬鹿野郎!」

「え、あれ、そうだった?」

「聞いたけよ、ルールぐらい!?!」

あくまでも小声で叫び返しながら、リユータは先輩たちを見た。どうやらこちらのやり取りには気付かれていないらしい。こちらに先んじてゴールを目指すのかと思いきや、チーム内で話し合っている。帰り道にも罠があるのだから、急ぐわけにはいかないのかもしれない。

宝石を手に持ったまま、アイリが近づいてくる。

「変な音、してる」

「……………?」

アイリの唐突な言葉に、リユータは宝石の一つを受け取りながら、わずかに首をかしげた。言われて耳を澄ませば、エミルと言いつついた時には気づかなかった小さな振動音が聞こえてくる。

「振動、音……?」

呟く間にも、聞こえてくる音は大きくなっていた。そして、実際に震動がリユータの足元に伝わってくる。

そのころには先輩たちも気づいたようだった。

「あ、あのさ、もしかしてこれって……」

震える声でリユータは言うが、この振動が何を意味するのか、すでにみんな気付いていた。ダンジョンそれ自体が、大きく揺れ始めている。

「に、逃げろおおおお！？」

部屋から出た瞬間　彼らの背後の天井が、音を立てて崩れ落ちた。

手に入れたものは

落ちてくる天井にいまにも押しつぶされそうな不安を感じながら、リュータたちは崩れ落ちるダンジョンを疾走する。

ダンジョンの崩壊……容赦ない罠などから考えて、察しておくべきだったのかもしれない。確かにこのダンジョンを造った設計者ならば、このくらいはやるだろう。

崩壊に合わせて壁に設置されていた数少ない松明も、その炎が消えていた。いまは下級生の女子が明かりの魔法を使っただけで行く先を照らしている。この状況では、エミルという光源だけでは足りなかった。

通路には岩や土砂が降り積もり、非常に走りにくい。リュータは舌打ちする。

そんな通路の中を軽快な足取りでアイリが先行していた。まるで危なげがないその姿に先導されて、リュータ達は必死にダンジョンを走る。本当に出口へ向かっているのかわからなかったが、先行されているためどうしようもない。頭上から落ちてくる脅威に、仕掛かけられている罠を気にする余裕はなかった。いまのところは誰も罠にかかっていない。もしかしたら、最後の罠が作動すればほかの罠は解除される仕掛けになっていたのかも知れない。

と、先を行くアイリの速度が下がった。

(み、道がふさがれてる　！？)

天井が崩れ落ちてきたらしい。多量の土が目目の通路をふさいでいる。わずかに隙間もあるが、エミルでさえ通り抜けられそうにない。

リュータは足を止めかけて、

「くらえっ！」

絶え間ない振動音の中、よく通るようなクオン先輩の声が聞こえた。放たれた魔力はそのまま衝撃波となって、道をふさぐ土の壁を

ふき飛ばす。

(呪文の詠唱をしていないっ!?)

リユータは驚愕した。

ただ魔力をエネルギーとして放出しただけにしる、それは普通の生徒が呪文なしでできることではない。

そもそも、これだけ必死に走りながらそれだけの精神集中ができるとは。

さすがAランク。そして、最上位であるSランク目前といわれるクオン先輩だけのことはあった。彼の偉業をたたえる「竜殺し」の二つ名は伊達ではない。

閉ざされた道は開いた。ゴールは目前のはずだ。自分がどこにいるかもわからないため、定かではないが。それでもあと少しだと思わなければ気持が折れてしまう。

視界の隅に、落ちてくる小石に直撃して墜落するエミルの姿が見えた。

リユータは足を止めないまま、かがんで必死に手を伸ばす。

なかば絶望的にも思えたが……リユータの指先が小さな妖精に引っかかる。そんな桃色髪の妖精は、必死に指へとしがみついていた。わずかな重みを感じながら、彼女を引き上げる。

「あう、ありがと……」

「いって、このままゴールだ!」

「おうっ!」

痛みに顔をしかめるようにしながらも、エミルは元気に応じてきた。腕をよじ登るようにして彼女はリユータの肩に登ってくる。

そして彼女は、ゆっくりと、小声で、なにかを呟き始めた。

と、なぜだかエミルの呟きに少し遅れて、アイリのスピードが落ち始める。

(なんだ……?)

先ほどとは違い、障害物も特に見えない。ここまで来て、アイリの体力が尽きたのだろうか。あり得ない話ではない。けれどあれだ

け軽やかに動き回っていた彼女が、自分より先に限界を迎えるなどリュータには信じられなかった。

しかし、疑問に思ったのも一瞬。視界の先に光が溢れる。

「出口だ！」

クオン先輩の声。先輩のことは気に入らないが、自然と励まされている自分を、はつきりとリュータは感じた。

ゴールは目の前に。

だが、希望は一瞬で絶望に化けた。

次の瞬間、ひととき大きな揺れが天井を崩壊させる。それ一つで全員を押しつぶせるほどの土塊が、襲いかかってくる。どう足掻いても避けられそうになかった。

（だめ、なのか……！？）

その時、聞こえてきていたエミルの眩きの調子が変わる。強く、激しく、エミルはその末尾を叫んだ。

「に吹き荒れ壁をなせ！ いっけえーっ！！」

呪文の末尾が唱えられた瞬間、頭上の土塊が動きを止めた。

魔法による緑の風が吹き荒れ、押し上げるように土塊の落下を食い止めている。だが、その風の防壁は長い時間持ちそうにない。

エミルの魔法に心の中で歓声を上げながらも、リュータは焦りを抑えられなかった。

（出口まで間に合うか……！？）

考える彼の目の前で、先行していたアイリの身体が反転する。出口に背を向ける彼女の口が、なにかを言うように開閉しているのに気付く。

練り上げられた魔力、そして呪文。しっかりとした構成を示したアイリは、エミルに遅れて魔法を発動した。

先の魔法を後押しする形で緑の暴風が土塊を食い止める。

（そうか　っ）

魔法を行使するには精神集中が必要となる。

エミルが精神を集中させるために飛ぶの止め、リユータの肩に乗ったように、アイリもまた精神の集中を必要とした。そのために走るスピードが落ちたのだ。これだけの魔法を、スピードを落としただけで成し遂げた腕には感心する他ないが……。

反転して出口に背を向けたアイリの身体を、リユータは走りながら抱きかかえた。アイリはぴくりとも眉を動かさず、土塊から視線を離さない。小柄な彼女の身体は軽かったが、どうしても人ひとりの身体は抱えづらい。それでも置いていくわけにはいかった。視界に光が満ちる

ゴールッ！

アナウンサーの叫びとともに、まるで押し寄せるようにして歓声が響き渡る。

ダンジョンの外は日も暮れ、校舎に暗い影を作っていた。しかし、上空に浮かぶ映像の光が校舎に囲まれた中庭を照らしていた。迷宮を脱出したリユータたちは、全員が肩で息をしていたが、一様に安堵の表情を浮かべていた。

そんななかこちらへと、教師の一人が拍手をして 音は聞こえないが、少なくともそのような仕草をして 音声拡大魔法を使いは話しかけてくる。

「いやあ、素晴らしかった。我々の造ったダンジョンを、あんなに見事に攻略するとは！ こちらに来て表彰を」

興奮したような声で話しかけてくる教師。全員疲れきってその言葉を聞いていたが、エミルだけは違った。

桃色の髪をした愛らしい妖精は、その教師を睨みつけ、

「あ、あんたら生徒を殺す気かあああつ！！」

歓声をも上回る大音量で、心からの叫びをエミルが発する。

魂の叫びを発したエミルに、リユータは尊敬のまなざしを向けた。それが自分だけでない事にもすぐに気付く。ほとんどの人間が同じことを考えていたのだらう。だが、はつきりと文句を口にできたの

は、エミルだけだった。

他の人間は、もうそれだけの元気がない。いや、アイリだけは体力が残っていたかもしれないが、そんな性格でもない。

全員の気持ちを代弁したエミルの言葉に、肝心の教師はあっはっはつと笑い、

「大丈夫ですよ。安心安全に作りましたからな」

「どこが安全なんだよ!? ダンジョン崩れてきてたでしょーが！」

「いやいや、本格的にぶつかると直前で転移させるように設定していただきましたし……賞金を取られないよう全滅させる気でいたのに、まさか二組も攻略者が出るとは」

「あんたらって奴はああああっ!？」

その絶叫も、教師たちには届かないようではあった。

ほどなくしてダンジョン大会の表彰式が始まる。

リユータにとってさいわいだったのは、表彰台に登らなければならないのが代表者だけということだった。もう一步も動けそうになり。ゴール地点に座り込んだまま、エミルが表彰台へと飛んでいくのを見送る。

「同着、か」

ぎりぎりまでクオン先輩のほうが先んじていたが、最後の最後でエミルが猛ダッシュをかけ追いついたのである。

「……。くやしい?」

呟いたリユータに、アイリが立ったまま問いかけてきた。表彰台を向いたまま、首を横に振る。

「負けなかっただけで十分だよ。こんな過酷な大会でさ」

クオン先輩に勝ちたくて参加したダンジョン大会ではあった。それでも、いま、身体中が充足感で満たされていた。

リユータは気だるげな心地で、アイリに詫びる。

「ごめん……こんな大会にまきこんで」

視線の先で、妖精が賞金の入った封筒を受け取っている。封筒は妖精には大きすぎたらしく、ふらふらと飛んで、周囲に笑いを提供

していた。

アイリはただ一言、当然のように、

「たのしかった」

とだけつぶやいた。

そちらを振り向こうとして、リュータは慌てて視線を表彰台に戻した。インタビューを受けたエミルがいまの気持ちを聞かれて、主催者のばーか、などと大声で叫んでいる。

主催者を含めて、皆が笑っているのだから別に構わないのかもしれないが。

インタビューはクオン先輩に移り、そんなものに興味などあるはずもないエミルが賞金の封筒を両手で抱えたまま、リュータの所へと戻ってきた。

「見ろ、こんなにお金がたくさん！ 色んな物が買えるぜ！」

「いや、でもそれは……」

はしゃぐ妖精に、リュータが言いかけるよりも早く。

賞金の入った封筒を、近くにいた少女が手を伸ばして取り上げた。エミルに弁償を迫っていた少女だ。

「あーっ、ずるー!？」

「ずるくないっ。きちんと弁償してもらったからね！」

「うー……っ、あー……」

悲しそうな表情で去っていく封筒を見つめるエミル。

なんだかエミルの様子がとても可哀そうに見えたが、間違いなく彼女の自業自得だろう。逆に、封筒を持って立ち去っていく少女は満足そうだった。いくらだかは分からないが、弁償金額よりも賞金のほうが高かったに違いない。

まあどのみち、エミルがなにを壊したのかも知らないんで、リュータには口の挟みようがなかったが。

なんにしる、せつかく苦勞を乗り越えて優勝したものの、その努力の結晶は持っていかれてしまった。これにはさすがのエミルも気を落とすかとリュータには思えた。だが、彼女はどうか笑い声を

絞り出すと、こちらに向かつて言ってきた。

「ふっふっふ……。あ、あんなの無くってもあたしの偉業は変わらないぜっ……………」

その声に勢いはなかったが。

「このあとの祝勝会で食べまくってやるっ」

「誰が出すんだ、その費用……………」

思わず呟くが、じっ、とエミルに見つめられていることに気付いて、リユータは手ではたき落した。祝勝会を開くほどの金の余裕などなかった。そもそも、クオン先輩に勝ってない。

閉会式のアナウンスが響くなか、はたき落された妖精は恨めしげな声を上げた。

「けちーっ、あたしたち親友でしょー。いいじゃん、そのくらいーっ」

「やかましいっ！ だいたい親友って、今日会ったばかりだろ」

ノリで喋っているだけだろうと分かってはいたが、リユータは彼女の言葉を否定した。けれども、エミルは舞うように飛びまわりながら、不思議そうに、

「えー？ 親友ってのは過ぎた時間じゃないと思うけど」

そんなことを妖精に言われて、リユータはデコピンで彼女をはじき飛ばした。面白いようにくるくると回転して、地面に激突する。

「うぎゃっ」

小さな悲鳴。

落ちこぼれのフランクとして蔑まれ、クラスにも親しい友達などいない。そんなリユータにとって、エミルの言葉はどこか照れくさかった。

「はあ。結局、この大会の収穫は、エミルと仲良くなっただけか……………」

賞金は名前も知らない少女が回収していった。クオン先輩にも勝てたわけではない。そして、ダンジョン大会でリユータがしたことと言えば他のチームの後ろに隠れていたただだから、女の子にモテ

ようという考えも上手くいかなかったに違いない。

だから。

手に入れたものは、妖精との絆。

「なんだかなあ……」

「でも」

と、アイリがつぶやく。彼女はうめく妖精を指差した。

「女の子と仲良くなるための、第一歩」

「そりゃそうかも知れないけど、こんなちっこいのと仲良くなっても……」

そこでリユータは言葉を止めた。

自分は女の子と仲良くなりたいたいなどと、アイリに一言も相談していない。当たり前だ。そんなこと出会ったばかりの女の子に相談できるはずもない。

「な、なんでそのことを……」

「……。広間で」

「広間？」

「つぶやいてた」

言われて、アイリの言葉の意味を考える。ダンジョン大会が始まる前のあの広間のことだろう。あそこの長椅子で自分は考え事をしていて、いつの間にかアイリは目の前に立っていた。

と、いうことは。

「口に、出た……？」

「こくり。」

アイリが頷いた。

急速に自分の顔が熱くなっていくのを感じる。そして、リユータはとにかく死にたくなった。

そこは、校舎の二階だった。

魔法映像の光が放課後の教室を照らしている。彼女は冷たい窓ガラスに指を這わせながら、ゴールを果たした二チームを、見下

るすように眺めていた。正確に言うならば、栗色の髪の少女、アイリのことを。

窓ガラスを撫でるのは反対の手で、彼女は首にかけた緑のペンダントに触れる。

「さすがね、アイリ……。まさか誰かと組んでこんな大会に出るなんて予想外だったけど……」

彼女の顔に浮かぶのは微笑。

同じように窓際に寄る年下の子供たち　生徒たちを多少疎ましく思いながら、彼女は誰に聞こえることもない呟きを放つ。

「返してもらわないとね……。私の神器を」

なんだか隣のほうから、どうして自分の誘いを断つたのに他の人と出るんだという緑髪の少女のうめき声が聞こえてきたが、とりあえず彼女は無視することにした。

秘密結社の影

暗く深い 闇の中。

重さの關係ないその空間にあつて、少女は軽やかに泳ぐようにその空間を漂っていた。顔に浮かぶのは薄い笑み。

そんな少女の態度を意に介さぬように、見知った女が手を広げ、虚空に光る球体を作った。

「機嫌がよさそうね……それほどの手駒かしらあ」

球体の表面には別の空間が映し出されている。映像を眺めながら言う女の言葉に、少女は球体をなでた。

「手駒があるに越したことはないのよ……神器に及ばぬとはいえ、彼はある程度の力を持った魔法道具を所持している。大事に使わないと……それがいつか、私の為になるかもしれない」

少女は宙を反転する。

それを見た女が嘲るような笑いを浮かべていた。

「日を増すごとに、あなたの力は弱まっていくわねえ……昔なら私に匹敵しようかという力を誇っていたのに」

「時代が違うだけでしよう……すぐに力は取り戻す」

「それだけの余裕があなたにあるのかしら」

「あら。あの女に敵わず、こんなところまで来るようなあなたにそんなことを言われるなんて」

女に何を言われても変わらさず、薄い笑みを浮かべるだけの少女の皮肉に、苦々しく女が表情を歪めるのが見えた。

それが少女に喜悦をもたらすと、女が知らないわけはないだろうに。

「かばいますか、かばいませんか。参加しますか、参加しませんか。偶然とはいえ私にとって、ここまでの解答はいい方向に進んでいるわ……でも足りない」

そう言つて、少女も球体を覗きこんだ。

「つぎの出題は……助けますか、助けませんか。約束の日までに、どれほどの力を得られるか……。どれだけあの女に……」

一人ごちる少女に、女が鋭い眼差しを向けてくる。

「あなたがどれだけおもちゃで遊ぼうとも構わないけど……、パーティはもうすぐ。わかつているでしょうねえ？」

そんな言葉に、少女は微笑んだ。

「ふふっ……。そうね、世界滅亡の日はもうすぐよ……」

アイリは機械兵器群を蹴散らしながら高層ビルのなかを駆けあがり、最上階に鎮座する巨大な宝水晶（注。マジックジェネレータ。自ら魔力を生成する物質で、魔法道具と呼ばれるもののほとんどはこれを動力源にしている）を最大出力の魔法によってたたき壊した夢を見た。

朝。

カーテンを寝たまま手で引っ張ると、窓から差し込んでくる日差しに彼女は目を細めた。柔らかいベッドの感触はどうしようもないほど気持ち良く、まどろみのなかで、もうひと眠りしてしまいたいそうになる。

「ふみゆ……」

なぜあんな夢を見たのと、アイリはぼんやり考えた。よくは考えつかなかったが、ダンジョン大会に出場したせいでアクション的な感覚が抜けていないのかもしれない。

無論、先ほどのことは夢でしかなかった。

中立国家ラクシス。

たった一度。高位精霊と吸血鬼のたった一度の戦闘によって、戦場にあつた森や建造物は消し飛び、広大な荒地だけが残った。

その戦闘の跡に建てられたこの国は、生まれて二百年ほどのやや新しい国である。生まれた当初は何の特色もなく、魔法と科学のどちらを重視するわけでもなかったが……結局、その両方を取り入れ

た中途半端な国として発展してきた。

街には高層ビルが立ち並び、道路には車が走る。 けれど、名だたる科学国家にあるような機械兵器群などはない。

人々の中には魔法を使えるものが少ないわけではないし、さまざまな魔法道具も多少は普及している。 けれど、有名な国で行われるような大規模な魔法研究はないし、そのための巨大宝水晶も存在しない。

(中途半端)

中立国家とは、名ばかりの。

しかし、アイリはそんなこの国を、嫌いではなかった。

(なんにしる……)

先ほどのことが夢で良かったと、そう思う。面倒なのは嫌いだ。

(……)

あくびを一つ。

アイリはどうにか上半身を起こすと、すばめた目をなんとかぱちくりとして、眠気を払った。毛布をどけてベッドから起き上がる。

朝早くだというのに居間からは音が聞こえてきていた。漂う美味しい匂いを感じながら、ひとまずは衣服を着替える。

居間へ入ると、すぐに声をかけられた。

「おはよう、アイリー。今日はオムレツだよ？」

年上の女性がフライパンを持ちながら、アイリを振り向いて言うてくる。

「……おはよう」

明るい様子の姉に挨拶を一言返して、アイリは椅子に座った。しばらくして料理が完成すると、アイリも立ちあがってテーブルに料理が並べられるのを手伝う。そして、

「いただきます」

「えへへ、いただきます」

料理は、いつものように美味しかった。

最近の姉は仕事が忙しく帰ってこなかったため、甘みの効いた独

特な料理の味が、どこか懐かしく感じられる。

それからしばし。

もくもくと食べていると、姉が食事の手を止めた。真剣そうな面持ちで、姉はアイリを見つめてくる。

「ところでアイリ……預けていた神器を返してもらいたいんだけど」「…………？」

「あー、いやいや。間違っても、アイリが神器を悪いことに使おうとしてるー、とか思ったわけじゃないんだよ？ お姉ちゃん、アイリのことを信頼してるからっ」

どうやらアイリの戸惑いを、疑いだと勘違いしたらしい。

アイリが思ったのは単に、最近預かったばかりの神器を、なぜすぐに返却して欲しがるのかということだった。

（神器を調べるのは、ずっと後だと言っていたはず……）

それまでの間、読心魔法を使えるアイリなら盗まれにくいだろうと預かっていたのだ。アイリ自身は、国の保管庫にでも預けた方がいいと言ったのだが。

そんなアイリの心の内を知らず、姉は話を続けようとする。

「実はね」

姉の胸に、緑のペンダントが揺れている。それを見つめながら、アイリは思った。

（心を読めれば、一瞬なのに）

かといって読心魔法を試みる訳にはいかない。姉の胸に揺れるペンダントは、他者の魔法に反応する検知器だった。心を読もうとした瞬間に警報が鳴り響くことだろう。

忌々しいが、今さら考えても仕方ないこともある。

むしろ考えるべきなのは。

（そう。神器）

返すわけにはいかない……というより、返せない。アイリをかばって瀕死の重傷を負った、リユータ・アストレイムの治療に使ってしまったから。聖杯の形をしたあの神器は、使用した途端に光の粒

となって崩れ落ちた。
跡形も、無い。
どうしよう。

死よりもつらい目、というのは確実に存在する。

(もう、限界……だ)

リユータはそれを実感していた。彼は昨日のダンジョン大会で、何度も死にそうな危機にあった。だが間違いなく、いまこの瞬間の方が辛いと、断言できる。

「蹴る……な……あつ」

刺激しないように、あくまでゆっくりと声を出す。ただ眼光だけを鋭く、相手を睨み据えた。

が、ちよっかいを出していた肝心の妖精は、そんなリユータの反応を見て面白がっているだけだ。

「いやあ、大変そうだねえ」

「うる……さ……」

まだひと気の少ない居住区のなか、遅々とした動きで学校へと向かう。舗装されたコンクリートの道が続いていた。

学校までは、もう少し距離がある。

(し、死ぬ……)

昨日よりも今日の方が苦痛を感じる。

もしかしたら、一度死にかけたあの時よりもひどいかもしれない。なぜこのような状況になっているのかと言えば、

「しっかし、筋肉痛ってそんなに辛いのか？」

「なん、で……お前は……」

「んー？ ほら、妖精って基本的に、何もしなくても浮くし」

身体のほとんどが魔力でできているからだとかなんとか。授業で習った気がした。背中の羽はよほど困った時にしか使う必要がないらしい。

エミルがリユータに見せつけるように羽をばたばたと動かす。

「ふっふっふ、どうだ親友。くやしいだろう」

(ちくしょう……)

せめて怒鳴りつけてやりたいものの、怒鳴れない。なぜなら、それをしようとするお腹筋が使われて痛いから。

先ほどからゆっくりり声を出しているのも、それが原因だった。

(何か効果的な罵倒はないんだろうか……)

さしかかった十字路を曲がり、大きな通りに入る。リユータの通うエイルーク魔法学園が近くに見えた。このまま真っすぐ進めば、学園に着く。もつとも、それから教室まで、だいぶ歩くことになるのだが。

「か、帰り、たい……」

「やたら冷たい目で、妹ちゃんに追い出されたばかりだけど」

苦しむリユータに、ちよつと運動したぐらいで情けないと言い放つて。妹はダンジョン大会の様子を見なかったらしい。とにかく、とても家に帰ることはできなかった。

学園に近づくにつれ、登校する学生たちの姿も増えてくる。相変わらずエミルは羽をばたばたしながら、顔の前をうるちよるとしていた。

腕を動かしたくないために追い払おうにも追い払えず、鬱陶しい妖精に対して思わず言葉が漏れた。

「お前……虫、みたい……だな」

「ちよつ、ひどくないっ、親友!？」

(……、効果があつた)

エミルが嫌そうな顔をするのに満足して、ゆっくりと歩き続ける。「ねえ、ちよつと聞こうよっ。おいっ！」

エミルは訂正の言葉を求めているようだったが、気にすることでもないだろうと思つてリユータは無視する。

と、瞬きをした刹那、紫電が目の前を横切った。

「え……?」

驚くリュータの前で、

「ふ、このあたしを舐めるとどのような目にあつか……」

目を閉じ胸を張り、人差し指を立てて勝ち誇るエミルに。

リュータは構わなかった。

(……えーと)

それどころではなかった。

エミルの放った電撃の方を向いてみると、知らない女性が魔法の直撃を受けて倒れようとしているところだった。

その女性の胸にある緑のペンダントが、けたたましい警報音を発生する。

「へ？ なに？」

ようやく事態に気付き始めたエミルが目をぱちくりとさせる。

内心慌てながらも、リュータは冷静に言った。

「あれ、……先生じゃ、ないか？」

エミルの頬に、冷や汗が浮かぶのが見えた。そんな気がただけかもしれないが。

とにかく。

「に、逃げろおおお！？」

叫ぶエミルに引つ張られながら、

「ちよつ、まつ、ぐうあつ！？」

筋肉痛の身体を無理やり動かされて、リュータは限界を超えた。

校舎まで入って、妖精とは別れた。

クラスでも昨日のダンジョン大会について、なかなかの話題になっていた。予想していたことではあったものの、リュータに対して好意的な意見は少なかったが。落ちこぼれのくせにいきがるんじゃねえ、とか。他の奴が頑張っただけだろ、とか。少なくとも後者の意見に関しては、まったくその通りだとリュータも思った。

クラスメイトからさんざん罵倒の言葉を聞かされたが、けれどもリュータの印象に強く残ったのは、滅多に話しかけてこない隣の席

の女子の言葉で。

「よく学校来る気になったね」

「なん……で？」

「いや、あの大会に参加した人たち。最初のほうで脱落したチーム以外は、筋肉痛とかで大半が休んでるって」

自分も休めばよかった。

机の上に突っ伏したまま、心の中で妹を呪う。

「根性あるねー」

けらけらと笑うその同級生に殺意が沸かないでもなかったが、彼女としては褒めてくれてるのだろうから、リユータはあいまいな笑顔で応じた。

そうしていると、教室の入り口の方からざわめきが聞こえた。

(……?)

リユータもゆっくりそちらを見ると、教室の中を、年上の女性が近づいてきていた。胸に緑色のペンダントをさげているので教師の誰かに間違いないが、次の授業の担当ではない。

(……なんでこっちにくるんだ)

栗色の髪をショートカットにした、年若い女性だった。ともすれば少年のように見えなくもないが、子供っぽい柔らかな顔立ちが女性であることを主張していた。

その女性はなにを思ったのか中腰になって、じつ、とリユータのことを見つめると、

「きみ、たしか朝の……」

(げ……)

リユータも思い出す。

よくよく見れば、今朝、エミルの電撃をくらって倒れていた女性だった。顔が引きつるのはどうしようもなかったが、慌てるのだけは自制する。

(どうする……どうすればいい)

事故とはいえ教師に攻撃魔法など、停学になってもおかしくない。

悪ければ退学だ。どうにかしなければなかった。

(話をはぐらかすか……。それとも、人違いだとぼけるか)

そんなことで上手くいくかは分からないが……。

だが、

「あつ、朝の、えーと……よくわかんないけど警報女！ 復讐にきやがったな!？」

声が響く。

天井の方をふらふらと、桃色髪の妖精がなぜかやってきていた。単に暇だったのかもしれないが。彼女は、ずびしつ、と女教師に向けて人差し指を突きつけている。

(あの、馬鹿……!)

これでもう言い逃れはできない。リユータは頭を抱え、遅れてやってきた筋肉痛の痛みにうめく。

わめきたてる妖精に対して女教師は、

「お、わたしもよく覚えてないけど電撃放つてた妖精さん。あれは痛かったね!」

「……?」

頭を抱えたまま、リユータは訝しげな表情でその女教師を見た。

どうも怒っているようには見ない。その女教師は笑みを絶やさないまま、名乗る。

「わたしはマリナ・ディ・エナ。よろしく。……あなたはリユータ・アストレイムね?」

「え……、はい」

他にどうすることもできず、肯定する。

(な、なんで僕の名前を知ってるんだ……!?)

リユータは必死に思考をめぐらす。そんな彼に、マリナが手を伸ばしてくる。

ぺたぺた。

「……………」

リユータのことを触りながら、あちこちの角度からリユータを観

察してくる。

「あの……何やって……るん、ですか」

「いやちよつと。ふん、きみがアイリの思いび……っ」

「ばこん。がん。ごかんつ。」

振りかぶられたスクールカバンが眼前の女教師の横顔を直撃し、続けて何度もカバンで連打される。それがようやく止まってマリナが立ち直ろうとした時、真上からのカバンの一撃が脳天を強打してとどめを刺した。

それらは淡々と、無表情のままで行われた。

「……」

「ひ、ひどいよアイリ……」

マリナが涙目で後ろを振り返り、無表情なアイリに訴える。が、アイリは気にする様子もない。

いつの間にかマリナの背後に立っていたアイリに、エミルがふわふわと近寄って行った。

「おお。親友ツーだ」

「……。ツー？」

「おお。あっちがワン」

リュータを指さしてくる。そんなエミルに、リュータはやはり頭を抱えたまま、腹筋を刺激しないようときれときれの言葉で訊ねる。

「……なん、で、名前……呼ばない、んだよ」

「へ？ いや、名乗られてないし。あたしは名乗ったけど」
「そうだったろうか。」

正直なところ関わり合いになりたくないというリュータは思っていたので、よく覚えていなかった。

リュータが悩んでいると。きよとん、とした表情の妖精に向かって、

「アイリ」

わずかに顔をうつむかせ、アイリが言った。

「……アイリ・ディ・エナ」

なにか不思議なせりふを聞いた気がした。

エミルがその細い指を、アイリとマリナで行き来させる。言われてみればどことなく見かけも似ているように思えた。それほど歳が離れているようには見えないが……。

(と、いうことは……)

「へ？ え？ ……じゃあ」

「し、姉妹なのか!？」

とても信じられずにリユータは叫んだ。

瞬間。

リユータは腹部を襲った激痛に、表情を歪ませた。

「 に吹き去るように」

ゆっくりと組まれたその魔法の構成は、複雑すぎてリユータには理解できなかった。彼の胸に手を当てていたマリナが、魔法の成功を悟って手を離す。

「どうかかな？ よくなったでしょ？」

言われて、椅子に座ったまま手を軽く握り締める。

「い、痛くない……」

リユータは調子に乗って腕をまわしてみるが、普段通りだった。

一瞬で筋肉痛が直っている。

「他の人には内緒ね？ 治癒魔法を、つまらないことで頼られても困るから」

そう言っつて、彼女は悪戯っぽく笑った。

薄暗い実験準備室のなか。エミルの周りに浮かぶ光の粒が、実験器具でごちゃごちゃした室内を淡く照らしていた。

リユータたちは人目を避けるため、この準備室まで移動していた。つきり、魔法で筋肉痛を治すところを誰かに見られないようにする配慮かと思っただが、

「 それじゃ、本題に入りましょうか」

マリナはそう切り出した。

ほんわかとした雰囲気が見えなくなる。光に照らされた顔で、細められた瞳がリユータを見つめている。

「本題、ですか……？」

心当たりがなく、リユータは聞き返した。

彼女は気にした様子も見せず、

「ええ……。大事なことよ」

そう言つて、マリナはリユータに頭を下げた。それに合わせてペンドントが揺れる。年上の女性に頭を下げられて、リユータはうろたえた。

「ちよ、顔を上げてくださいっ。ど、どうしたんですか!？」

マリナは素直に顔を上げてリユータを見ると、

「妹のアイリを助けてくれて、ありがとう。あなたが助けてくれなければ、アイリは今ごろ生きていなかった」

(……)

すっかり忘れていた。昨日までは話を聞くつもりでいたのに、ダンジョン大会で疲れ切ったせいで頭のなかから消え失せてしまったらしい。

「……ありがとう」

ぼつりと、アイリも言う。

そんな様子にリユータは苦笑した。

「いいよ、気にしないで。それより……」

「あの二人組が、なんだったのか」

アイリが言葉を引き継ぐ。そんな彼女に、リユータはうなずいた。

「ねえ……。なんの話してんの？」

上から顔を覗かせるエミル。リユータは無言のまま彼女を指で弾き飛ばした。少し可哀相な気もしたが、いまは話を邪魔されたくない。あとで教えればいいだろう。

壁に激突した妖精を不思議そうに眺めたマリナが、表情をまた引き締めてこちらを向いた。

「えつとね。説明は私から」

彼女は手近な椅子に腰を下ろす。目線がリユータと同じような高さ
さに落ち着いた。

物静かな部屋の中で、マリナの真剣な声だけが響く。

「アイリを狙ったのは、最近話題になっているらしい秘密結社
墮ちる塵」

その名前を聞いたことは、なかった。

それゆえの秘密結社なのかもしれないが。

「詳しいことは分からないけれど、そいつらは貴重な神器を狙って
行動しているみたい。いつたいなんの為なのか……」

「神器、ですか？」

「ええ。アイリの場合は、あなたを癒した杯型の神器 『アルカ
テッドの英雄』を狙われたみたい。研究用に手に入れたのだけど、
アイリに持たせたのは軽率だった」

マリナが深く息を吐く。

「そんな集団が暗躍してるなんて知っていたら、決してアイリには
渡さなかったのに……。その情報を得る前にこの子が襲われてたな
んで。本当に、あなたにはなんてお礼をしたらいいのか……」

「いえ。それより、もうアイリが襲われることはないんですね？」
ぴくんとアイリの身体が震える。暗がりに隠れて、その表情は見
えなかったが。やはり彼女でも、あのような連中に命を狙われるの
は、怖いのだろうか。

「どつたのー？」

「……うん。名前、呼ばれるの……」

ひそひそと。近寄っていった妖精とアイリが小声で話をしている。
それはリユータの耳にまでは、内容が届いてこなかった。

二人の会話も気にはなったが、意識してマリナの話に集中する。

「……。アイリが狙われることは、もうないと思うわ。肝心の神器
が失われてしまったから」

その言葉に、リユータも思い出した。確か蘇生されたとき、アイ
リは、神器は一回きりの蘇生用だろうと言っていたはずだ。

「アルカテッドという土地を守ったその英雄は、一万人を超える軍隊にたった一人で立ち向かったそうよ。数百の剣で切られ、数千の槍で貫かれて……ようやくその命を落とすと言われているの」

マリナがふつと笑みを浮かべた。

「きっとその秘密は、肉体の蘇生だったのでしょうね。……長らく効果が分からなかった神器だけど、死にかけないと発動しない神器なら納得がいく」

そのマリナの何気ない言葉を聞き流しそうになり、意味を理解した途端に、リユータは愕然として彼女の顔を見つめた。

「効果が、分からなかった？」

「ええ。効果を調べるという意味で、私の所で研究をしようとしていたのよ。あなたが生き返ったのは……その、偶然に神器が効果を発動したからに過ぎないわ」

彼女はとも言いづらそうな表情で、それでも正直に答えてきた。
（あのと時。アイリの説明が曖昧だったのは……そういう理由か）
改めてぞっとする。もう、考えない方が良いのかもしれない。

「……あの」

彼女との間に生まれた妙な沈黙を破ろうと、リユータは喉を震わせた。

言葉を飲み込んでしまわないように無理やりに吐き出す。

「き、気にしてませんから。おかげでダンジョン大会にも参加して大変だったけど、楽しかったと思います」

リユータは言ってみてから、自分の外れなことを口に出しているのではないかと思いましたが、マリナはわずかながら微笑んで見せた。

「うん……。ありがとう」

そつと首を傾けて、彼女は独り言のように、

「もし、あの子に決心がついたなら、いい友達になってあげてほしいな……」

授業も終わり放課後になり、そして辺りはもう薄暗くなっている。それは放課後になってからいろいろと話し合っていたせいだった。だからさ、もっと相手への好意を表すところから始めないと！」「い、いや、僕にはハードルが高すぎるような」「……」

三人揃いながら、煉瓦敷きの学園の道を歩いていった。右には部活棟があり、左は黒々とした木々が広がっている。もうすでに、傍らに配置された電灯が光を放って夜道や森を照らしていた。

話にのぼっている話題は。

簡単に言えば、どうすれば女の子にモテるようになるか。

どういうわけか、女の子と仲良くなるのを手伝おうか、などとアイリが訊ねてきたのである。それをこっそり聞きつけたエミルが、面白半分の話に入ってきた。

結局、話していたのはリユータとエミルの二人が主だったが、会話が長引いてこんな時間になってしまったのだ。

(好意を表すって言うてもな……)

たしかに説得力はあった。が、あのクオン先輩はそんなことをしていただろうか？

そもそも、エミルの言っていることは誰か個人に好かれる方法のような気がした。女の子にモテるといえるのは、そういうことなのだろうか？

「というわけで」

エミルはそこはかとなく楽しそうな声で、

「まずはアイリにこく」

小さな音ともにエミルの言葉が途切れた。振り向くと、アイリが妖精をはたき落したらしい。リユータには理由が分からなかったが、何か二人で通じ合っているのかもしれない。

「いつてえー……。ぶう、いいじゃん、せっかく……」

ふらふらと妖精が浮かんでくる。

「じゃあさじゃあさ、悪の秘密結社を倒して、一躍有名人に……！」

「お前な……」

呆れながら額に手を当てる。

「そんなことが」

リユータが言いかけた瞬間だった。

がさり、と脇の茂みが音を立てる。遅れて、学園の制服を着た少女が飛び出してきた。リユータの胸に飛び込んでから、少女は顔を恐怖に染めたまま言ってくる。

「た、助けてください……！ わたし、わたし……襲われてるんです！」

兄が死にそうになっている理由

ミナ・アストレイムは冷たい夜気を感じながら、漆黒の夜を飛んでいた。昼間とは違う空気の冷たさに舌打ちをしたかったが、全力で学園へと向かっていているため、空気抵抗に負けてそれもできない。

(もっと厚着してくるんだった)

まるで冬の寒さだ。顔を覆うマフラーでは、あまり役に足りない。電話を受けて急いで家を飛び出したため、そこまで気を回す余裕がなかった。

眼下には街の電気の明かりが輝いている。夜遅いとはいえ、まだ人の寝静まる時間というわけではない。街に明かりがあるのは幸運なことだった。通いなれた学園だが、こう暗くは見つけられなくなってしまう。明るく賑やかな見慣れた店は、ちょうどいい目印だった。

(もうすぐっ)

視界に学園が見えてくる。校門を電灯がわずかに照らし、校舎ではいくつかの教室から光が漏れている。

彼女は学園の上空に入ってから、どの辺りへ行けばいいのか困惑した。が、すぐに騒がしい声を聞き付けてそちらへと向かう。

一気に地面へと近づくと、ミナはぎりぎり制動をかけて着地する。

保健室の前にはだいたい人が集まっていた。そのほとんどは教師だったが、自分と同じぐらいの少女が光の粒を漂わせる妖精とともに保健室を眺めている。

と、少女がこちらを向いた。

迷うことなくミナへと歩いてくる。静かな着地をしたミナに気付いてすぐさま近づいてくる少女に、不気味なものを感じて思わず動揺する。

だが、それも一瞬だった。

「……兄は、リユータはどうなったの!？」

ミナは少女へと問いかける。

別段、兄と親しかったわけではなかったが、それでも家族だ。なにかあつて心配しないわけがない。

そんな彼女に、少女は一言。

「重傷」

その言葉に思わず、ミナは顔をしかめた。少女は淡々と、無表情のままに続ける。

「傷は深いけど、先生に見せるのが早かった。きっと大丈夫」

そう言われても安心できるはずがない。

保健室の中では電灯より強い魔法の光が明滅を繰り返していた。

圧倒的なその輝きは、おそらく大規模な治癒魔法を行使しているのだろう。兄の容態を見ようと近付けば、魔法の精神集中を邪魔することにもなりかねない。

「……、先生にでも事情を聞いた方がいいのかしら」

それは確認というわけでもなく、黙って立ち去るわけにもいかないから同意が欲しかったというだけだった。

だが、少女ではなく、浮かんでいた妖精が返事を返してくる。

「事情だったらあたしが知ってるぜ。そのとき一緒にいたから」
ばちん。

軽い音だった。何が起こったのか分からなかったが、少女の腕が横へと向けられている。少ししてから、妖精が離れていったのは少女の手にはじかれたからだ、ミナは理解した。

少女は言葉の最後をやや疑問形にしながら、ミナへと言うてくる。

「事情を聞いても、先生に話さない？」

正直、意味が分からなかった。なにか先生に話したらまずいことでもあると言つのか。それはつまり、兄が重傷を負ったのは、この少女のせいなのだろうか？

「……、いいわ。誰にも話さない。約束する」

もし看過できないようなことが話の中にあつたのなら、そのとき

に考えればいい。そんな考えを胸中にしまつて、ミナは頷いた。そして、目の前の少女も頷いてくる。決してミナの心の内など知ることができないのだから。

と、

「必殺キイイック!!」

光を放つ妖精が勢いよく少女の横顔へ蹴りを放った。少女はそちらを向きもせずに、手のひらで蹴りを受け止める。

「な、なんでこれで止められんの……? ああもっつ、いちいちはたくなよ! あたしが説明するからな!？」

文句を吐いて、賑やかな妖精がこちらへと向きなおる。その妖精はぶかぶかと浮きながら、まだ怒りも冷めやらぬ様子で、しかし、どこか遠い目をしていた。

もう辺りは薄暗くなっていた。

エミルは校門へと続く帰り道で、親友であるリユータの正面に浮かんだ。恥ずかしげに一度視線を伏せてから、エミルは上目づかいに彼を見つめる。

「……あたし、親友のこと好きだぜ。頼りないところもあるけど、その、優しいし、けっこうかつこいいし……。別に男として悪くないというか……女の子にモテないとかさ、き、気のせいなんじゃないか?」

そこまで言つて、赤くなつた顔を見られたくないという感じに、慌てて彼へと背を向けた。背後から彼の戸惑うような声が聞こえてくる。

背を向けた先ではなぜかアイリが呆れたような顔をしていたが、構わずエミルは少年を振り向いた。輝くような笑顔で彼女は問いかける。

「どつ? ときめいたつ?」

「……。お前なあっ!？」

「はっはーん、思いつきし信じちゃつたつて顔だ! 怒っちゃつて、

「やーい！」

「そんなことあるかつ！」

その怒鳴り声がいまは心地いい。彼はエミルを捕まえようとしてくるも、動揺しているのか簡単にその指は避けることができた。

エミルは怒っている彼に声をかける。

「落ち着けて。あれだよ、人に好かれるってのは嬉しいことなんだよ」

「だからどうしたっ、こんにゃろう！」

「いや、だからさ、まずは相手への好意を伝えることから始めないと」

「……、好意？」

ようやく腕を止めて、親友が問い返してくる。

エミルは頷くと、くるりと宙を舞いながら、暗がりのなかで不思議そうな顔をする彼に答えてやった。

「好意を持つてくれた相手には、同じように好意をもつものだって少なくともそういう相手として意識してもらえるようになる。というわけで……女の子たちに愛を伝えまくれっ」

「ぐう。理に、適ってるな……」

「ふふふ、さすがあたし」

「それで本音は」

「ふられるところ見たら面白そうだと」

びしっ。

「ていつ」

「うぎゃっ!？」

びしびしびしっ。ぼこすかぼこすか。ぐりぐり。

チョップとかげんこつの嵐がエミルに襲いかかってきた。その痛みに危うく涙が出そうになる。

「うー、ひでー」

「お前があほなこと言うからじゃないか……」

わいわい、がやがや。

どうすれば女の子にモテるのが、夜道を延々と話しあう。どの程度親友が本気で悩んでいるのかは知らないが、なかなか面白いからかいの種ではある。

悪の秘密結社でも倒せば、などと馬鹿な提案をしてみると、親友は額に手を当てた。それに、けっけ、と笑いを返そうとして。

「んー？」

電灯に照らされた脇の茂みから物音がして、わけ出るようにして見知らぬ少女が親友に抱きつく。彼女は抱きついたまま親友の顔を見上げていたので、その表情は知れなかったが、震える声で言ってきた。

「た、助けてください……！ わたし、わたし……襲われてるんです！」

助けを求めてくる。当然だ。そんな変なところから現れるのだから、何者かに襲われているに違いない。少女の出てきた方向を睨みながら、エミルは拳を強く握りしめた。なんとなく気分が高揚してくる。

（あれか、噂の秘密結社かな？）

そんなことを頭の隅で考える。親友はいまだに困惑しているようだった。うるたえるような声が聞こえる。助けを求められたこともそうだろうし、女の子に抱きつかれているという事実にも困っているのだろう。

そちらは特に気にせず、少女を襲った相手がこちらへと向かってくるのを、エミルは待った。出てきた瞬間に電撃をくらわせてやるつもりで。

だが、出てこない。

背後ではアイリが少女を宥めているようだった。しばらくすると少女も落ち着いてきたようだが、やはり誰も出てこない。

（もはや、逃げた　！？）

この人数には敵わないと判断したのかもしれない。

エミルは背中を大きく動かすと、一気に加速して茂みの上を

つつこんでいく。

「犯人、逃がすかあつ！」

遠い目をしたまま彼女は、何かを考えているようだった。急かすこともできず、ミナは妖精が話したすのを静かに待つ。それほど時間がかかったわけではなかった。妖精が、やや引きつったような顔をして、口を開く。

「えーとね、まず親友とあたしで、どうしたら女の子にモテるようになるのか話しあってただけだ」

「親友？」

聞き返す。口数の少ない少女が一言で答えてきた。

「リユータのこと」

「……ばかりユータ、へんに色気づいて。年頃だから仕方ないのかも知らないけど。そ、それで？」

目の前の二人、どちらにというわけでもなく続きをつながす。

妖精が続けた。

「うん、気になる相手から好かれるためには自分の好意を伝えないと、とかなんとか適当にアドバイスしたただけだ。そんなこと話してたら、道の脇から急に女が飛び出してきてさ。親友に抱きついて助けてくれとか言い出したの」

「そ、それで？」

「いや、なにかに襲われてるらしかったから、犯人を捕まえようと茂みの中に飛び込んでったんだ。あたしは」

そこまで言っつて、妖精は言いづらそうに言葉を濁した。多少、話を予測して、ミナは訊ねてみる。

「……リユータに抱きついた女が悪い奴で、デレデレしてる間に殺されかかったとか？」

「あー、いや、そういうんじゃないな」

妖精が否定する。

それでも言う気にはならないのか、最初の勢いが嘘のようだった。

仕方がないのでミナは少女の方を向いてみるが、彼女もどこか遠い目をしているような気がした。

それでもどうにか話そうとしてくるのは、妹に対しての責任意識なのか。ともかく、こちらを向いて話し始める。

金色。

脳裏に浮かんだその黄金は、闇に馴染むことなく周囲から浮いていた。錯乱した少女の心から読み取れるのはその程度でしかなかったが、少なくとも、何者かに襲われたのは確からしい。

「……大丈夫。落ち着いて」

はたして、落ち着けない人物に対して落ち着けなどと言うのは、正しい行動なのだろうか。アイリはあまり人と会話をしないほうなので、できれば誰かに立場を変わってもらいたかった。だが、肝心のリュータは少女に抱きつかれたまま、顔を赤くしてたじろいでいるし、妖精はもとから論外だった。

リュータと、彼に抱きついている少女を交互に見比べる。

(……)

引きはがそう。

決心して、アイリは手を伸ばした。

(……離れない)

それどころか、引きはがそうとしたアイリに怯えた目を向けてくる。それは仕方ないことなのかもしれないが。

とにかく、彼女の恐怖心を和らげるために撫でてみる。

「もう、大丈夫」

何度かそれを繰り返し、彼女もようやく落ち着いてきたようだった。どちらかと言えば時間が問題を解決したようだったが、この状況さえ解決すれば、アイリにとってはなんだったって構わない。

ようやく、少女がリュータから離れる。

その時だった。

錯乱した少女などに読心魔法を使っても意味がないと、魔法の指

向性を落としていたのが幸いした。ぼんやりと、周囲に広がっていた読心魔法の効果が、近くの生き物の心が遠ざかっていくのを感じする。

エミルだった。

冷静に読心魔法の範囲を絞り考えを読むと、あの小さな妖精は、少女を襲った犯人を捕まえるつもりらしい。

「あの馬鹿っ」

急にアイリが顔を向けたことで、リュータも妖精が飛び去っていくのに気づいたらしい。彼もエミルのあとを追うようにして、躊躇なく茂みの中へと分け入っていく。

自分も行くべきか。瞬時にアイリは計算した。もしかしたら、少女が一人になったところでまた襲われるかもしれない。怯える少女を残していくのも忍びない気もした。

だが。

制服のリボンを見る限り、この少女も恐らくは魔法使いだろう。別の科の魔法技術師たちではないし、リュータのような落ちこぼれとも考えにくい。それをここまで怯えさせるのだから、相手もある程度の魔法使いと考えるべきだ。

あの妖精だけで、勝てるかどうか。この場合、可哀そうだがリュータは計算に入れなくていい。

「犯人を、捕まえてくる」

アイリは少女にそう言い聞かせた。すぐるような視線に、見ないふりをする。結局のところ、この場に残るかどうかの決め手は、アイリにとってリュータたちとこの少女、どちらが価値が高いかと言うことだった。

アイリも茂みの中へ進んでいく。すぐにリュータには追いついたが、さすがに飛行する妖精に敵うほど速くは走れない。

と、木々が無くなり視界が開けた。

(……………！)

木々に囲まれた開けた場所。芝生の上に、少女が一人立っていた。

それは黄金の髪をして、月の淡い光に照らされている。

妖精はただ、宙に浮いたまま、少女の手前で止まっている。勢いで行動を起こすこの妖精が、目の前の少女の異常性を察して動けないでいる。

見た目はアイリと同じくらい　つまりは年下に見えた。だが、見かけなど何の目安にもならないだろう。自分と同じで背が低いだけかもしれないし、そもそも少女が人間だという証拠もない。名匠の手による人形のような少女の美しい造形は、人間離れしているようにも思える。

いつの間にか、空気に吞まれていた。アイリはようやく自分の魔法を思い出し、読心の範囲を少女へと向けた。

少女が薄い唇を動かす。

「……。ふうん、精神系か。あらかじめ魔法を発動しておけるのは便利だが、使い手は珍しいな」

(はじかれた……！)

これ以上ないほどに動揺しながら、アイリは認めた。少女の心が読めない。おそらくは何らかの魔法対策があらかじめ用意されていたのだろう。だが、物理的な魔法防御だけでなく、精神系にまで防御がかかっているとは。

間違いない。自分はこの少女に敵わない。

ラクシス魔法協会の基準による、AもしくはSランク相当の魔法使いに違いなかった。あの『竜殺し』など比較にならないほど強力な魔法使い。

「あなたは、誰？」

声は震えていた。けれどもアイリは、よく言葉が出たものだと、自分自身を褒める。

目の前の少女はいやらしい笑みに顔を歪め、そして透き通る声音で言った。

「ファームィエル・デア・ラークシエスタ」

(……！)

名に聞き覚えはあった。

それは至高の魔法使い。この国の魔法使いの頂点。中立国家ラクシスを興した始祖であり、かつて高位精霊との戦闘によってこの地に存在するものを根こそぎ破壊し尽くした吸血鬼。

逃げるしか、ない。

なぜここに吸血鬼などがいるのかは分からないが、決して関わってはいけない。間違いなく妖精もそれに気付いている。気づいていながら、恐怖にさいなまれて背中を見せることができずにいるのだ。逃げる瞬間を見計らう　そのはずだった。

リユータが一步前に出ていた。心を読み取るその前に、彼は口を開いた。

「この子が飛んでいったから。仕方なく、二人でついていった」
妖精を指差しながら目の前の少女が言う。

やはり少女の声は淡々としていたが、事情を説明してくれるのなら構わない。

「そして、一人の綺麗な少女を見つけた。その少女は吸血鬼」

「……、吸血鬼？」

「そう」

ミナが聞き返すと、少女はちいさく頷いてくる。吸血鬼といえば、大概恐ろしい怪物と同義なのではないだろうか。

(それが、この学園の敷地に?)

どこか辺境から、人間を求めてやってきたのだろうか。そんなものに出会うとは、どれほど兄は運が悪いのだろうか。

ミナは事情を察して、考えを口にした。

「リユータは、その吸血鬼に襲われたのね？」

言ってから、疑問が生まれた。吸血鬼に襲われ、何故、兄は血を吸われたのではなく瀕死の重傷を負ったのだろうか。

妖精が遠い目をしたまま、

「親友の奴、うっかりあたしの言葉を真に受けちゃったみたいと言

うか……」

その言葉に、ミナは眉根を寄せる。なんの話をしているのか分からない。

妖精に続くようにして、少女が淡々と。

「吸血鬼だって、知らなかったみたい」

それはおそらく、リュータが知らなかった、ということなのだろう。けれども、それがどうしたというのか。

リュータが重傷を負ったことと、関係のある話ではあるはずだ。

なかなか真実を告げようとしないう二人に苛立って、ミナは問い詰めた。

「どうしてリュータは傷を負ったの？ リュータはなにをしたって言うの！？」

その言葉に。

妖精と少女は顔を見合わせて。

「吸血鬼に愛を告げて、怒りを買ったらしく返り討ちに」

「……………は？」

思わず、ぽかんと口を開ける。

(駄目だ……。確かに先生に聞かれたくない)

なんとというか、家族の恥だ。

目の前の少女が先生に話すなど言った理由を、ミナは心から痛感した。

それぞれの道

「わたし、彼氏ができたの」

うつむきながら、落ちこぼれの少女は言ってきた。言った内容に對して彼女が、後悔も、後ろめたさも感じていないのは明らかだった。

ただ、そこにあるのは気まずい空気。

それを打ち払うことすら思い浮かばずに、呆然としたまま、リユータはつぶやいた。

「……おめでとう」

目の前の光景はすべての輪郭が崩れて見えた。きつと自分は泣いているのだと、リユータは思った。

その時、実際にはどんなふうに彼女の言葉を聞いていたのかは思い出せなかったが。

次の瞬間、すべての輪郭がぼやけて混じり、リユータは夢から覚めた。

「まあ、粗末な自分ちで寝てるよりかは、ぐつすりと眠れてるかもね」

「え？ 妹ちゃんの家ってけっこう立派な家だったと思うけど？」

「二階建てでさ」

なにも見えないのは、目を閉じているからだろう。それが分かってもしリユータは、どのようにすればまぶたを開くことができるのか、思いだすことができなかった。

暗闇の中に響く不思議そうな声は、きつと桃色髪の妖精に違いない。それに続いて聞こえてくる妹の声音は、どこかとげが含まれている。

「……なんであたしの家を知ってるの？」

「んー？ いや、だって、何日か前に家に泊めてもらっただぜ？」
「へ？」

思わずまぬけな声を漏らした妹が、どんな表情をしているのかは分からなかった。もうすでに、まどろみのなかから脱して、目を開こうとすれば開けたが、周囲の状況を把握するために寝たままエミルたちの話を聞く。

「別にどこで寝ても同じだし、面白そうだから親友の家に泊めてもらおうかと」

「それでも、家で見かけた気がしなかったけど？」

「えー、だってあたし妖精だし。身体のひとつが魔力だからそれくらいは」

「なんでこんな珍妙な生物をリュータは家に連れ込んだのよ……」
「ちよっ、珍妙ってのはひどくないかっ？」

怪物にされたエミルがリュータの妹に抗議している。よくはわからないが、妹が怒っていることはリュータにも伝わってきて、なかなか起き出すタイミングがつかめなかった。

「ああもうっ、ばかりリュータ……。起きてきたら絶対に文句言っ
て」

「もう起きてる」

言ったのは、今まで聞こえていなかったアイリの声だった。その素っ気ない一言に、妹は言葉を止めた。

「起きてる？」

「そう」

「ほんとに？」

「……………」

返事の声はなかった。

が、それが返事をしなかったということにはならないだろう。目を閉じているリュータには判別できないが、身振りで示したのかもしれない。

険悪……というよりは呆れたような妹の声が、リュータに向け

られる。

「リユータ、寝たふりやめて」
ぎくり。

平静を保とうとしたものの、身体は正直に身じろぎしてしまう。
こうなつては、どうしようもない。

恐る恐るリユータが目を開くと、一瞬視界がかすんだ後、見慣れた妹の顔がベッドの足元の方に見えた。横にはアイリが座っている。部屋は全体的に白色で統一されていた。決して狭い部屋ではなく、壁際の棚に薬品類 恐らくはなんらかの魔法薬 が置かれているが見えた。そして自分が仰向けになつているベッド。先生の姿は見えないが、ここは学園の保健室だろう。

(……！)

と、いつの間にか近づいてきていた妹の拳が、身構える余裕もなくリユータの肩を捕らえた。さほど力が入っていなかったのだろうが、不意を打たれてかなり痛い。

「意識があるんならさっさと起きてきなさいよ。あたしがどんだけリユータのことで……ああもっつ」

妹は怒っているらしい。彼女は顔を紅潮させたまま、そっぽを向いた。その様子に困りながらも、ふと気になつてリユータは辺りを見回した。

声の聞こえていたはずの、妖精の姿が、ない。

「……エミルはどこにいるんだ？」

「ここにいるぜ」

「ぐうおっ!？」

思わず変な声が出た。気づけばエミルはリユータの目の前にいた。魔力で構成されている身体を拡散し、見えづらくしていたらしい。妖精が宙をくるりと一回転したときには、彼女の身体はすでに元通りになつていた。

「これがあたしの家に入り込んだ仕掛けっていうわけね……」

妖精を見て頬を膨らませながら、妹が言った。つんつんとエミル

の身体をつついていてる。

リユータは不機嫌そうな妹をどうにかなだめすかして、これまでの話を聞いた。ことあるごとに悪戯しようとしてくるエミルや、饒舌とは言えないアイリは、話を聞くのに適切とは思えなかったからだ。

吸血鬼に攻撃魔法を受けたこと。アイリ達が保健室まで運んでくれ、先生たちによって治癒魔法を受けたこと。それだけでは足りなかったので魔法の薬が使われたこと。自分が二日間の休日を挟んで眠り続け、もうすでに三日経っていること。

それらの話を聞いてリユータの頭に浮かんだのは意外にも、アイリと出会ってからそろそろ一週間が経つのだということだった。それはつまり……。

リユータが考えていると、急にアイリが難しい顔をして立ち上がった。普段は淡々として無表情だが、案外アイリは考えが表情に出るということを、リユータはすでに知っていた。彼女は躊躇なく腕を伸ばすと、辺りに浮いていた妖精を掴んだ。

「むぎゅっ!? ちょ、なんで毎回掴むんだ!？」

喚くエミルに目も向けず、アイリが妹の目を覗きこむ。急に覗きこまれたミナは、わずかに怯えたように身じろぎした。

そんなミナに、アイリは一言。

「話がある」

なぜわざわざそんなことを言うのか、とリユータは思った。だが彼女の言葉の真意は、別の場所で話そう、ということだったらしい。

(僕がいるとしづらい話……ってことなのか?)
考えても分からなかったが。

ベッドの縁に腕をつけていたミナは体勢を整えると、リユータに一言声をかけてアイリとともに部屋を出ていく。

そして、リユータはただ一人、保健室に残された。

落ちこぼれ。

女子にはモテず、友達もいない。リユータのそんな心の内を魔法で読んだので、アイリはリユータが学内で孤独だと思っていた。

廊下へと続く、保健室の扉に手をかける。

アイリの隣には少女がいた。ミナ・アストレイム。リユータの妹。彼女もこのエイルーク魔法学園に通う学生なのだという。

(ある意味、誤算……)

扉を開け、保健室の中から廊下へと出ると、そこにも少女がいた。わずかに怯えたような思念が伝わってくるが、それは読心魔法というアイリの力に気付いているからではなく、保健室の前で逡巡していたことを見られたせいだろう。

リユータの妹は扉の後ろに立っていた少女に探るような視線を向けているようだったが、アイリはちらりとも視線を向けなかった。

少女と、リユータ。

恐らく、二人きりのほうが話しやすいだろう。邪魔をするのも悪いと、アイリは思う。

校舎を出て、保健室から離れたところにあるテラスまで、やってくる。そして、アイリは小洒落た椅子にゆっくり腰を下ろした。いまだ手に握ったままだった妖精を、テーブルの上でそっと手を開いて解放する。

対面に座ったリユータの妹は、こんな所でなんの話をするつもりなのか、などとは聞いてこなかった。なぜ保健室から出てきたのか、気付いているらしい。なかなか勘がいい。

「なあ、どうしてこんな場所まできたの？」

「……」

勘のよくない妖精がここにいた。

いや、手に握られたままだったため、保健室の前で入るかどうかを逡巡していた少女のことが見えなかったのか。視界の端に、ミナがため息をつくのが見えた。

その様子に気づいエミルが、きょとんとしながらアイリとミナを交互に見回した。

「へ？ 話があつたんじゃないの？」

どうやら本当にそう思っているらしい。彼女から伝わってくる感情も、純粹な戸惑いだった。

なんとなく可愛らしく思つて、アイリは目の前の妖精の頭を指先で撫でた。いくら小さくても実際は、妖精のエミルが自分よりはるかに年下ということも考えづらいから、もしかしたら失礼なことをしているのかもしれない。

驚いたエミルが慌てて飛び退いた。

唇を尖らせ、彼女は言う。

「むー、なんだよ。難しい顔してつから、アイリが相談事でもあるのかと思つたのに」

「……」

妖精の言葉に、アイリは内心、困惑した。

確かにリユータのことを考えて悩んではいたのだが。

「そんな顔、……してる？」

「してる」

「そう？」

「そう」

『ほんとうだつてばー！』

妖精はそんな思念を発しながら腕組みし、空中であぐらをかいてぶかぶか浮かんでいる。身体を構成している魔力によって浮かんでいるのだから、体勢などとは関係ないのだろう。そのまま逆さになっても浮かんでいるに違いない。

ただただ無感動な心持ちでエミルの言葉を聞いていると、妖精はこちらの顔を覗きこみながら言ってきた。

「けっこうアイリって考えが顔に出るよね？」

そう、なのだろうか。

(癖なら、直さない)

読心魔法の使い手が、考えを容易に外に出していたら、誰だって自分の考えが読まれたのだと不安になるだろう。

できるだけ無口が、無表情が、無反応がいい。それで多少は周囲が安心していられるのだから。多少気味悪がるだけで済むのだから。

本当なら読心魔法を使わないのが一番いいのだろう。だが、一度手に入れてしまった力は手放しにくい。他人の心が読めなければ、それはアイリにとって多大なストレスに、不安になった。

読心魔法のせいで他人とのかかわりが薄くなったのは知っているが、それでもその力を捨てるわけにはいかない。

(……たとえば)

目の前の妖精は都合がよかった。自分の読心魔法がいくら有名だと言っても、この広い学園のなかで誰もが知っているほど噂が広がっているわけでもない。なにか事件を起こしたわけでもなく、あの『竜殺し』ほどには、自分の名は知られていない。

だからこの妖精は、アイリが読心魔法の使い手だということを知らない。しかもこのエミルはいたるところで騒動を起こしている問題児で、いろんな人間に厄介者扱いされているから、たとえ読心魔法の使い手と一緒にいても、うしなう友達はいないだろう。

その点で、アイリは妖精と関わっても気が楽だった。

(ルーナは)

なぜか自分に関わろうとする、緑色の髪と同級生は、元から友達が多い。けれども読心魔法の使い手といれば、いつしかその友達をうしなってしまうだろう。

だからアイリは、彼女のことをできるだけ避けていた。

「……………？ おーい」

黙り込んだアイリを不審に思ったのか、エミルがこちらの顔の前で手のひらを左右に揺らした。

指先でそんな妖精をはじくと、妖精はミナのほうに、リユータの妹のほうにきりもみしながらゆっくりと飛んで行った。

妹が片手で妖精を受け止める様子を、ぼんやりと見つめる。

(友達………に)

リユータとであれば友達になれるのではないかと、そう思っていた。彼は妖精と同じだった。アイリの噂を知らず、学園内でうしなう友達もいない。そのはずだった。心を読んだ限りでは。

けれども実際には妹が学園内において、怪我をしたら保健室まで見舞いに来てくれる友達もいた。

(近づかない方が、いい……?)

自分がリユータの迷惑になることは、十分にありうる。

と、妖精がすごい勢いで近づいてきた。うっかり、アイリは心を読むのを中断していた。慌てて目の前へ片手をかざす。

だが、エミルはいつもと違ってキックやパンチを放ってきたりはしなかった。

びっ、と指を突きつけてくる。

「あーもうっ、なに悩んでんのか知らないけど、ほんとに困ってるようなら相談しろよ!? あたしだって寝込んでる親友だって、話し相手ぐらいにはなるんだからな!」

『悩みとかため込みそうに見えるし、どうにかしてやらないとなー』

……』

響く妖精の声と、心の声。

(……)

まさか、いつもおちゃらけているエミルに気を遣われるとは。自然と顔から力が抜けていくのが分かった。彼女の言うとおり、難しい顔をしていたのかもしれない。

アイリはじつとエミルを見た。

そして、

「……友達」

ぶかぶかと浮かぶ桃色髪の妖精に、人差し指を伸ばす。

彼女は口を半開きにして首を傾げたが、しばらくして、意味を理解したらしく満面の笑みを浮かべた。妖精はそのちいさな両手でアイリの指先を握り、声を上げる。

「ふふん、親友だぜっ!!!」

ぶんぶん指を上下に振られる。そんな感触も、なかなか悪くはないのかもしれない。

保健室。

アイリたちと入れ替わりに入ってきた少女の姿に、リュータは言葉を失った。とはいえ、出そうとしていた言葉があったわけでもない。失ったとも言えないのかもしれない。

その少女は申し訳なさそうに、所在無げに立っていた。

「あの、その、……学校に来たらリュータが大怪我したっていう話を聞いて。……どうしても、気になって。ごめんなさい」

おそらく彼女に対して言いたいことはたくさんあっただろうし、それらは全て実際に口に出せそうにはなかったが、彼女の様子を見てリュータは苦笑した。

「なんで、なんでお見舞いに来てあやまってるのさ。お礼を言うのが僕の立場なのに」

「それは、だって……」

うつむく少女。

気にせず、リュータは問う。

「もう、転科届けは出したのか？ その、彼氏とは、上手くいってるの？」

「うん、来週には受理されるって。もう授業も魔法技術師の基礎を習い始めてる……。彼氏とは、仲いいよ……」

言いづらそうな表情が、わずかに見えた。

笑顔を浮かべる気にはなれなかったが、それでも、リュータは言った。ベッドのシーツを握り締める。

「そうか、よかった」

少女は魔法使いを志して、そして落ちこぼれていた。クラスでつまじきにされていて、落ちこぼれ同士自然と、リュータと少女は一緒にいることが多くなった。それが当たり前の日常で、いつまでも続くのではないかと、リュータはぼんやり思っていた。自分の傍

に女の子がいてくれるのは嬉しかったし、少女も自分に少なからず好意を持っていてくれるのではないかと思っていた。

(勘違い、だっただけだ……)

一週間ぐらい前。

少女は彼氏を作って、きっぱり魔法使いの道を諦め、魔法道具を扱う魔法技術師へと方向を定めてしまった。正直、もう会うことすらないかと思っていた。

目の前の少女は自分が選んだ道を後悔していないだろう。その上で、自分がリユータのことを裏切ったのだと、後ろめたく思っているのだ。

(ああ、そうさ……。思いを、期待を、裏切られた……)

少女のことを最低だと、そう思った。

彼氏ができたという告白の衝撃と戸惑いから覚めた後、リユータは少女にはつきりと怒りを覚えた。そして、見たこともない少女の彼氏を、ひがみ、妬んだ。どうしても悔しかった。

女の子にモテたいと、そう思った。

素直な欲望だったことも否定できないが、なによりこの少女よりもっとかわいくて優しい女の子たちといちゃいちゃして、少女を見返してやろうと思った。

そして、その日に 彼はアイリと出会った。

(最低なのは、僕だったんだ……)

一目見てアイリを、可愛いと思った。こんな女の子と一緒にいられればと、リユータは素直に思った。思えてしまった。

結局、自分が求めていたのはこの落ちこぼれの少女ではなく、一緒にいてくれる都合のいい女の子だったのだと、リユータは思い知った。

(ほんと、最低かも……。それでも、僕は)

悔しさも、劣等感も、消えることはない。少女を見返したいという気持ちも、女の子にモテたいという想いも変わらない。

だけど今、彼女に言わなければならぬことがある。

今にしか言えないことがある。

「あの、よくわからないうけど元氣そうだから、わたしそろそろ……」
居心地の悪さに耐えきれなかっただろう。落ち着かない様子で、
少女は扉から保健室を出て行くとする。

そんな少女を、リユータは呼び止めた。

「待って」

少女が動きを止める。

喉が渴くのをリユータは感じた。それでも、気にしてはいられない。
い。

「 ありがとう」

心から笑顔を見せることはできないけれど、それでもリユータは
精一杯笑顔を作る。渴いた喉から絞り出される声は、かすれていた。
「さっさと彼氏作って、転科まで決めて……お前なんかとは違うん
だって言われてるみたいで、悔しいけどさ」

震える指がシーツをかき乱していた。

うつむきそうになるのを、必死でこらえる。

「今まで、一緒にいられて楽しかった。その思い出が全部、無くな
るわけじゃない。もしなにか困ったことがあったら……相談にの
るよ。だって」

ドアノブを握った少女の背中を、じっと見つめる。

「君に彼氏ができても。離れていても」

たとえ、これからはお互い違う、それぞれの道を歩むのだとして
も。

「……それでもずっと、友達だから」

その言葉を聞いて、少女がなにを思ったのかは分からなかった。
彼女は、黙って部屋から去っていく。

そして、リユータはただ一人、保健室に残された。

昔々の話 たとえば子供の時

鏡に映るのは金色の髪をした少女だった。

それが明らかに自分の姿だったことに、ファーミエル・デア・ラークシエスタは驚愕した。

「なあ、母よ。吸血鬼から生まれた子供というのは、やはり吸血鬼なのか？」

「まあ、ファミったら。うふふ、おませさんね」

おませさんじゃないだろうとファーミエルは思ったが、母は答えしてくれる気はないらしい。母が答えないと決めたのであれば、何度質問しても無駄だろう。

彼女は隠す気もなく嘆息した。

「なあ、母よ。父はいつ城に戻ってきていたのだ？」

「お父さんは自由な人だから。きつと自由な時に帰ってきたのよ」

「そろそろ会話を諦めてもいいか……？」

うんざりとした口調で告げる。

すると、母は驚いた表情をして、両手で頬を抑えた。

「まあ！ そろそろ反抗期かしら。成長するって素晴らしいわ……」

「……………」

（もういやだ…………）

ため息を口のなかで噛み殺して、仕方なく会話を諦める。母の反応はいちいちズレているように思えてならなかった。いつも話がかみ合わない。もっとも、これでも多少は慣れてきたほうではあったが。

ここはとある城の一室だった。

アウソロート山脈の中腹にそびえる巨城、デファルトバーン。賢

セウコルス国家連盟　通常は単に国家連盟と呼ばれる　の配布
している世界地図が一番正確で世間に広まっていると信用するので
あれば、この城は中央地域のやや北側に位置することになる。

いつも黒雲によって薄暗く覆われたこの城は、人型のみならず獣
を含んだ魔の眷属たちの巣窟だった。動く骸骨や魔界から来た悪魔、
二つ首の番犬に、邪悪なエネルギー集合体など。多種多様な生命
もつとも死してなお現世に留まる存在も非常に多い　が集まる
この城で王として君臨するのは、強大な力を持った一人の吸血鬼だ
った。その吸血鬼とは、

（わが母の、夫）

それはつまり、ファームエルの父親ということに他ならなかった。
巨大な城のなかでも最上級とっていいこの豪華な部屋は、ファ
ームエルや母の寝室だった。

鏡台の前に座り、母に髪を梳いてもらっている。意識すれば、母
の香りすら感じる事ができた。かみ合わない会話さえ別にすれば、
ファームエルにとって、この時間は嫌いなものではない。

母の手が、ファームエルの艶やかな黒髪に触れている。母が優し
い手つきで髪を梳いてくれるのを、彼女は鏡ごしに見つめた。

腰まで届くその髪はファームエルにとって、ささやかな誇りだっ
た。

母と同じ、漆黒の髪。それは自分が母の娘だという証だった。

（でも、本当に……？）

たとえば、端正な顔立ち。似ているだろうか。ファームエルは自
問した。

母は性格の割に美しいが、自分は美貌のなかにも可愛らしさを残
している。それが自らの幼さゆえの差異だと、どうして言えよう。

（吸血鬼の子は吸血鬼なのか。血を吸われた人間は吸血鬼と変わる
のか。吸血鬼は、どのように子孫を残すのか……）

ファームエルは自問する。

自分は父と母によって産まれたのか。幼少のころに牙を突きたて

られ吸血鬼へと変えられ、それを長い時間のなかで忘れていないか。

残念だが、この問題の答えを両親は教えてくれない。それだけは間違いなく自分の幼さ故なのだろう。両親が過保護なのは、とうに分かっていったことだった。

(いつか大人に……でも、そのいつかはどれほど遠いのだ?)
考えていると、母が手を止めて声を掛けてくる。

「……。うふふ、さあ、おしまいよ？　そろそろ夕食に向かいますよう。お父さんが待ってるわ」

「構わんが。この服装でか……？」

「あら、ファミによく似合ってるのに」
寝巻だった。ピンクでヒラヒラの。布は透けそうなほどに薄い。さすがに母が着ているものは大人びているが、やはり寝るための服だった。

「大丈夫よ。お父さんは気にしたりしないから」

「まあ、いいけど……」

どうせ、母などの突飛な行動に、すでに侍女も専属料理人も慣れているのだ。

そしてもちろん。寝巻で人前が出る恥ずかしさなど、ファミエルは気にもしなかった。

テーブルクロスを敷かれた円い食卓に、料理が侍女たちによって次々と運ばれていく。

その食卓の席に座っているのは豊かな口髭を生やした、明らかに貴族然とした風貌の、中年の男だった。彼の鍛えられた筋肉によって、着ている服が盛り上がっている。

この城の主である父だった。

「あら、あなた。お帰りなさい。元気そうで嬉しいわ」

帰っているのが分かっていたので、あら、じゃないだろうに。そう思いながらもファミエルは母を無視して、無言で席に着く。

つつこんでいたらきりがない。

つつつと王に近寄ってぎゅ〜と抱き付いた母に、父は頬を緩ませ顔を母の胸に押し付けた。

「お前こそ元気そうで何よりだなあつ。おお……つ、妻に愛されて私はなんと幸せなのだろう……！」

大げさだった。

そんな夫婦のいちゃいちゃする光景になど興味はなく、侍女を呼んでキャラメルソースを持ってこさせる。

と、父がそんなファームエルへと向いて、さらに相好を崩した

「ファミ、父さんだぞつ。父さんだぞつ」

(いや、知ってるよ)

自分を指差しながら言うてくる父に、思わず心のなかで呟く。そんな彼女の心の内など知るはずもなく、母などは彼の首に腕をまわしてにこにここと微笑んでいた。

「さびしかつただろうつ？ ちゃんと帰ってきたからなあつ。戦いも終わったし、これからはしっかり遊んでやるからなあ！ そして聞いて驚け、父さん、悪人ランキング284位だつ」

「……父よ。毎回聞いている気もするが、その悪人ランキングというのには本当にすごいのか……？」

「ふふははははあーっはっはー！！ もちろんだとも我が娘よ！ なにせ魔界の魔王たちを含めたなかで284番目の悪い人なのだからっ！ 崇めたてまつれ愚民どもお！！」

調子に乗った父が周囲に言い放ち、侍女や料理人が全力で拍手をする。全力で拍手をしなければならぬくらいなのだから、284位とはすごいのかも知れない。こんな父に付き合わなければならぬ使用人たちも大変だろう。

(だが……魔王とはすごいのか？)

魔王を含めたなかで284位。それをすごいというのだから、魔王というのはとてもすごいものなのだろう。

だが。一步も城から出たことのないファームエルは、残念なこと

に、魔王というものに会ったことがなかった。

魔王がすごいのかどうか分からない。

「……なあ、父よ。数多の魔族を従える父は魔王ではないのか？」
「むう？ …… ファミよ。魔王とは数限られた地位であり、称号なのだ。魔王から受け継がなければ魔王にはなることができない。私は、この国に存在する魔のものたちを率いているだけの、ただの王なのだ」

珍しく、真剣なまなざしで父は語ってきた。もつとも母はその豹変についていけなかったらしくきよとんとしていたが。

ファームエルは父をじつと見つめ返し、それから虚しくなってきた息をついた。

「広いな。世界は」

「ふふん。その広い世界でにひやくはちじゅうよおおん位ッ！ 崇めたてまつれ愚民どもよお！！」

(……しつこい)

両手を広げて父が高笑いを続ける。

冷やかな視線でファームエルは父を見た。その視線に気付いたのかどうか おそらくは気付かなかっただろう、父はこちらを向かずに言ってきた。

「ファミもこおのっ！ 私の娘なのだから！ 悪いことをたくさんするのだぞうっ！！」

その喋り方はさすがに鬱陶しいと感じずにはいられない。

そして、

(悪事を積極的に推奨する親というのは、どうなんだ？)

吸血鬼なのだからこれが普通なのかもしれないが。こんなことを考えてしまう自分はやはり変なのかと、ファームエルは多少不安になつて舌打ちした。

それにしても、このあいだ父の大事にしていた盆栽を叩き壊したとき、もの凄く怒られたが、行うのは同じような悪事で構わないのだろうか。

まあ、ともかく、

「どうだ？ ファミ？ なにか新しい悪いことでも考えているか？」

「心配しなくても、とびつきりの悪事を考えてあるから期待しているといい」

声をひそめるわけでもないのに内緒話のような雰囲気です。訊ねてくる父に、彼女は素っ気なく答えると、自分の口周りを舌で舐めとって席から立ち上がった。

たいへんおいしいキャラメルソースの味が、口のなかにふたたび広がっていった。

目を輝かせながら次なる悪事について訊ねてくる母をなだめすかし、歯磨きをして顔を水で洗った後、ファミリーはベッドに横たわった。吸血鬼は流れる水が嫌いなどと、いったい誰が言ったのだろう。

同じ部屋で寝る母はベッドに入ってもしつこく質問してきていたが、そんな母もいつのまにか熟睡である。その様子を見て、彼女はため息をついた。

それから数時間、ベッドに横たわったままじっとしている。あらかじめ寝ていたために、今はそれほど眠くはなかった。

（誰も、広い世界について私に教えてくれない）
静かだった。

たった二人きりの寝室。母の寝息すら聞こえてこない。考え事をするには、ちょうどいい。目の前には、穏やかに眠る母の横顔があった。

（……なあ、母よ。いつか私は知らないことを教えてもらう日が来るのか？ そのいつかはどれだけ先の話になるのだ？）

本で調べても限界があり、誰に聞いても教えてくれない。

（吸血鬼がどうして誕生するのか。それを教えてくれないのは、私が母たちの子ではないからなのか？ それとも、あとで教えようと

思っているだけなのか?)

両親のことは好きだったし、同時に嫌いでもあった。自分を大切にしてくれていることが、ファーミエルにも分かっていった。けれど、彼らとはどこか、感覚が合わない。

その些細なずれが、どうしても気に入らなかった。

(いつか……それらも納得して受け入れることができる日が、くるのかな)

毛布を脇にどけると、床に足の裏をつけた。絨毯が敷かれているため冷たくもない。ベッドに腰掛けている状態で、自分の名を呼ぶ母の寝言が聞こえ、ファーミエルはそちらをむいて、優しく微笑んだ。

「さようなら、母よ」

そして、静かに立ちあがる。

あらかじめベッドの下に用意していた外套を羽織ると、彼女はそつと部屋から出た。複雑な通路を通って、城の中庭へと歩く。中庭に着くまで一人の使用人にも出会わなかった。

中庭にある城壁に沿って造られた花壇は、綺麗な花と毒々しい花がいり混じって混沌としていた。いつもなら気にしない花々だが、今宵はファーミエルもまじまじと見入ってしまう。

と、ふいに、横から声をかけられた。

「眠れないのですかな、お嬢様」

「……ガーバトンか」

そこにいたのは、もしくはあったのは、雄々しい獅子の石像だった。たてがみまで緻密に造られているその石像は、魔法によって生命を与えられ、生きていた。

自在に城を行き来する頼もしい番犬のようなものだ。もっとも、犬などと呼んだら、誇り高い獅子である彼は怒るだろうが。

「珍しい夜ですから、目も冴えるというものでしょうなあ……。いえ、高貴なる吸血鬼の方々の性質を理解しているというわけではありませんが」

「ん、珍しい……？」

問い返す。ただし、ガーバトンの言葉の後半は聞かないことにした。多様な種族が生きるこの城で、気をつけなければならぬ常識の一つというだけだ。

獅子は、その石の首をぐるりと傾げてこちらを見ると、不思議そうな声を漏らした。

「おや、違うのですか……。空を御覧なさい。この地には珍しく、わずかに星が輝いている」

その言葉に、ファーミエルは言われたままに空を見上げた。そして彼女は小さく口を開ける。

ガーバトンの言うとおりだった。厚い黒雲に多少切れ目が入り、隙間から夜空の星の光が覗いている。

（まあ、昼でなくて良かった……）

陽が射し込めば、嫌でも城は大騒ぎになるだろう。魔に属するものは陽光を嫌う者も多い。もともと、ファーミエルら吸血鬼はその程度で慌てるような脆弱な種ではないが。

「まるで、なにかが起こりそうな夜ですな」

「なにか……？」

視線は夜空へ向けたまま、ガーバトンの言った言葉を疑問として呟く。

彼はもったいぶるでもなく、答えてきた。

「この地に限らずとも、星は不思議な力を持つと伝えられております。有名なところでは流れ星に願いを唱えるところの願いがかなう、などというのがありますが……。どうです、この地にあつて星が見えるというのは、それだけで神秘的に感じられるではありませんか」

「……ああ、そうだな」

ファーミエルは素直に同意した。

今、この時。夜空に浮かぶ星は、まるで自分を祝福しているかのようにだった。ファーミエルはすつと手を伸ばし、人差し指で星を指した。

透き通る声で囁く。

「私はあの星に誓おう。これから私は色々なことを学び、力を得て、いつか偉大な王として君臨してみせると」

「おお。それは、ご立派な決心で……」

ガーバトンが言おうとしたのが世辞だったのかどうかはわからなかったが、その時、ファームエルの指し示していた夜空の星が煌めいた。彼女はぱちくりと瞬きする。

「……え？」

「おお、流れましたのう」

「いや、流れ星ってそんなもんじゃないだろう……。　　というか、誓った途端に星が落ちるって、不吉じゃないか？」

まるで、そんな誓いはお前には果たせないと、星に告げられたかのような。思わず彼女は肩をすくめてしまう。

しかし、ガーバトンの見解は違ったらしい。

「星がお嬢様の決意に感銘を受けたのでしよう」

「うーむ……。釈然としないが」

「この世に不思議でないものなどありませんよ」

「いや、そういう哲学的なことではなく……」

ガーバトンは急に流れた星について、全く気にしないようだった。たしかに考えても答えの出ない疑問ではあるが、それでも気になつて仕方がない。

が、考えている時間もなかった。

ファームエルは息を吐く。余計なことに気を取られた、自分の心を落ち着けるために。

（この夜空を見て、誰かが騒ぎだしても面倒だ……）

自然体のまま気力を整え、意識を集中する。そして、脳裏に緻密な魔法の構成を思い描いた。

魔法には、大まかに分けて三段階の手順がある。

つまり　回路の構成。魔力の注入。魔法の発動。

（魔法を行使する上で他者に認識されるのは、魔法回路の構成と魔

力の注入だけ。脳裏に描いたイメージや発動した魔法は、物理現象に影響しない限り視認されることはない……)

回路の構成が早ければ、それだけ相手に気付かれずに魔法を発動できる。

にこりと笑って、彼女は石像の獅子を見た。彼は一瞬だけ恐れおののいた様子を見せたが、それはファームミエルが笑みを浮かべたせいらしい。なんとも失礼なことではある。

だが、

(……魔法を構成しようとしていることに気づかれてはいない)

魔法が魔法として効果を発揮するための回路。魔力の通り道。その通り道自体が魔力で作られている。

回路は魔法的な視覚を鍛えた者なら　つまりは一般的な魔法訓練を受けたことがあれば　誰でも見ることができた。相手の魔法構成を見て、防御用の魔法を組むこともできる。

だが実際に回路を構成するのではなく、頭に描いただけなら、誰にも気取られることはない。

通常、魔法回路は目で見ながら呪文によって自分の精神を誘導し、構成していくものだが、それらをせずに回路を構成することも不可能ではなかった。もちろん回路を頭のなかだけですべてイメージするのは容易なことではない……が、

(……成功すれば相手の意表を突くことができる)

強く息を吸い、気合を入れる。

瞬間、脳内にイメージした魔法回路を、意識して目の前に構成する。出来上がった回路が間違っていないことを確認しながら、瞬時に魔力を注ぎ込む。

突如現れた魔法の構成に対して、驚愕の表情を浮かべる彼に、彼女は魔法を発動させながら優しく囁いた。

「大丈夫……眠ってもらうだけさ」

薄い紫色のもやが石像を覆うと、獅子はそのままぴくりとも動かなくなつた。そっと彼のたてがみを撫でると、彼女は視線を城壁の

上へと向けた。

ふたたび意識を集中し、今度こそ呪文を、定められた文言を唱える。

「 ように、ここにある我が身は軽く」

背伸びをするように足裏にかかるく力を入れると、そのまま身体は宙に浮き、城壁の上へと静かに着地した。

吹く風は冷たく、空気には湿り気が混じっている。

見渡す山々の影は暗く、それがどこまでも続いていった。しかし、昔読んだ本によれば、その先には暗雲のない陽のあたる世界があるのだという。

きつとそこには、自分の欲するものが、得るべき知識が、待っているはずだ。

「星への誓いを果たせるようになった時、いつか必ず戻ってこよう……その日までさよならだ。わが故郷、魔の眷属たちの城、デファルトバーンよ」

夕食中に父は言った。悪事をたくさん働けと。そう言われたファームリエルの働く最初の悪事が家出なのだと知ったら、父はどんな顔をするのだろうか。

そんなことを思いながら 彼女は城壁から身を躍らせた。

昔々の話 たえばやっぱり子供の時

凍える息、震える肌。辺りは空気中の水分が結晶化し、白く埋め尽くされていた。その白い靄の中に、潜む者がいる。

自分を取り巻く靄。その中心にいる自分。それらをファームエルは他人事のように感じていた。

大陸中央部よりやや南方の山脈にある、雪山の中腹。木々もなくなだらかなその場所で、彼女は雪に足をとられることを嫌い、魔法によって宙に浮かんでいた。一瞬の行動の遅れは、戦闘において取り返しよのない隙となる。

意識は、集中しない。張り詰めた意識は逆に脆くもなる。

宙に浮き自然体で、ただあるがままに、彼女は周囲の気配を感じた。相手は、白い靄の中のどこかにいる。

刹那

靄から男が飛び出してきた。その男の握った氷の槍が、彼女の腹部を根こそぎえぐり取っていく。激痛が走り、鮮血が大気に舞う。

その血も氷の槍の冷気に触れて凍りついていった。

(気にするなっ……この痛みは、他人事でいい！ それより、早く)

歪む視界に映るのは、男の勝ち誇った笑みだった。ファームエルはわずかながら、どうにか、口を開く。ただ、呪文を維持するために。次の瞬間、男の体に黒い三角錐が突き刺さり、男はそのまま白い地面に激突した。

「ぐっ、かはっ……」

男を見下ろしながら、彼女は吐血した。血で濡れた口を拭い、無理やり乾いた笑みを浮かべる。

そして戦闘が終わり、彼女が最初にしたことは、凍りついた傷跡を炎の魔法で溶かすことだった。その痛みと疼きに、うめきをあげる。

男は死んだ。そして、自分は生き残った。吸血鬼であるという理由で。だが、傷ついた肉体が再生するまでには、もう少し時間がかかるだろう。

彼女はそつと白い地面に降り立つと、動く気力もなく、冷たい雪の上に倒れ伏した。ただ一言、呟く。

「死ぬ……かと、おもった……」

かつん、かつん……。

暗い闇の中、響くのは彼女の足音だけだった。

吸血鬼は闇の中でも周囲を見渡せるが、そこに闇があることや光があることを理解できる。石の階段を上って遺跡の外へ出ると、彼女は木々の間から射す陽の光に目を細めた。

背後にあるのは、遠い昔に強大な力を振るつたとされる魔法使いの隠れ家だった。主をなくしたその遺跡には、魔法使いの強大な力の秘密が隠されているのだという。その秘密を狙って遺跡に挑んだ者は多いが、それらの者が秘密を手に入れられなかったのは、隠れ家までに広大な迷宮が広がり多大な罠が仕掛けられているからだっ

た。

（そして私も、手に入れられず逃げ帰ってきたものの一人……か）

とはいえ、ただで戻ってきたわけではない。ファームエルは一人ごちた。

もうすでに、迷宮には何度も挑戦していた。手書きで地図を描き記し、探索範囲を広げている。その地図を丸めて懐にしまつと、彼女は顔をあげた。

この遺跡は、ほとんど人里離れた森林地帯にあつて、誰かが通りかかるような場所ではない。が、少年がいた。大きな岩の上に寝転がっている。彼はファームエルの姿に気付くと、慌てて駆け寄ってきた。

ファームエルはため息交じりに言った。

「……、また来たのか。リク」

リクは、この遺跡の近くに唯一ある、エイルークという村に住んでいる少年だった。背は低く童顔で、人懐っこさを感じさせる。

彼は顔をほころばせながら、ファーミエルが無事に戻ってきたことを喜ぶような様子で言ってきた。

「当たり前だよ。だって、まだ魔法を教えてもらってないもん」

「教えるなんて一言も言ってないだろ。面倒くさい」

「えー……？」

リクは不満げな顔をし、すぐにくろくろと表情を笑顔に戻した。

そして、岩に登ろうとしているファーミエルに訊いてくる。

「ねえ、すごい魔法の力つてのは見つかった？」

「すごい魔法の力を身につけたように、見えるか？」

「……僕には分かんないけど」

「ま、見た目で分るものでもないしな……今日もダメだったよ。勝手に喜べばいいさ」

鼻を鳴らして、岩の上に寝転がる。多少背中あたりがごっごっしているものの、休息は必要だった。

リクが申し訳なさそうに言う。

「この前のことは悪かったよ。だって、すごい力を手に入れたら、ファーミエル……さま？ がいなくなっちゃうと思って……」

前にしつめたとおり、リクは名前に敬称をつけていた。疑問形なのが気にはなつたが。

そんな彼に、ファーミエルは素っ気なく答えた。

「そりゃ、力さえ手に入ればこんな所に長居はしないさ。私が目指すのはファゼムの暗黒窟だ」

暗黒窟とは、隣国ファゼムの一角にある、人の寄りつかない小さな洞窟だ。そこは吸血鬼たちのねぐらになっていて、吸血鬼はたびたび人里におりて人の生き血を啜るのだという。

暗黒窟に行くのがファーミエルの願いだった。そこでならば、書物にさえ詳しく書かれない、吸血鬼の生態が分かるはずだった。いつたい、自分がどうやって生まれたのかも。

想いを馳せる彼女に、岩の上に登ってきたリクが四つん這いのよ
うな姿勢で訊ねた。

「その、仲間の吸血鬼に会いに行くのに、どうしても力が必要なの
？」

問いに、ファームエルは失笑した。

「同族だから仲間だというのなら、お前の村も他から取り残されて
小さくなってなどいないだろ。緩衝地帯にある小さな村。いつ争い
になるともしれないから、そんな緩衝地帯があるのさ。お前だって、
村を守るために魔法が覚えたいんだろ？」

「ぼ、僕は獣とかから村を守りたいだけだよ」

リクは身を乗り出して言ってくる。

けれども彼女は、少年の反論を一笑に付した。

「なんだっていいさ。どっちにしる人間同士で戦争が起こるのは事
実なんだ。暗黒窟の吸血鬼たちに、私が受け入れてもらえるかは分
からない。そして」

寝ころんだまま、枝葉の隙間に見える光へと手を伸ばした。そう
しながら、彼女は思い起こすように目を細める。

「あの雪山のような使い手がごろごろいるようなら、私は死ぬだろ
うな」

「雪山……？」

「……いや、なんでもないさ」

「ごまかすように首を振った」

たしかに暗黒窟には危険があるが、それだけの価値はある。少な
くとも、吸血鬼の噛んだ相手がどうなるのか、それを知ることでは
きる。

だが、他に方法がないわけでもなかった。

(実際に噛んでしまえば、それでこと足りるわけだ……)

ファームエルは、いまだに誰かから血を吸ったことがなかった。

この危険な旅の中でそんな余裕がなかったのも確かだったし、最初
に噛む時ぐらい　なんとというか、まあ、良さそうな相手を噛みた

いと思っていた。

そんな相手として、物足りないのかもしれないが、

(妥協としては、有り……か?)

判別はつかなかったがファームエルは身体を起こした。リクはいつの間になにかをしながら、様子に気づいて彼女を見上げた。

そんなリクに、言う。

「なあ、リクよ。一度、私に噛まれてみないか」

「え……?」

目の前の少年は、明らかに戸惑った表情をしていた。言葉の意味が理解しきれずに、雰囲気押しつぶされそうになっている。

ファームエルはそっと、顔を近づけていった。

生い茂る木々の中に、自分とリクの鼓動だけが感じられる。いつの間にか、リクの顔がわずかに赤くなっているような気がする。自分の身体が熱を帯びているのを、彼女は感じた。

空気は澄んでいた。そのはずなのに、どこか息苦しい。ファームエルが彼の首筋へと添えた指は、緊張に震えて止めることもできない。周りを流れる時間が、どこまでも遅く感じられた。

ためらいと未知への興奮とが、ないまぜになって不思議な感情を作りだしている。世界に自分と、そして目の前の少年しかいないよな、そんな気分にはさせてくれた。

ふと、視界の端に、彼の抱えた包みが見えた、

瞬間、彼女はふつと息を吐く。

その息が顔にでもかかったのか、リクはくすぐったそうに肩を強く張らせた。

「……なんでもない。冗談だ」

ファームエルはそう告げると、彼の頭を優しく撫でた。

リクはきょとんとしていたが、気にする必要はない。ファームエルは、彼から身体を離すと、再び岩の上に勢いそのまま寝転んだ。強打した後頭部が激痛を訴えていたが、これもまた、気にする必要のないことだった。

素っ気なく訊ねる。

「その包みは、またいつものあれか？」

「うん。エーシアがまたお弁当作ってくれたんだ。一緒に食べよ」

「お前な。どうしてあの娘が弁当作ってくれてるか、分かってないだろ」

「友達だからでしょ？」

「あの娘も、救われないうつか、報われないうつか……うーむ。私が一緒に弁当食べていることも知らんし」

「？」

リクは不思議そうな顔で首をかしげている。

それを見てファームエルは、エイルーク村にいるはずの少女を思いながら嘆息した。

結局、噛まないのなら、昔の大魔法使いの遺産を手に入れるしかない。闇を見通す吸血鬼の目で、彼女は魔法使いの住居だったであろう部屋を、その入り口から眺めた。見つけるまでは苦労したものだ、いざ見つかるとなるとなんとということもない。

そこは予想に反して、質素な部屋だった。

壁際には朽ちかけた本棚とタンス。そして反対の壁には、ファームエルを足元から頭まで映せるような大きな姿見が置いてある。

その鏡より奥にベッドがあつて、正面には、書き物机が見えた。

(綺麗なものだな……)

思ったほどに、塵もシミもない

当然といえば当然だった。ここは魔法使いの住居区間……つまりは、この迷宮の最終到達地点。自分以外、だれも辿り着くことができなかつたに違いない。肉体が風化してできた塵も、傷を負って溢れだした血によるシミも、この部屋にはない。

ゆつくりと部屋の中へと歩きながら、彼女は考えていた。ここで魔法使いの秘密を手に入れ、力をつければ、もうこの土地には用がなくなる。二度と来ることもないだろう。リクやエーシアに、再び

会うことはない。矮小な人間に対して寂しいと思うことは、高貴な血筋として許せないことだし、意味がなかった。

人間は、死ぬ。

なによりも寿命の面で、人間という種族は吸血鬼に遠く追いつけない。幼子が老人に成長する間、吸血鬼である自分は姿も変えずに生き続ける。

軽くかぶりを振って、ファームエルは足をとめた。

姿見に自分の姿が映っている。

黒い外套を羽織ったひとりの少女がそこにいた。故郷であるアウソロート山脈、デファルトバーン城を旅立った時から、なにも変わっていない。破けた箇所を魔法によって復元した外套が、もしかしたら多少は変わっているかもしれないが、気にすることでもない。

鏡の中の少女は子供の幼さを輪郭の丸みに残しながらも、端整な美しさを周囲へと滲みださせていた。

そして、黒い髪。

艶やかな黒髪は腰まで伸びていて、その黒髪に遠い母とのつながりを感じた。

(長い、旅……決して短くはない)

その旅の意味はあったのだろうか。今さら考えても、仕方のないことではあったが。

感傷をやめると、ファームエルは迷わずに机と近づいた。本棚は朽ちかけ、並べられたいくつかの本も触れれば崩れてしまいそうに思えた。それとは違い、机のほうはしっかりとしている。

ふと、迷宮の罫を思い出した。あの罫はおそらく、この部屋に住んでいた魔法使いが仕掛けたに違いない。物理的、機械的な罫もあったが、魔法的な罫も多かった。自分でそれらを仕掛けたのであれば、それは魔法技術師ということになる。

(ここの魔法使いは、魔法道具の作成まで習得していたのか……?)

両方を学ぼうとする者は、多くない。魔法の習熟には才能と、そして長い鍛錬が必要となる。そして魔法技術師は、通常の魔法とは

別の、専門的な知識に精通する必要が出てくる。

特に理由がなければ、どちらかに絞るのが一般的なはずだった。

目の前の古びた机。他のものとは違って状態がいい。おそらく、これ以上古くならないように魔法道具化されているのだ。

机の上にはいくつかの物があつたが、目を引いたのは、目立つよう真ん中に置かれた小瓶と手紙、そして細かな模様の入った懐中時計だった。ふたをされた透明な瓶の中には、金色の液体が入っている。

ついさっき書いたと言われても信じてしまえるような、真新しい手紙。ファーミエルはまずそれを手に取って、文字に目を通した。

「この手紙を読んでいる者が、善であろうと悪であろうと構わない。ただ、自らの願いを叶えることだけを祈る。そのための力を欲するなら、小瓶の中身が手助けとなるだろう。いつか来る世界の破滅。

金色の夜。神器『ロードウォーカー』……そして、電子精霊の導きのままに……？」

不可解なことが書いてある。その上で、手紙は核心に触れずに終わっていた。世界の破滅とは、そして金色の夜とはなんだ？

彼女は机の上の懐中時計の鎖を摘まむと、そつと持ち上げた。

「神器『ロードウォーカー』……か」

この時計以外に考えられなかった。よく見れば、時刻も刻まれていない。軽く、それでいて頑丈らしく、強く握ってもきしみすらしなかった。

鎖を首にかける。思っていたよりもしつくりと、時計が胸にぶら下がる。

「ふうん……、後は」

ファーミエルは残った瓶の口を持ち、わずかに振った。金色の液体が小瓶の中で波打ち、軽やかに水音を立てる。

彼女は慎重に小瓶を目線の高さまで持ち上げて、中身について考えた。手紙には、力を欲するなら、と書いてあった。

力は欲しい。そのためにこの部屋までやってきたのだ。

だが、中身はなんなのだろう。この金色の液体を、飲め、ということなのだろうか。得体のしれない液体。もしかしたら、毒という可能性もありうる。ここに住んでいた魔法使いが、力を欲する愚かな者に、裁きを与えようと思っていたのかもしれない。

考えても答えは出ずに、多少の匂いでも嗅いでみるつもりで、彼女はふたを開けた。親指ではじいたコルクのふたが、音を立てて机に転がる。

そして、一瞬だった。

液体はうごめき小瓶から這い出ると、彼女の手へと染み込んでいく。とつさに瓶を手放すが、意味はない。液体はすべて、ファームエルの手の中に消えた後だった。

「な……!?!」

まじまじと手の甲を見つめる。いきなり手が腐りだすでもなく、なにも変わつたところはない。
いや。

ファームエルは意識を凝らすと、魔法を放った。黄金の炎が螺旋をえがき、集中が途切れるのと同時に消える。呪文を唱えたわけでもなかった。それなのに、一瞬で魔法回路の構成が組み上がり、容易でない魔法が発現した。

身体の中に膨大な力が渦巻いているのを感じる。

「は、はは……っ」

これならば、暗黒窟の吸血鬼とも十分に渡り合えるだろう。父とさえ張り合うことができるかもしれない。それほど力。

もうなにも、恐れるものはない。

ファームエルは起こった事実を実感がわかず、ただ後ずさった。ふと、脇にあった姿見に視線が向かう。

そして。

鏡に映るのは金色の髪をした少女だった。

それが明らかに自分の姿だったことに、ファームエル・デア・ラークシエスタは驚愕した。

昔々の話 たえばそして大人になる時

鏡に映るのは金色の髪をした少女だった。

それが明らかに自分の姿だったことに、ファームエル・デア・ラークシエスタは驚愕した。

鏡の中の少女は目を見開き、信じられずに鏡へと近づいた。いや、それは自分以外の何者でもなかったが。

「どう……して……」

つぶやきは静かに部屋に響いた。

彼女はその声に、はつきりと苛立ちを含ませる。

「どうして……っ！」

力を得た。真実を知るための力。自分と、父と母とのつながりを確認するためにどうしても必要なはずだった力。

そして今、その力のために、母とのつながりであったはずの黒髪を失った。

そんなことをしてまで力が欲しかったわけではない。

黒髪と引き換えにするほど力が大事だったわけではない。

「あ……ああ……あああああああっ」

彼女はうなだれて、その場に崩れ落ちた。

大切なもの。大切でないもの。その境界がどこにあるのか、それは定かではなかった。そもそも、境界などなかったのかもしれない。自分にとってはなににもかもが大切で、気に入らないことは、すべて許せなかったのだ。だからこそ、ささいなことを問題にして、故郷の城を出た。

最初から、旅になどでなければよかったのだ。そうすれば、親とのつながりなど確認することもなく、大切な母たちと一緒にいることができたのに。

ファームエルの耳に、声が聞こえていた。

いつまでも止まることのない、嗚咽。

それが自分の泣き声だと気付いても、しゃくりあげるのどは、目からあふれる涙は、勝手に続いて止めようもない。

暗い部屋。たとえわめこうと、自分の殻にこもろうと、誰にも邪魔されることはない。

何時間か、何日か。

どれだけの時間、そうしていたのか……

力なく、ファームミエルは立ち上がった。目の前の大きな姿見へ、手のひらを触れさせる。その冷たい触り心地を感じながら、力を込め、姿見を破壊した。

熱を持たない気持ちで部屋を出ると、特に考えもなく通路を進んでいく。襲いかかってくる罠を、無造作に破壊しながら。それをすることに苦労はなかった。そして、首にかけた神器『ロードウォーカー』が、緑色に発光しながら浮き上がり、進むべき道を示している。

(ただの道案内……か。くだらない神器だ……)

そう思いながらも、彼女は神器『ロードウォーカー』に導かれるまま、遺跡から外へ出た。

いらだたしい陽の光が肌に照りつけ、鳥たちがざわめきながらいずこかへと飛び去っていく。だが、そんなことはどうでもいいことだった。

彼女は眉をひそめた。

いつものように遺跡の前でファームミエルを待っていたらしいリクへと、見知らぬ少女が指先を突きつけている。

見た目はやや幼く、綺麗や美しいよりも可愛さを感じさせる。長い髪を風に揺らす少女は、どこか遠くの神殿にでもいそうな巫女っぽい衣装を身にまとっていた。

ファームミエルはその少女へ、低い声で問いかける。

「だれだ、おまえは？」

「こんにちは。……ちは。ファームミエル・デア・ラクシエスタ。

……スタ」

いらだちを誘う喋り方だった。

少女がこちらの名前を呼んだ瞬間、その少女は光の粒となつてリクから離れる。ファームィエルは、少女がなぜ自分の名前を知っているのか、よりも。

少女の正体に見当をつけて戦慄した。

「せ、精霊　だど!？」

精霊とは妖精の上位存在だった。妖精と同じく魔力によって身体のほとんどを構成しているが、そのエネルギーは比較にならないほど膨大だ。精霊にも格があり、力の強い精霊にもなれば思いつきで国を滅ぼすことすらできる。

個体数の少ない、希少な精霊たち。

その一体が、目の前にいる。

(くっ……こいつはなにを司っている？　なんの力を持っているっ)

足元を粒子状にして空を飛ぶ少女から、ファームィエルはこの精霊の存在理由や、所持している能力のことを読み取るうとしたが、

「私は世界の平和を司っている。……いる。私は電子精霊。……れい」

「考えを、読まれた……!？」

少女の、電子精霊の身体がまばゆく輝く。

それと同時に、ファームィエルは地面に転がるように前転した。それまでファームィエルがいた後ろに光の粒が集まり、少女の姿を形作る。

いつでも魔法を放てるように無言で魔法回路を構成しつつ、ファームィエルは状況に対する把握を進めた。

少女は、自らのことを電子精霊と名乗っていた。そのことに、嘘偽りはあるまい。あっさりと考えを読まれたことは気にかかったが、精霊が自らの属性の魔法しか使えないということはない。相手が読心魔法を使ってきたからといって、精神に干渉する精霊と決めつけるのは浅はかだった。

それに　遺跡にあった部屋の書き物机に置かれていた、魔法使

いの手紙。その中に電子精霊の名も書かれていた。

（電子精霊の導きのままに……。つまりこいつは、私を導きに来たのか……。？）

ファーミエルが警戒しながら様子をうかがっていると、少女は気負った様子もなく話しかけてくる。

「あなたは、金色の魔法使いの遺産を受け継いだのでしょうか。……しよう。それは世界を滅ぼす鍵となるもの。……もの。よこしまな願いのもとに力を振るうのならば、私がおあなたを殺します。……ます」

「なるほど。気に入らないような奴には、力は渡せないって訳か」
電子精霊を前にして、彼女は鼻を鳴らす。

「だったらお前が恐れる忌々しい金色の力で、お前のことを消し去ってやるよ……。！ 私はあいにく、機嫌が悪い……。！」

組み上げた魔法を解き放つと、金色の奔流が電子精霊へと迫った。だが、少女は冷静に障壁を紡ぐと、奔流を受け流す。金色の魔法は障壁によって受け流されたまま周囲の木々をなぎ倒し、地面をえぐり、さらには地下迷宮の入り口を崩壊させた。

迸る魔法と人工物が崩壊する音の中で、一瞬の輝きがファーミエルの目に焼き付いた。それが電子精霊の魔法攻撃ということには気づいたが、もとより狙いが狂っていて避ける必要もない。

が、
「う、あ……。！」

それはか細い声だった。

背後から聞こえてくる、なによりも小さく、容易にかき消されてしまいうような、声。

振り向くことが隙を生むことだとは分かっていたが、それでも、ゆっくりとファーミエルは首を曲げる。だが、それを見たいとは思わなかった。

リクが胸を打ち抜かれ、身体を折り曲げて地面に倒れている。奥歯を噛みしめ、ファーミエルは電子精霊を睨み据えた。

「お前っ　　！」

胸の中を暴れだす爆発しそうな怒りのままに、更なる魔法を一瞬で構成して敵へと放つ。虚空に出現したいくつもの細長い金色の三角錐が、時間差を使いながら電子精霊へと殺到する。瞬時に発現した魔法攻撃に嬲られるように、少女の身体が揺れる。

だが、魔法が止んだ時、そこに電子精霊の姿はなかった。不意に聞こえてくる軽薄な笑い声に、ファームエルは背後の空を振り向いた。

そこに、電子精霊の変わらぬ姿が浮かんでいる。

（魔力の集合体……っ、いくら攻撃しても意味がないっ）

殴りかかろうとも、魔法の槍で刺し貫こうとも、意味はないのだろう。大部分が魔力でできたその身体は、あらゆる攻撃を無効化してしまう。となれば、それらを統括する核のようなものがあるのではないかと考えそうになるが、妖精や精霊というものは全体がそれぞれ力を持って身体を構成しているので、弱点となる核のようなものはない。

（なら……まとめて全部消し飛ばすっ）

ちりぢりになれば身体を構成し続けることもできないだろう。ファームエルはそう判断した。

視線を落とせばリクが血を流しながらうずくまり、身じろぎすらしない。急速に彼の生命が失われているのだ。

だが、この状況では彼に治癒魔法を施すこともままならない。思わず彼女は舌打ちした。治癒魔法の勉強など、ほとんどしていないと言っている。勝手に傷の治癒する吸血鬼にとって、治癒魔法などさして必要でもなかった。

なんにしる、手早く電子精霊の少女を滅ぼさなければ。

ファームエルは倒れるリクの隣へ歩み寄った。

「繋がる世界。広がる因果　　」

ファームエルの口から紡がれる言葉。それは彼女自身の精神に作用し、感覚を誘導する。一度も唱えたことのないその呪文が、詰ま

ることなく口から出てくるのは、おそらく身体を巡る金色の力の記憶とでも言うべきものなのだろう。

広がる魔法構成。膨大なその範囲は、ファームィエルにとって、過去最大の魔法となるに違いない。

「揺らぐ時。薄らぐ命。 空間破碎！」

瞬間、音が止んだ。

薄い金色の光とともに視界が揺らいでいき、木々も、蔦も、大地も、目の前にあるあらゆるものが圧されるようにして壊れていく。無機物、有機物を問わず、そこにある全てが意味をなくしていった。視界に金色以外の色が戻ってくるのと同時に、荒れ狂う突風がファームィエルを襲った。地面に踏ん張りながら、彼女はとっさに、真横で倒れている少年が吹き飛ばされないよう、その襟首を掴む。

風が終わり、静寂の中で。

彼女の眼に映るのは、遙かかなたまで、どこまでも続くえぐれた大地だった。広大な森が跡形もなく、遠くに見える山のふもとまで消し飛んでいる。

しかし、その大地の上に、電子精霊の少女は平然と浮かんでいた。「自分の周囲の空間ごと遮断しただと……？ あの短時間で、いや、そうでなくても……」

「あなたに選択を与えましょう。……しよう」「なに……？」

語りかけてくる電子精霊の真意を見極めようと、ファームィエルは意味もなく目を凝らした。

そんな彼女を笑うようにしながら、少女が言葉を続けてくる。すうっと倒れるリクを指差し、

「少年は死ぬ。……死ぬ。あなたがこれからの一生で、悪さをしないというのなら、その少年を癒しましょう。……しよう」

「お前……ふざけるなよ……？」

苦い表情で電子精霊を見据えると、指の骨を鳴らす。

他人から自分の生き方を決められるのは、屈服するのと同じだ。

そんなこと、プライドが許すはずもない。ただでさえ目の前の少女は気に入らない。

そうであるなら、今すぐにも攻撃魔法を放つべきだった。

だが確かに、リクは死ぬだろう。人がどの程度で死に至るかに詳しいわけでもないが、素人目に見ても長く持ちそうにない。けれど、リクを救うために自分の生き方を曲げる……？

ファームエルは少年を見下ろし、肺の空気を吐きだした。

人はたやすく死ぬ。リクはその時が、少しばかり早く来たただけだ。偶然出会ったただの人間などのために、自分が悩む必要はない。

自分に大切なのは、プライドと、信念と、……こだわり。

そうやって、今まで生きてきた。そのために故郷を出たし、各地を巡った。地下迷宮にて、強大な金色の力も手に入れた。引き換えに、母とのつながりであった黒髪を失ったとしても。

そして、リクと引き換えにして、自身のプライドを守ろうとしている。

ぎゅっと目を閉じ、そして開く。

電子精霊は、空の高みからこちらを見下ろしている。それを揺れる瞳で見上げながら、ファームエルは素直に認めた。

きつと、今は、勝てない。

口の渴きを感じる。

ファームエルは言った。

「……私がお前を倒すか、それともお前がこの世界から消え去るまで……悪事を働かないと誓う。だから……リクを助けてくれ」それが最大の譲歩だった。その条件を、目の前の電子精霊がのむとはかぎらない。けれども、けれども。

電子精霊が弾けて消えた。

声は横から聞こえた。

「傷は癒しました。……した。じきに目を覚ますでしょう。……しよ」

いつの間にか、電子精霊が真横にいる。

声をかけられるまで、ファームエルはそれに気付かなかった。

「ただの人間でしょう？ …… しょう。時間の流れに従ってすぐに消えゆく存在。 …… さい」

「うるさい、考えが読めるんだろうが。こんなところで、こんなことで、死んでほしくない。それだけさ」

ファームエルはしゃがみ込むと、寝息を立てるリクの頬を優しく撫でてやった。その幸せそうな寝顔に微笑ましくなるのと同時に、あれこれ悩んでいた自分はなんだったのだろうと思えてくる。

心は穏やかだった。

ささいなこだわりを捨て、自分を曲げ、他人に屈服し、それでも、これが、大人になるということ、なのだろうか。

電子精霊の少女が、リクの様子を眺めていたファームエルに声をかけてくる。

「もし約束通りに、私を倒すための戦いを望むのならば、神器『ロードウォーカー』が私の居場所を示すでしょう。 …… しょう。その神器を決して他者へと渡しては駄目。 …… だめ。その神器は、私とあなたの約束の証。 …… かし」

「ふうん、だが …… なにか他にも言いたいことがありそうな言い方だな？」

胸に揺れる神器に手を当てながら、電子精霊の顔を見上げる。だが澄ましたその表情からは、感情が読み取れない。

一度、リクの髪を撫でてやると、ファームエルは立ちあがった。

根こそぎえぐられた破壊の跡と、森林地帯の間に、静かに風が吹いていた。立ちあがったファームエルと、そして電子精霊の間を、ただただ吹き抜けていく。

「いいのか …… 私を殺しておかないで。いつかお前をしのぐ敵になっっているかもしれんぞ」

「あなたは私の敵にはならない。 …… ない」

平然と言う電子精霊の少女に、彼女は舌打ちした。

「私ごときだと、一生お前には敵わないって言いたいのか？」

「いいえ。……いえ」

電子精霊の少女は用を終えたばかりに歩きだし、なんの気負いもなくファームミエルの横を通り過ぎながら、彼女の言葉を否定してきた。

ファームミエルはゆっくりとそちらを振り返ったが、去りゆく少女の表情は見えない。

「自分のプライドと友人を天秤にかけて、友人を選ぶことのできる金色の吸血鬼。あなたは決して私の敵にはなりえない。他者とのつながりを大切なものとして見定めたあなたが、世界を滅ぼすはずがないから。私を倒しにくるのは構わないけれど……あなたは永遠に、私の同志」

ゆったりとした歩きはそのままに、少女の身体が淡い光に包まれ、粒子となって散っていく。

うつすらと消えゆく電子精霊の少女の後ろ姿を眺めながら。

ファームミエルは思わず叫んでいた。

「お前、普通にしゃべれるのかよ!？」

その言葉は、電子精霊のいなくなった虚空に消えていった。

残されたファームミエルは、仕方なくその場に腰をおろして今後のことについて思いをはせた。電子精霊の言う悪さとは、どの程度のことを指しているのだろうか。世界を滅ぼさないと同志だということだから、それ以外のことは悪さではないのか。

そんなことを考えているうちに、リクが目を覚ました。

「うつん……あれえ？」

「あれ、じゃないだろう。ほらさっさと立て。村に帰るぞ」

言いながら、彼女も立ち上がる。

だが、

「うつん……でも、へ？ うわ!？」

リクが空間破碎の魔法によって広がる荒地を見つけ、大声をあげた。呆然として動こうとしないリクに、彼女は苛立ちを隠さなかった。

「うるさいぞ。さつさと来い」

「でも……村が！」

「エイルーク村は反対側だ、このほか！ こっちに遺跡の入り口……っぽいのあるだろ」

これまたファーマミエルの魔法によって破壊された入口の残骸を指さす。それを見て、リクがほっと安心したような表情を浮かべた。

その様子を見ながら、ファーマミエルは鼻を鳴らしてさつさと森の奥へと歩きはじめる。そんな彼女を、慌ててリクが追ってきた。

「待ってよっ。あ、あのさ……ファーマミエル、だよな？」

「さまをつける。それがどうしたんだ？」

「うっん、なんでもない……これからどうするの？ あの、その、やっぱり暗黒窟ってところに……」

どんだん少年の声が小さくなっていく。

そこまでリクの話の話を聞いて、ファーマミエルはようやく少年の態度の違和感に気付いた。精霊との戦いですっかり忘れていた、自分の髪を触る。

金色の髪。

リクが驚くのも無理はない。彼女は嘆息した。

「暗黒窟はなしだ。くそっ、あの電子精霊を叩きのめすまではな。行く気をなくした。暇だから、魔法でも教えてやるよ」

「ほ、ほんとに!？」

「嘘をついてどうする」

喜びの声をあげるリクを横目で見ながら、これからどうするか考える。

「本でもあれば便利なんだがな……私もあの精霊を倒すために、高度な魔法書が欲しいし。学校でも造るか……。うっむ、やはり流通も良くした方が……」

考えるべきことはたくさんあった。

だが、いつかは電子精霊を叩きのめす。そう思いながら、ファーマミエルは胸に揺れる神器をぎゅっと握りしめた。

若い女の声がうるさく響いている。

彼女は神器『ロードウォーカー』を右手で弄びながら、もう片方の手で受話器を耳に当てていた。

「だからわざとじゃない……ああ、まさか人間がそんな脆いと思わなかったしな……。なんで私が自分とこの国民を殺さなければならなんだよ。最近、秘密結社だかなんだかがうるちよろしてるようだったから、警戒してただけさ」

頭の固い教師にうんざりとしながら、ファームミエルは回転式の革製の椅子をきしませた。そもそも、馬鹿なことを言った男子生徒がいけないのだ。責められるべきは自分ではない。

彼女がいるのは、中立国家ラクシスにあるエイルーク魔法学園、その隠れた一角にある小さな部屋だった。必要なものが押し込められていて、その気になればすぐに手が届く。

「いや、そっちでどうにかしといてくれ。命に別条はなかったんだろ。そりゃあ国も学園も私のものだけど、管理は王や学園長に任せてるしな。……無責任って。なあ、マリナよ。お前は どうして私にそんな口をきけるんだ？」

まだまだ話は終わらないようだったが……面倒だったため受話器を置いた。置いた瞬間に電話がふたたび鳴りだしたため、線を引っこ抜く。

「これでよし」

それっきり静かになった。

一人きりの部屋の中で、彼女は椅子にもたれながらふたたび過去の思い出について振り返った。

たくさんの思い出が渦を巻いていく。

電子精霊にはあれから何回か出会ったが、未だに戦闘はしていない。最初に出会った時の電子精霊の強さを自分がまだ超えていないことは、もう一度戦ったりしなくても分っていた。

だから、神器『ロードウォーカー』を誰かに奪われるわけにはいかない。

たとえ相手が、数多の魔法使いを倒している秘密結社だったとしてもだ。

「いつか電子精霊を超えて、そしてようやく私は、懐かしのデファルトバーン城へ帰ることができる……」

その時まで、どれだけかかるかは分からないが、決して諦めるつもりはない。

脳裏に浮かぶのは、何百年も前に会った母たちの顔だった。

「なあ、母よ。ファームニエルは元気でやっているよ……」

助けますか、助けませんか

「我々は悪の秘密結社　フォールダスト。天より墮ちる塵。さすがに聞いたことはあるだろう?」

言ってきたのは、男女二人組の男の方。

そちらを見ながら、少女はなんとも言えない気の抜けた表情を浮かべた。

「自分で悪の秘密結社とか……聞きしにまさるアホだな。どうして秘密結社なのに名前が広まってるのか不思議だったんだが。なあ、お前らよ。間違いなく本当にアホだろう」

「なんだとこらっ!?!」

「あたしまでアホの仲間に入れるんじゃないッ!?!」

それらの怒りの声を聞き流しながら少女は、ファーミエルは周囲を確認した。

煉瓦造りの、まるで屋敷のように立派な図書館の裏手。エイルーク魔法学園の端にあるそこは、今みたいに時間が遅くなれば、図書館自体が閉館されることもあつて誰も寄り付かなくなる。

そのことを考えれば、二人組がこの場所で声をかけてきたというのも妥当なのだろう。騒ぎにでもなればファーミエルにとつても二人組にとつても不都合にしかならない。

とはいえ、不意を突いて襲つてこなかった理由は理解できなかったが。

「だいたいな、こんな新興国家を我が組織は重視してる訳じゃない。神器がさほどあるようには思えないからな」

「お前らがアホだつてことに対する言い訳は、まだまだ続くのか?」

「……ちつ。細かい話は抜きだ。お前は神器を所持しているはず……それをよこしな」

「私が……? なんの話だ?」

ファーミエルは戸惑った表情を浮かべて、男女を交互に見やった。

すると、男の方がわずかに眉根を寄せた。正確に神器の存在を把握しているというわけではないらしい。

なんにしる、自分が所持する神器、『ロードウォーカー』は渡すわけにはいかなかった。それは電子精霊との誓いの証なのだから。

「……くだらないごまかしはするものじゃないわ。あたしたちには、ブレがあるとはいえ神器の魔力の形跡を感知する魔法道具がある」
「だから、なんの話だ。だいたい神器は魔力じゃなく未知の……そう、一般には神の力だなどと呼ばれているもので動いているんだらうに」

「その力を感知できるのよ。どうしても渡せないと言うなら、あなたを殺してその後で探し」

ズンッ
！

女の言葉が終わるのを待たずして、ファームエルの発生させた金色の三角錐が相手を買いた。

「……。誰を殺すって？」

「もちろん、あなたよ」

腹部に大穴を開けたその女は、平然と答えてきた。そのことに、ファームエルの中で動揺が広がった。じわじわと女の傷は癒え始めている。人間はおろか、吸血鬼でもそれだけの傷を負って平然とはしていられないだろうに。

目の前の相手は、なにかがおかしかった。

見た限りでは、男女は精霊や妖精の類には見えない。なら、あれだけの大穴が開いて平気でいられる理由はどこにあるのか。そして、敵は魔法を使わずして傷を癒そうとしている。それができる種族ということ。

(いや、違うのか……？ こいつらは多数の神器を所持しているはず。もしかしたらその中に、傷をもつともしない種類が……)

このまま戦うべきか、それとも撤退するべきか。

ファームエルがそれを判断する前に、男はふところからアクセサリーを取り出した。暮れかけた夕陽にきらめく、銀の十字架。

「不思議がつてるんだらう……？ どうしてこの女が平気そうな顔してるのか。別に神器を使ってる訳じゃない……神器ってのは、こ
ういうもんだ」

十字架を握った男の手が、前へと突き出される。

そのことに対してファーマーミエルが身構える暇もなかった。

「闇に生きるものよ。仇なす汝に自由は無く」

その瞬間、銀色の光が視界に広がっていった。

放課後になってけっこうな時間がたち、すでに生徒は帰る時間だった。

怪我から意識を取り戻したリュータは、フクロウ人間である保健室の先生の言いつけで、放課後になるまで一日中寝て過ごしていた。放課後になりベッドから起きて歩こうとして、体がよろめいたことが驚きだった。

そんな日の帰り道。リュータの目の前では、スクールカバンの上と同じカバンが乗せられ、ぷかぷかと二つとも宙に浮かんでいる。それは飛行魔法を使ったもので、飛行しているカバンの上に魔法のかかっているカバンを乗っけているのである。

カバンをわざわざ手に持つ必要もない。魔法とは本当に便利なものだと、リュータは思う。

とはいえ、魔法の使えないリュータは今のところ、羨ましがるところとしかできないのだが。

「まー、なんにしてもさ。無事に治ってよかったよな親友」

そう言ってきたのは、カバンで魔法を浮かせている手のひら大の妖精、エミル。浮かんでいるのはリュータとアイリのカバンであって、エミル自身はカバンを持ってきていなかった。それで普段、どうやって授業を受けているのかは分からないが。

「怪我が直ったのは良かったし、エミルたちには感謝してるんだけど……なんか最近おかしいような」

「おかしいって、なにが？」

歩きながら悩むリュータの顔の前をうるちよるとしながら、エミルが訊ねてくる。

そんな妖精に、リュータは納得がいかないというように表情を歪ませた。

「だって、この一週間ぐらいで、秘密結社に遭遇したりダンジョン大会に参加することになったりあげく吸血鬼に出会ったり。今までそんな騒動に巻き込まれたことなんか無かったのにさ」

思い返すようなりュータに、エミルはけるりと。

「でもあたしの周りはいままで、いっつも騒動ばかりだったぜ？」

「それはお前が騒動を起こしてるんじゃないのか……？」

疑いの眼差しでリュータは妖精を見やる。肝心の妖精は気にしたふうもなく、歩くこちらに合わせてぶかぶかについてきながら、人差し指を立ててみせた。

「ま、親友の気にしすぎだって。人生そんな時もあるってことさ」
なかなか適切なアドバイスだった。

そんなリュータの思いを感じ取ったのか、エミルは黄色い花びらを集めたようなスカートをひらひらと揺らしながら、軽やかに言い足してくる。

「つまりあれだよ、親友。危ないことには近づくなかってことだ」

「思いつきで話してるだろ……。前回真っ先に危険に飛び込んでいったのはお前だし……」

呆れたリュータに、エミルは胸を張って。

「ふっふっふ、あたしの危機回避能力をなめちゃいけないぜっ。妖精特有の特殊聴覚で異常を感知し、どの妖精よりも速いスピードでどんな苦情からも逃げ切るのだっ」

「逃げるなよ苦情から！？ まったく、他の人間にとったらお前が危機の元凶じゃないか……」

やはりこの妖精はろくなものではない。それでも無理に追い払わず一緒にいるのは、お互い友達が少ないからに他ならないのだろう。なににしる、リュータがいくら言ってもエミルは気にもしないの

だと、彼はそう思っていたのだが。

この小さな妖精は意外にもあごに手を当て、悩み始めた。

「逃げつてばつかじやまずいのかな……でもなあ……うーん」

「え、エミルがまともなことを……？」

「最近面倒な奴らが多いしなあ……いちいち追いかけられるのもたしかにうざつたいよーな……」

「あのな……」

期待した自分が馬鹿だったと思いながら、リユータはがつくり肩を落とした。

「まあ、いいや……エミルの言う通り、考えてもしかないのかもな。騒動ばかり起きるのはなにか理由があるのかもしれないけど、悩んでも分かるわけじゃないし……」

「そうそ、考えることなら他にあるしな。親友の明日の実験とかさ」

「………実験？」

不思議なことを聞かされて、リユータは妖精を見つめた。

桃色の髪をしたそのお気楽な妖精は、こともなげに言ってくる。

「おう、リユータの担任のセンセが、明日はエントウ草の実験になるから準備して持って来いって」

「……えーと、言ってたの？」

リユータは思わず足を止めて振り返り、無表情のまま会話に参加してこなかったアイリに訊ねた。

彼女は無感情に首を横に振る。

「……私は聞いてない」

二人の視線が妖精に集中した。

けれど、それで動じるエミルでもない。彼女は自分が浮かべているカバンに腰を下ろした。

「ああ。あたし今日の昼、親友に持っていく花を探したらセンセに出くわしてさ。うん、しっかり伝えたぜっ」

「エントウ草の実験って、草を用意しなくちゃいけなかったよーな……」

「……たしか、そう。明日の購買は、お昼から」

遠い目をしたリュータのつぶやきに、アイリが同意する。先生の性格を考えるに、明日の午前中に実験をやるから今日の朝に言っておいたのだろう。

ふう、とリュータは一息吐いた。それから唐突にエミルの乗っているカバンを揺らし始める。

「どーするんだよ!? 間に合わないじゃないかっ」

リュータは魔法を使わないでもできる実験がたまにあるから、実験の授業だけは好きだった。というより、明日の実験は魔法を使わなくてもできるから、先生がわざわざ伝言してくれたのだろう。

エミルは縦に横に揺られて慌てながら、それでも答えてくる。

「いや待て親友っ、えーと……ほら確か、エントウ草ならでっかい煉瓦の建物の近くにも生えてたしっ」

「学園の建物はほとんど煉瓦造り模してるじゃないかっ!」

リュータは頭痛を感じながら叫び返した。

すると横から、アイリが淡々とやってくる。

「……図書館は、たしか本当の煉瓦造り」

「聞いたか親友っ、図書館、図書館だつて。つまんなそうで建物の中には入んなかったけど」

なぜか誇らしげな顔をする妖精から目を逸らし、リュータはただただ無言でたたずむ少女を向いた。

わずかに視線を下げて礼を言う。

「ありがとう、アイリ。助かったよ」

「ん……。別に、いい」

彼女は控えめに答えてきた。

と、無視された形になった妖精がカバンから身を乗り出して抗議をします。

「ちよつと、なんで感謝の言葉はあたしじゃないんだよ!? 伝言を伝えたのもエントウ草の場所教えたのもあたしだぜっ」

「ああ、うん、ありがとう」

「おうつ、それでよしっ」

単純なこの妖精はそれだけで満足したらしかった。

実際はエミルが先生と出会いさえしなければ、先生自身が保健室に知らせに来てくれただろうから、今回の問題もなかったに違いない。

だが、リュータは別段、わざわざ本当のことを告げて妖精の機嫌を損なう必要もないだろうと結論付けた。

特に親しい友人がいなかったため、見舞いに花を持ってきてくれたのはなかなか嬉しかった。

「それじゃ、先行つててくれ。ちよつとエントウ草を取ってくるから」

そういつてリュータは校舎へ続く方向に足を向ける。

と、背中から声を掛けられる。

「ちよつと、一緒に行くつて親友っ」

「いいから。別に走ればすぐに……うん、まあ、たぶん」

リュータは言葉を濁しながら、駆け出そうと足を速めた。肩越しに妖精やアイリを見ながら、手をひらひらさせる。

そして、了解した、ということなのだろう。

アイリがこちらに向けて片手を上げた。

二人には走ればすぐだと言ったものの、校舎から校門への長い道を半ばまで辿りつこうかというところだったので、案外図書館への道は遠いものだった。

とりあえず校舎まで戻ってきたところで、ふと気付く。

（あれ……、エミルに取りに行ってもらった方が効率的だったんじゃない？）

自分の実験材料を誰かに取りに行ってもらうのは気が引けるが、相手はその気になれば自分の四、五倍は軽く追い抜くスピードで飛行する妖精である。エミルに頼んでいればもうすでにエントウ草を手に入れているところか一往復して戻ってきているかもしれない。

（いっそこから呼んでみて、取りに行ってもらうかな……。妖精

特有の特殊聴覚がどうのとか言ってたし……聞こえるのかも)

リュータはなんだか無性にむなしくなり、疲れてきたこともあって走るのをやめ、とぼとぼ歩き始めた。

(ん……?)

しばらくして図書館にたどり着くと、彼は建物の裏手から銀色のまばゆい光が放たれ、辺りの木々を照らしていることに気付いた。

その不思議な光に魅せられるようにして、抑えきれない興味をひかれたリュータはゆっくりと近づいて行った。光がまぶしくなるにつれて、リュータの耳に何人かの声が聞こえてくる。

ただ、頭のいかれた魔法使い達が怪しい儀式をやっているという可能性も捨てきれず、こっそりと建物の影から裏手を覗く。

(……!)

そこには昨日 実際には三日ほど前 に見た、金色の髪をした吸血鬼の少女が、銀色の光の中で二人の男女と対峙していた。だが、少女の焦ったような表情とは対照的に、男女は余裕の笑みを浮かべている。

良く見れば、不自然な体勢で少女の動きは止まっていた。

どうやら男の手から放たれている銀色の光が、吸血鬼の少女の動きを封じているらしい。

「『かくなりきは我が信仰なり』。それがこの神器の名。お前のような闇から生まれた者たちを無力化させる神器さ。くく」
神器。

ものによつては国宝として扱われているくらい、希少な存在である。強大な力を持ったその神秘のアイテムは、決してそう簡単にお目にかかれるものではない。

だが、彼が見たのは、この一週間で二つ。

(そうだ……あの二人組。たしか段差を飛び越えて、アイリを追って行った奴らだ……)

それはつまり、リュータ自身を瀕死の重傷に追い込んだ相手ということになる。もっとも、リュータに重傷を負わせたのは、吸血鬼

の少女も同じだった。

だが問題は、その二人組が神器を狙っている秘密結社の一味だと、アイリの姉から聞かされたことだ。

状況は分からないが、誰かを呼んだ方がいいのかもしれない。

「あなたの神器はもちろん手に入れるけどね……あたしはあなた自身が欲しい。ねえ、吸血鬼。敵わないのは、充分に分ったでしょう……。だから、我が組織に入りなさい。あたしたちは滅びた世界の上に理想の楽園を作り上げる。それはきつと、あなたも気に入る世界でしょう？」

吸血鬼の少女へと向けられた、女の甘い甘い誘惑。

けれどもそれは、少女の心を揺らしたりはしなかった。

「いつだって私は正義さ。……世界滅亡をもくろんでいるのなら、なおさら仲間になどなれるものか」

「はあ？ 面白いことを言うものね、悪人ランキング238位。あなたが正義？」

「どっかの誰かに悪事を働かないなんて約束していらい、すっかり順位もさがらばっかりだけどな」

苦り切った少女の声。

状況は良く分からないが、交渉は上手くいかなかったらしい。となれば危ないのは少女だった。

それを証明するように、女が前へ進み出る。

「もし協力できないなら……残念ね。やはりあなたを殺さない」と

(誰か……呼ばないと……)

けれどもそれが間に合うはずがない。吸血鬼の少女は、死ぬ。自分はそのを見ていることしかできない。

きつと、そう、自分以外の誰かなら。たとえば学園で最高の魔法使いであるクオン先輩なら、迷わずさっそうと飛び出して行って、あの二人組を叩きのめすだろう。そしてまた皆の羨望の眼差しを集めるのだろう。

(……いやだよ。僕は死にたくない)

自分は、最低位のFランクなのだ。ただし魔法の知識があるだけの、一般人と変わりない。

この状況でできることなんて無い。

だからなにもしなくても仕方がないのだと、リユータは自分に言い聞かせた。

(帰ろう……なにもなかったことにすれば、それでいいじゃないか) 嫌なものから目を背けるように視線を逸らし、それから天を仰いだ。もう陽が落ちていると言って過言ではない暗い空に、わずかな星の輝き。

そして、綺麗にきらめく流れ星。

リユータはその光景に、ふと、アイリと出会った夜を思い出した。女の子にモテたいと、流れ星に願ったあの夜。自分はアイリをかばって、死ぬような体験をした。けれども偶然に自分は生きていて、このままなにもせず、なにもできずに死んでいくのは嫌だと、強く思ったのだ。

決意というものは簡単に薄れる。たとえば時間の経過によって。

(あの子は、ファームエルは、吸血鬼は……僕を殺そうとした相手だ)

だが、それでも一度は気になると、可愛いと、リユータが好意を告げた相手なのだ。

殺されかけたことも、今出ていけば殺されそうなことも、どちらも関係ない。それらは自分自身に対する言い訳に過ぎなかった。

ここで逃げたのなら。一週間以上前の自分と、傍にいてくれる都合のいい女の子を求めていただけの自分と、なにも変わりはない……!

「う、あああああああああああああああああッ!!」

リユータは大声を上げて走りはじめた。

ぎょっとして吸血鬼の少女や二人組がこちらを向く。狙うべきは男の持つ銀の十字架。それを目掛けて、リユータはがむしゃらに手を伸ばす。

だが、遠くから叫んで走り出したこともあり、男は既に余裕を取り戻していた。男の回し蹴りをわき腹に受け、地面に転がる。ちょうど吸血鬼少女の足元だった。

手足の動かないらしいその少女が、顔だけリュータに向けた。

「なあ、お前。なにしに……きたんだ？」

「いや、その……助けに……」

その結果が彼女の足元に倒れているのでは、まったく格好はつかないが。

痛みをこらえ、どうにかリュータが立ち上がるうとしてっていると、前方から男の嘲笑が聞こえてくる。

「おいおい、あんときのガキかよ。前回死にかけてこりなかったのか？ それとも死にたがりかよ……？」

「……こ、怖いさ」

「あん？」

不思議がる男を見据え、リュータは叫ぶ。

「し、死ぬことは怖いさつ。でも、そのために……なにもしないまま生き続けて行くななんてもっと嫌だ！ ここで逃げ出したら、僕は絶対に後悔する……！」

「お前は……」

吸血鬼の少女の咳きが耳に聞こえた。だが、振り返るわけにはいかない。

足に力を込め、リュータは立ち上がる。もう一度走り出すために。もう一度、相手に立ち向かうために。

それを見た男が、馬鹿にしたように顔を歪めた。

「さっきので敵わないってわからなかったのかよ。だいたい、向かってくる時に声なんか上げてるようじゃな」

「そんなの、決まってるっ……！」

精一杯、声を張り上げる。

そして意を決し、リュータはふたたび走り出した。

「今までの僕とは違うから……親友っ、だからだあああ!!」

不安が無かったと言えば、それは嘘になる。
だが、しかし、

「そのとおりだぜ、親友っ　　！！」
響くのは、エミルの声。

男の注意がリユータに向いているその隙をついて、紫の閃光が瞬いた。エミルの放ったすどい電撃は正確に男の手を撃ち抜き、その指から銀の十字架がこぼれる。

その妖精は魔力で構成された自分の身体を拡散させ、見えづらくして辺りに潜んでいたらしい。

彼女はリユータがわざわざ上げた大声を、特殊聴覚とやらでしっかりと聞き付け、駆け付けてくれていた。

「ぐうっ……」

男が慌てて銀の十字架を拾い直そうとする。だが、既に走り出していたリユータもその神器を掴むために手を伸ばしていた。

どちらが早いかで状況は決まる。

が、もう少しでリユータの右手が届こうかという時、その手を男に踏みつけられた。響く鈍い音。

視界が歪む。

それでも逆の左手を伸ばそうとするが、

(間に合わない……っ)

しかし。

心の中で悲鳴を上げた瞬間、金色の三角錐が十字架を貫いた。リユータが呆然と碎けた三角錐を見ると、金色のもやのようなもので無理やり身体が後ろへ引き戻される。そのまま彼はその場へたり込んだ。

「神器に力を封じられていなければ、こんなものだな。……まだ続けるか？」

戒めからとかれた吸血鬼の少女が、淡々と二人組に問うた。

彼らはじりじりと後ろへ下がりがりながらも、女の方が言ってきた。

「これで勝ったと思うんじゃないよ。あたしたちにはまだ」

「……神器がある。神器『ファーテウーゼ』の爆発なら、不意を突けば吸血鬼を殺すことも可能」

「聞こえてきた新たな声に、小さな吸血鬼は目付きを鋭くした。」

「ほう……」

これでは不意を突くこともできない。

女は振り返ると、歩み寄ってきたアイリを睨みつけた。

「あの時の小娘……！ 邪魔しようっていつの……なんのためにっ」

「……もちろん、嫌がらせ」

直接的な恨みだったらしい。アイリは彼らに殺されかけた経験があるのだから。

二人組の判断は瞬時だった。男の方が一瞬でふところから丸い球を取り出すと、青白い光が二人組をつつむ。

次の瞬間には、彼らの姿は無くなっていた。

吸血鬼の少女が舌打ちする。

「ちっ、神器で逃げたか。追うのは無理……いや、マリナの妹。どこへ行ったのか分かるか？」

「……西のエントート。でも、本拠地を気づかれないための中継地点……妹？」

訊かれたアイリが、意味のわからないことを答えている。

確かにエントートという土地は西に存在するが、リユータには今の一瞬で、アイリが二人組の行方を理解できた理由がわからなかった。

けれどもふと感じるものがあつて、リユータは片目を細めた。改めて考えてみれば、アイリは他人の知らないようなことを理解していることが、なぜだか多い気がする。これ以上は考えても分からないが、それでもアイリになにか秘密があるのかもしれない。

なんにしる、吸血鬼の少女は納得したらしい。

「そうか……前もって準備していたか。まあいい。十字架の神器は潰したから、しばらくはこちらに手を出せまい。その間に対策を考えないと……」

「……姉を、知ってる？」

吸血鬼の先ほどの言葉が気になっていたらしい。アイリが無表情のまま、疑問を口にする。

悩むように地面を睨みつけていた吸血鬼は、そちらに視線を向け。「……お前の姉はいやでも目立つしな。それに先日の中で、妹の友達になにしたんだって苦情がどれだけ来たことか。いいかげん抗議の電話をやめるようにそっちら言っといてくれ」

「……。わかった」

それだけ話すとアイリはもう興味を失ったのか、隅の方に移動してしまった。エミルはいつの間にか、どこからともなく現れた光の群れに混じって戯れている。どうやら騒ぎを聞きつけてやってきた他の妖精たちらしい。

「なあ」

その呼びかけの声は静かに響いた。振り向けば、吸血鬼の少女の涼やかな眼差しがこちらを見つめている。

優しい風に吹かれながら、ゆっくりとリュータは立ちあがった。

木々の枝や葉が揺れるように、少女の金色の髪がなびいている。

「なんのために助けにきた。お前を殺しかけた相手だろう」

「う……。でも、その、一度好意を告げた相手なんだ。見ぬふりはできないよ」

「……ふん。つまらん考えやこだわりは、もっと大切なものを失うだけさ」

どこか自嘲するように、少女は悲しげに笑った。

夜の空に星々が輝き、月光が小さな吸血鬼をやわらかく照らしている。何度の夜、幾程の月が彼女を照らしたのか、その過ぎていった過去の中で彼女がなにを経験してきたのか。それは一生、リュータには知ることができないに違いない。

そして。

「なあ、せっかくだから……お前を噛んでやってもいいぞ」
ぼつりと呟かれたその言葉に。

リユータはぎよつとして身構えた。けれども、少女には無理やり
噛もうという気持ちは無いらしい。

彼女はその場で静かに佇んで、こちらの様子を窺うだけだ。
緊張した筋肉を弛緩させながら、リユータはおずおずと答えた。

「い、いや。怖いから、その……やめとく」

「そうか……。ふん、馬鹿だな。もつたいない」

吸血鬼は笑った。

それから彼女は、リユータの顔からわずかに視線を落とし、

「別にいいさ……噛むのはお前でなくてもな。あとそれと、……ち
つ、右手は癒しておいたから安心しろ」

言われてみれば、男に踏みぬかれたはずの右手にまったく痛みを
感じない。だが、いつの間に彼女は手を癒してくれたのだらう。

そして、吸血鬼の少女は踵を返した。なんの感慨もなさそうに、
乱立する林の中へと消えていく。

ただ、最後に。

「電子精霊が持っていた『ピュアハート』と同じ……同化型か。気
に食わんな……」

そんな、意味のわからないことを言い置いて。

吸血鬼の少女は夜闇に消えるように去って行った。

「んじゃ、親友。帰ろうぜっ」

「うおっ!?!」

いつの間にか近寄っていた妖精に、リユータは驚きの声を上げた。
どこからか集まっていた光の群れも、もうすでに消え去っている。

離れたところではなにかをしていたアイリに声をかけて、リユータ
達は再び帰路に着いた。道の途中、彼はカバンの上であぐらをかく
妖精に視線を向け、

「なあ……エミル。今回は助かったよ」

「んー? ふふん、親友だもんなっ! ……結局、危ないことには
近づいたみたいだけど」

そう言われるとリユータも、うなだれるしかない。ただ保健室で

安静にしていただけの今日も、騒動に巻き込まれてしまったわけだが、エミルはそんなことに興味はないのか、カバンからぷかりと浮いてアイリの手元を覗いていた。

「アイリー、なに持ってたんの？」

宙に浮く妖精に呼ばれたアイリは、わずかに顔を上げた。

「ん……エントウ草」

その言葉に。

リユータとエミルは押し黙るしかなかった。すっかりエントウ草のことなど忘れていたのだ。

それをきちんと覚えている辺り、さすがアイリだという気もする。

（なんだかな……）

リユータは自分の情けなさに、心の中でため息をついた。

しっかりしなければ。これから、もっと頑張っていかなければならないのだから。今日のこと自分……もう一度、後悔しない生き方をするための決意を固めることができた。

今度こそ、その決意を忘れない。

夜空を見上げれば、輝く星々がある。そこに流れ星は見えないけれど。

それでも。

（そう、僕は………女の子にモテたいっ！）

お詫びと謝罪

魔法と科学の入り交じった国、中立国家ラクシス。東西南を魔法国家にかこまれ、北方の科学国家とも国交を持つ、不安定な国。

小さな吸血鬼によってつくられた、不思議な小国家。

そんな国の魔法の学舎、エイルーク魔法学園の一角である日の出来事。

「さあ謝れ、親友！」

「……なぜに？」

校舎の裏の日陰にて、リュータは疲れきって地面に腰を下ろしながら、ぶかぶかと浮かぶ妖精を見上げた。

「……というかさ。いま、お前がおこしたトラブルで人に謝ったばかりなんだけど」

ちゅちゅちゅ。

妖精のエミルは片手を腰に当て、もう一方の手の人差し指をこちらに向けて振りながら言ってきた。

「それで気づいたわけだけ。あたしが謝るより、親友が謝ったほうが許してくれやすいっ。……ので。前も言ったように、いい加減誰かに追いかけて回されるのも面倒だし、あたしが迷惑をかけた奴らに親友が謝りにいくということだ。」

「ふざけんなっ！　なんで僕がお前の代わりに謝んなきゃならないんだ」

「そりゃ親友だし。っていうか親友、あたしにだけ態度が横柄じゃね？」

妖精が小首を傾げる。

見かけだけなら可愛らしいその仕草を見つめながら、リュータは言った。やや、ため息混じりに、

「そんなの、お前がろくでもないことばかりしてるせいに他ならないだろ」

「同じせりふの中で二回も『ない』が入ると語呂悪いな」

「お前なあつ!?!」

叫ぶ。

が、エミルはいつものように、全く気にした風もない。

「はいはい。んじゃ、親友。アイリも呼びに行こうぜ」

宙をくるくると回転し、自らの光の残滓を空中に漂わせながら、エミルが第三実験室の方向を指さす。

そちらを向きながら、リユータは気乗りしない声で答えた。

「そりゃアイリもいてくれたほうがうれし……雰囲気がいいだろうけど、実験の授業ってそんなに早く終わらないんじゃないか？ 謝りにいくだけのことにつき合わせるのも迷惑だろうし」

リユータの指摘に、妖精は顔をしかめた。

「むうん……」

「なにか、絶対にアイリがいなきゃいけない訳でも？」

「……万が一魔法で攻撃されても、アイリなら冷静に対処してくれそうじゃね？」

「お前な……」

本当に魔法で攻撃される可能性も、否定しきれないのは事実だったが。それはエミルがどれだけ他人から恨みを買っているかによるだろう。

がつくりと肩を落とすリユータに、エミルが続けて言った。

「それに、ほら。二人で謝るより三人のほうが許してくれそうな気がするし」

「……………」

「とりあえず実験室に行ってみて、授業が続いてたら
ドッカーン！」

ど派手な爆発音が学園に響きわたり、第三実験室からもくもくと煙が立ち上る。

二人は顔を見合わせた。次の瞬間、エミルが一気に飛び出す。

「さて、エミルっ」

「待てるかつ、アイリが大変かもだぜ！」

叫び返しながら超速度で消えていったエミルを追いかけようと、リユータも腰を上げた。

と、少しもたたないうちに彼女は帰ってきた。

すごい形相の教師たちを後ろに引き連れながら。

「今の爆発、またお前かあああ！？」

「あたしじゃないし！？ ふざけんなああつ！」

必死に教師から逃げる妖精を見ながら、これは自業自得なんだろうなあ、などとリユータは思った。

そして、なんであんな妖精と友達になってしまったのかと自問しながら、リユータは誤解を解くために教師たちを追いかけ始めた。

教師たちの誤解も解けてだいぶ時間がたち、

「さあラスト一人！ 案外みんな許してくれた！」

「いや……、許してくれたっていうか。謝罪なんかいいから近寄るなって意見が大半だったけど」

リユータは皮肉げに言ってみたが、妖精に気にする様子はなかった。

彼らが最後にやってきたのは煉瓦づくりの、屋敷のような趣のある建物である。校舎のように模したのではなく、真正銘の煉瓦造り。とはいえここも学園内の端にある建物の一つで、各地から熱心に集められた様々な書物が納められているらしい。これから先も本を集める為なのか、この大きな建物にはだいぶ空き部屋があり、本の陳列以外の為に貸し出されている部屋も少なくはない。

そしてリユータたちが用があるのは、そんな貸し出されている部屋の一つだった。

受付の人に場所を聞いてから、その部屋へ向かう。

「あたし、この建物初めて入ったぜ。なんかたいくつそうでさっ。言ったっけ？」

「それもどうかと思うけど……まあ、僕も宿題のレポートで何回か

入っただけか」

「まっじめだなー、親友は！ そんなことしたって別に魔法が使えるようになる訳じゃないってのに」

「うう……」

知識的な面で鍛えられるので無意味とは言えないけれども……基礎のできていない人間が、それで魔法を使えるようになるわけではない。

身も蓋もない妖精のもの言いに、リユータは情けない声を漏らした。と、エミルが小さな手で背中を叩いてくる。

「泣かない、泣かない。そのうちあたしが魔法の使いかたぐらい教えてやるって」

「べ、別に泣いてないだろっ」

そう反論するが情けなさは拭えない。ごまかすように、リユータは足を止めた。受付の人に聞いた話だと、目的の部屋はこの辺りのはずだ。

と、

「きゃっ」

「うわっ！？」

「ちよ、親友！？」

もしかしたら、足を止めたのがいけなかったのかもしれない

誰かにぶつかられて、突然の衝撃にこらえることもできず地面に倒れる。その痛みに目を細めながら、リユータは体の上に重さを感じて、自分にのしかかっている相手を見つめた。

（う、うわっ　！？）

少女だった。そして、なぜだか　メイド服を着ている。年齢はどう見積もっても同じ年より上には思えない。つまりは教師でないので、指定の制服をポイコットしていることになるのだが、まあこの学校でそういう人物は珍しくもなかった。

（……メイド服の女の子なんて、初めてみたけどね）

彼女の手にはホウキとチリトリがそれぞれきつく握られていたが、

チリトリに入っていた茶色い土の欠片は、ぶつかった拍子に床へと散乱している。

少女は状況を理解できていないのか　失礼だがとろそうに見えるた　、ほけーっとリュータの上にのしかかったまま辺りを見回している。

そして不意に、リュータは自分も状況を理解していなかったことに、ようやく気づいた。

（お、女の子が、上にのっかってる!？）

間近に顔があることに、赤面する。とっさに彼女を受け止めようとしていたリュータの手が、少女のさらさらな髪と、腰辺りに触れていた。少女が顔を動かすたびにその身体も揺れ、メイド服越しに彼女の柔らかい肌の感触も指に伝わってくる。そのことにリュータは興奮と、それと同等以上の罪悪感を感じた。

（で、でも　）

恥ずかしさに硬直し、どう声をかけたらいいのかわからない。誰かに助けてほしかったが、そばを通る何人かの学生はかわり合いになりたくないのか、なにも見ないように通り去っていく。

リュータが心の中で謝罪と神様への祈りを始めたとき、ようやく、彼と一緒にいた妖精が少女に声をかけた。

「んーと、なにやってんの？」

「はいー？　あ、妖精さんだー」

「あのさ、さっさと退かないと、親友が顔真っ赤にしたまま死んじやいそうだけど」

「あ、ごめんなさい。重かったですかー？」

「……うーん、顔真っ赤なのはそういう理由ではないと思うぜ？」

妖精の言う通りではあったが、リュータは無視した。立ち上がる　と、彼は退いてくれた少女に声をかける。

「あの……心配しなくても大丈夫だから」

「そうですか……よかったです。私、おっちょこちよいで」

どことなく困ったような笑みを浮かべ、彼女は言ってくる。

ぺこんと一礼して、彼女はこの場を立ち去ろうとし
リュータは慌てて引き留める。床を指さし、

「ちよ、ちよっと待って。ゴミがこぼれてるんだけど」

「はい？ あ、ほんとうです」

わざとらしいほどびっくりした表情の彼女。身を屈め、黙々とホ
ウキで土の欠片をチリトリに入れる彼女に、リュータはなんとなく
気まずさを感じて尋ねてみた。

「あ、あのさ。ところで、歴史研究部ってしらない？ この辺りに
間借りしてる部室があるって話を聞いたんだけど」

「はいはい。歴史研究部副部长、ユウミ・フローリンです」

突然ぴよこんと手を挙げ、メイド服の少女が名乗ってくる。

あまりのことにリュータは驚きを隠せなかった。

「へ？ 副部长？ あ、いや……ちよとよかった。僕たち、部長
さんに用があるんだけど、部室はどう行ったら」

「ええとです。その曲がり角を右へ行って、えと……一番目が三
番目の部屋が歴史研究部です」

自信なさそうに目を泳がせながら、彼女は言うてくる。

「用事があつてついていけません、ネームプレートがあるので分
かると思います。大丈夫ですっ」

「うん。ありがとう」

「いえいえっ」

少女に礼を言つて歴史研究部に向かおうとすると、プカプカ浮か
ぶ妖精が気楽に片手を上げた。

「ねえねえ、あたしもしつもん。どうしてメイド服なんか着てん
だ？」

「趣味ですー。いえ、過去にあつたサクタグマンタという国で着ら
れていたものを再現したのですが」

「ふーん。そついや歴史研の副部长だっけ」

「はいー。ではでは、私はちよとゴミ捨て場へ行つて参ります。
それではっ」

片手で敬礼しようとしたらしい。持っていたホウキが彼女の手から離れ、それを慌てて追いかけていったメイド服の少女はど派手に転んで、再びチリトリの中のゴミを散らかしていた。

その姿を見て、リユータと妖精は嘆息する。

「まあ、なんだ。いこうか……」

「あー、そだね……親友」

「あ……」

歴史研究部の部室。

まばゆい閃光が視界に広がり、そして消えていった。一瞬のうちに彼が判断を下して横飛びできたのは、単に幸運だったと言うほかない。瞬間、彼の手につぶされた妖精が突然のことに悲鳴をあげた。そして、衝撃波が、床の赤い絨毯を破きながらリユータがいた場所を通り過ぎていく。

魔法を唱えているのは、年若い少女だった。どこか大人びた顔立ち、部長という役職をしっかりとめている影響だろうか。彼女の長い髪が、魔法の余波に揺れていた。

歴史研究部部長は、怒りの叫びを部室に響きわたらせる。

「よくも　よくもあたしの前に姿を見せられたな、くそ妖精っ！
！」

部長をつとめる少女が再び攻撃魔法の構成を組んでいるのを見て取って、彼はエミルを片手につかんだまま、棚の陰に身を隠した。

さすがに歴史資料を壊す勇気はなかったのか、部長の魔法が棚をそれて、部屋の扉にぶつかって消えた。

誰にも止めようもない部長の怒りに、

「え？　あたし、そんなに怒られるようなことしたっけ？」

戸惑いつつも、けろりとした表情の妖精。

リユータは叫んだ。

「いったいなにを謝りにきたんだよっ、お前は!？」

「え、いやあ。たしか……あいつの楽しみにしてたっばいジュース

を、勝手に飲んじやっただけだぜ？」

「怒るだろ、そりゃ」

「だからってこんな攻撃魔法使うほど」

エミルやリユータを逃がさない為なのか、攻撃魔法は発動の間隔を置かず牽制するように激しく続いていた。

と、一応話は聞こえていたのか、部長がこちらに向かって叫んでくる。

「ぶざけんなつ。せつかく苦労して作り上げたエウデン壺のレプリカ！ 盗んでいったのはお前だろう！」

「ちよつ！？ な、なんだそりゃ！？」

エミルが驚きの声を上げる。

そんな妖精の様子に、リユータは目を瞬かせた。たしかにエミルはいろんな面倒を人にかけるが、こんなつまらない嘘をつくような性格もしていない……はずだ。

彼は、おそろおそろ部長へと訊ねた。

「ひ、人違いじゃないんですかつ？」

「壺がなくなつたとたんにその妖精がやってきたんだぞ。ほかに考えられるもんか！」

部長が即座に叫び返してくる。

さすがに疲れてきたのか、魔法の威力も落ちてきていた。が、当たって無事ですむとも思えない。

部長の言葉を聞いて、リユータはすぐさま反論した。

「ちよつと待つてくださいいっ。無理ですよ、だって 今までずっと建物の外で、ほかの人たちに謝っていたんですから！」

「ええ？ い、いや、そのすばしっこい妖精なら一瞬で持っているはずだ！」

「壺なんか持つてって、どうするつもりなんだよあたしは！？」

「む……、くう」

うめきと共に、次第に攻撃魔法がやんだ。リユータはおっかなびっくりり柵の陰から顔を出す、危険な魔法は飛んでこない。

部長が、宙に浮かぶ妖精を指さし、気まずそうな声で聞いてくる。
「あのさ、前に電撃魔法使ってたよな。専門はそっちの方なのか…」

「主に風と電気。自然系はとりあえず」

「ランクは？」

「D。いろんなことしてたからセンセに目えつけられてさ。やっと進級試験の資格を手に入れたから、さっさとCになるつもりだぜ。なんで？」

「いや……この部屋の鍵、閉めてたなと思って。話を聞いても、性質的にも、鍵開けとかの方面は得意そうじゃないし。BとかAなら他の分野にも手を出すんだろうけど……」

自然な様子で部長が目をそらす。勘違いであれだけ攻撃魔法を放ったと知れば、気まずくもなるのだろう。

目ざといことに、部長の仕草を見逃さず、妖精がふらふらと近寄っていく。

「まー、気にすんなって。誰にだって間違いはあるさ。うんうん」

「う、うっさいっ。ここぞとばかりに変な慰めをしてくんなんっ。だいたいお前がジューズ飲んだことに変わりはないんだ！」

顔を真っ赤にして怒鳴る部長。

と、エミルがこちらを向き、

「ほら、親友！」

「へ……………、ああ。その節はすいませんでした」

「なんでその子が謝ってたんだよ」

半眼で部長が言ってくる。言われた妖精は右手の指で頬を触りながら、悪気ない口調で、

「いや、あたしが謝っても誠意が足りないとか言われそうっで」

「他の人に謝らせてる時点で誠意が足りないと思うけど」

部長が指摘してくる。彼女の言うことは全くその通りだったが。

ともかく、これですべての謝罪は終わったことになる。

だが、リユータはこのまま帰る気にもなれず　というよりはど

こが当事者にされた気分で、部長に訊ねた。

「あの……壺が盗まれたって、どういう状況だったんです？」

「ん……、ああ。手伝ってくれるのか」

妖精を軽くにらみつけていた部長が、まだ顔を赤くしたままりユータに向き直った。

彼女は簡単に。

「どつってほどでもないよ。昨日、壺ができあがって、鍵をかけて帰ったんだ。で、今日部室に来たらなくなってた」

「それはたしかに……鍵を開ける魔法でもない和无理、ですかね」

「いいや、そうとは限らないかもだぜつ。親友っ！」

エミルがぴつ、と指で銃の形を作った。

部長がそちらを疑うような目で見る。

「……つまり？」

「たとえば、あたしみたいな妖精とかだったら、身体の密度を変えられるから、扉の隙間から入れるはずだぜ」

「なるほどお前が犯人……な、わけないよな。残念だけど、この部屋は魔法防御が働いてて、扉の隙間から入れたりはしないよ。あたしの魔法食らっても扉は傷一つないだろ？」

「むうん……」

部長の言葉に、難しい表情をとりあえず作っているというポーズで悩みこむエミル。

だが彼女はすぐさま顔を上げた。

「そうだ！　じゃあ透明になれる魔法を使える相手が壺を盗んでっ たつてのは？　それだったら部長に気づかれずに部屋に進入できるぜ？」

自信満々にエミルが言う。

だが、その考えを、部長はあっさり否定した。

「今日、あたしが入ってきたのと同時に部屋に進入したなら、壺があたしの目に入らなかったのはおかしい。真っ先に目につく場所に置いてあったからな。壺を透明化する暇もないはずだ。そして……」

部長が、ちゃりん、と懐から鍵を取り出す。

「この鍵がないと扉を閉められない上に、夜間は部屋にだれかいたら警報が鳴るようにできてるらしい。昨日の間に犯行を行うことも壺と自分を魔法で透明化して部屋に潜んでいることも、不可能って訳だ。さあ、どうするね。くそ妖精」

「うーん……、盗みそうな心当たり、いないの？」

「いねえよ。趣味で作ったレプリカ盗んで、だれが得するって？」

「むう」

考えが煮詰まってきたのか、エミルが宙に浮いたまま、三百六十度回転を始める。

そんな中でリユータは逆に、考えがまとまってきた。

「先輩、壺がなくなったのに気づいてから、すぐに僕たちが来たって言っていましたよね。てことは、先輩も来たばかりだったんですか？」

「ん……？ ああ。あたし古物関係の方向に進もうと思ってるから、実験の授業も案外多くてさ」

その言葉に、リユータは納得した。

「ということは、これまでも実験で遅くなることはあったわけですよ。だとすると、その間部活は」

犯人が判明して、しばし時間がたった。そして、部屋に少女が入ってくる。

「よう、遅かったみたいだな」

「いえいえっ。実験終わってたんですね、部長」

その少女は朗らか一步手前の、笑おうとしても笑えないという、実に素直な表情を浮かべていた。

ドジっ娘メイドな副部長、ユウミ・フローリンは、耐えきれなくなったのかリユータの方に顔を向けてきた。

「えーと、ちゃんと部屋がわかったみたいでよかったですっ。私、

安心しまし」

「そいつに聞いたんだが、チリトリとホウキ持ってたんだってな。

……普段掃除しないお前がどうしてそんなの持ってたんだ？ ええ

？」

「い、いえつ。そろそろ部屋も散らかってきましたしつ。あの、その……」

「昨日エウデン壺作って部屋を掃除したあたしに、散らかってきたとか抜かすかこのドジメイド！！ そろそろじゃなくて、お前が今日、部屋を散らかしたんだろうがつ。あー、あー、盗まれたとかいう先入観があつたからお前を犯人候補から抜かしちまったんだよな！ このドジばか、壺壊しやがつて！ そりやお前はスペアの鍵持ってたんだから、トリックもなにも存在しねえよ！！」

「ひゃつ」

部長の剣幕におびえたのか、ユウミが身をすくめる。正直、見ているだけのリュータも怖くなるくらいだった。

だが部長はそんなことを気にとめた様子もなく、ユウミに問う。

「で、壊した壺の破片、どこに持ってた……？」

「……その、ゴミ捨て場です」

「破片さえあれば魔法で修復できるのに、か？」

「え？ あー！」

ユウミがわざとらしいほど大げさに、忘れてた、というリアクションをとる。

部長が目尻をきつくつり上げ、すごい気迫でユウミに近寄っていた。

「こんにやろ……お仕置きしてやるー！」

「ひゃあんつ！？ そ、そんなところ叩かないでくださいつ。……

ご、ごめんなさあいつー！」

リュータやエミルの見守る中。

ユウミの悲痛な謝罪の声が、歴史研究部の部室に響きわたったのだった。

エミルとアイリのドキドキ魔法講座

「エミルと！」

「……、アイリの」

「ドキドキ魔法講座だぜっ！」

トウンタカタタラ、タンタタラ

トウンタカタタラ、タンタタラ

軽快な音が朝の学園に楽しげに響きわたった。

魔法と科学の入り交じった国、中立国家ラクシス。東西南を魔法国家にかこまれ、北方の科学国家とも国交を持つ、不安定な国。

小さな吸血鬼によってつくられた、不思議な小国家。

そんな国の魔法の学舎、エイルーク魔法学園の一角にある芝生の上に、リュータはぐったりとして倒れ込んでいた。

自然系の魔法しかほとんど使えないと言っていたエミルが、どうやって音楽を奏でているのかとリュータは不思議だった。が、気力を振り絞って顔を上げたら魔法を使っているのはどうやらアイリだった。

案外、彼女も乗り気にいるらしい。世も末である。

そんなアイリは、芝生に倒れるリュータのことをじっくり眺めてから。隣に浮かぶ妖精に目をやって、

「……。どうして、こんな時にするんだ。っていう顔……してるけど」

「いや、今魔法講座やないと授業始まっちゃうし。魔法覚えたいんだろ？ ちょっと走ったくらいで情けないぜ、親友！」

エミルがあっさり言うてくる。

女の子にモテるため……というかなんというか。そのため今日からトレーニングをすることになり、リュータはだいぶ走ってきたばかりだった。身体にまとわりつく汗が気持ち悪い。アイリがタオルを手渡してはくれたものの、それで身体を拭う気力すらない。

「そりゃ、魔力で浮いてるだけの妖精は疲れないだろうけど……」
「え？ アイリとかぴんぴんしてるぜ？」

アイリは汗ひとつかいていなかった。

リュータは半眼で、

「いや、まあ……アイリはすごいと思うけど。最初なんだからもつと簡単なところから……」

「ん……最初、だから」

無表情に言うアイリ。

「……これから徐々に、距離を増やそうかと」

これでも手加減をしてくれていたらしい。リュータは沈黙した。そして距離を増やさないことをすっかり約束してから、少し休憩をする。彼がどうにか起き上がって芝の上に乗ると、ようやくエミルとアイリを先生とした魔法教室が始まった。

「んーと、まず魔法にはふたつの段階があるのはわかるよな、親友」

「ふたつ？」

「おうつ、魔法回路の構成と、回路に魔力を行き渡らせるふたつだけ！」

「……。あと、魔法の発動のみつつ」

淡々とアイリが補足を加えた。

その補足にリュータもうなずいたが、エミルが驚いたようにアイリの顔を見つめた。

「へっ？ 魔力を行き渡らせたら、魔法って勝手に発動するだろ？」

「……いや、魔法が暴走しないように、魔法発動前にいったん止めるはずだけど……」

「えーと」

リュータの言葉に、エミルは悩んだような顔を見せた。が、結局はケロつとした顔をする。

「あたし一回もそういうのしたことないや」

「よくもまあ……今まで失敗したことがないな……」

「魔力で構成された妖精が、そんな失敗しないって！」

リユータの言葉をエミルが笑い飛ばした。

が、アイリはどうでもよさそうな無表情で告げてくる。

「……でも。魔力で構成された妖精は、魔法に失敗したら……バラバラになるはず」

その言葉にぞっとして、リユータは目の前にプカプカ浮かぶ妖精の身体を無言でつついた。エミルも同じ気持ちなのか、なされるがままになっている。

乾いた口を舌で湿らせてから、リユータはなんともなしに言った。「妖精もやっぱり死ぬんだな……。最近、魔力で身体が構成されるとか言って、存在が薄れたりなんだから、怖いものなしかと」

「そりゃあ……妖精ってのは全体として意味を持つてるらしいから。少しでもつながってればともかく、あたしもまっぶたつにされればおしまいだと思うよ。いつぞやのギロチントラップとか」

「あー……」

エミルの言葉に、一瞬なんのことかと思ったものの、どうにか思い出した。ダンジョン大会でのトラップのことを言っているのだろう。

気分を重たくして黙り込む二人の間に、アイリが手を差し入れてきた。

「……続き」

その言葉に二人ともはっとした。現在は魔法講座である。

エミルが慌てて顔を上げた。

「お、おうっ！ 気分を取り直して……親友はどの段階で引っかかっているの？」

「……魔法回路の構成、かな」

どうにも声が小さくなる。自分の不出来を自ら人に語るのも、なかなか気が重たい。

が、妖精は顔を明るくすると、宙でぐるりと一回転した。

「なんだ、平気だって。魔力の注入は感覚的なものだから面倒だけ

ど、回路の構成は訓練で鍛えられるから」

「いや、先生もさじ投げたし……」

「ふふん、あたしにお任せだぜ！ 解決法はすでに考えてあるっ」
「なに？」

この妖精の妙な言葉を信じられずに、リユータは疑いのまなざし
でエミルを見た。

彼女は人差し指を立てて、当然のように言ってくる。

「どうせ親友はお決まりの、教科書に載ってるめんどい訓練を受け
たんだろ？」

「あ、ああ」

妖精の言葉はあまりにも乱暴だったが、否定できるところもない
ため、一応うなずく。それに気をよくしたのだろう。妖精は満足げ
な笑みを見せながら、リユータに言ってくる。

「そういうパターンで挫折するのは、細部になるほどはつきりと描
けない奴が多いけどな。親友、それはイメージ力が欠如してるから
だぜ」

「いや……だからこそ魔法回路を暗記して、必死に思い起こそうと
するんだろ？」

リユータが反論すると、彼女はふっふっふと笑って見せた。

「それは根本的な解決法にはつながらないぜっ。イメージ力を鍛え
ずに、魔法回路の構成だけしようとするから、みーんなしっばいす
るってわけだ」

「……………」

リユータは決して、エミルの話を鵜呑みにするわけではなかった
が。それでも彼女の意見を、否定しきれないのは事実だった。

すぐるような気持ちでリユータが横を見やると、アイリも首を傾
げるばかりで、妖精の話の信憑性を判別できずにいるらしかった。

エミルは朝の日差しの中を舞いながら、どこかうれしそうな口調
で語る。

「つまりだぜ。親友のイメージ力を鍛えることが、魔法を使うため

の早道ってことだっ！」

「そ、その方法は……？」

「おっつ！ これから実践だぜ……！」

ぐいつ、とエミルが顔の前に近づいてくる。いつでもはしゃぎまわって楽しい妖精が、目を細めてこちらを至近距離で見据えているというのは、さすがに不気味さを感じないでもなかった。だが、それだけエミルも真剣と言うことなのだろう。

わずかににぎやかさを含み始めた朝の空気の中、緊張とともに自分の口の中の水分が失われていくのをリユータは感じた。

もしかしたら 自分も魔法を使えるようになるのだろうか。そうならば。これからの自分の生活は、まったく違ったものになるだろう。

エミルの瞳は真剣で。

彼女は、厳かに告げてきた。

「まず、目を閉じて」

言葉通りに目を閉じる。

訪れた暗闇の中、まぶたを透過して入ってくる日の光だけが感じられた。

「いいか？ イメージするんだぜ？ 目の前には乳白色の柔らかい壁があるんだ。手を伸ばして、それをさわってみる……感じられるか、親友」

「う、うん」

イメージの中で手を伸ばし、柔らかい感触を確かめる。けれども、実際にはまったく体は動かしていない。

「柔らかい壁。触っている指。その自分の指はどんな感じだ？ 指の太さや色、つめの長さとか生えている毛は？ ……ぼんやりとしたイメージじゃなく、はっきりと思い浮かべるんだ。それがイメージ力の強化につながるぜ」

妖精に言われてやっと、自分が指を正確に思い浮かべていなかったことに気づく。どうにか再現しようとしても、映像は霞むばかり

で思い通りにならない。

それを何度も繰り返し返し、時間がたって、ようやくリユータは声を出した。

「できた……と、思う」

「うっし、上等だぜ。じゃあ親友。今度はまた、手を動かしてみろんだ。握って、開いて……はつきりと自分の手を思い浮かべたまま」想像の中で、想像の手を動かす。意志に従ってそのイメージが変化する度に、指の輪郭がぼやけ、イメージが拡散していく。

それでも、どうにかイメージできそうになったとき。

「あ、チャイムなった」

授業の予鈴と、気の抜けた妖精の声がすべてを台無しにした。

「えー、気を取り直して……エミルと！」

「いや、あの、それもういいんじゃないかな」

「むうっ、なんだと親友！ せっかく気合いを入れようと思ったのに」

エイルーク魔法学園の校舎の一つ、その屋上近くのテラスにリユータたちはいた。

朝と違い昼休みは生徒たちが昼食を食べるのにあちこち散らばっているため、もう朝の庭は混雑し魔法の練習に最適ではなかった。なので授業が終わると同時に一瞬でエミルがこのテラスを確保したらしい。

こういう時でもないこんな場所へくる機会はないが、テラスからの眺めは悪いものではなかった。

遠くには荘厳にそびえる巨大な王城が見え、西にはこの国の主要施設ともいえる大市場が広がっている。

中立国家ラクシスはその特性上、交易国家としての側面も持ち合わせていた。むしろ国々の狭間にあつてラクシスが国として成立を許されたのは、交易による利益を考えてのことと言ってもいい。ラクシスを仲介にして四方の国々はよその国と商売を行っていた。ゆ

えに市場は大きなものであり賑わっているが、学生であるリユータたちはたいして関わりを持っていなかった。大市場の成り立ちを、詳しく知っているわけでもない。

それを知りたいのならば。

目の前の小さな吸血鬼に訊ねれば、機嫌さえ良いのなら事細かに答えてくれるのかもしれない。

「なあ」

エミルが手すりの上にプカプカと浮かびながら、不思議そうに少女へ　ファーミエルへ訊ねた。

「……なんであんたがここにいるの？」

「あんた呼ばわりか……このちび妖精」

「ぐわ……っ!？」

イラつと吸血鬼が不機嫌そうな様子を見せたたん、その迫力にエミルは気圧された。

そんな自分が許せないかのように、桃色髪の妖精は無理矢理声をあげる。

「ぐ、結局どうしたんだよっ!」

「いやまあ……暇だったただけだ」

「……」

「……」

奇妙な沈黙の後。

ぼつり、とエミルはつぶやいた。

「もしかして……友達少ない？」

「必要あるか、そんなもん!」

「えー?　でもー?」

嬉しそうに妖精が、小さな吸血鬼の周りを飛び回る。その妖精をファーミエルがぺちんとはたいて、その小さな妖精の身体が、リユータの斜め前に座るエミルにぶつかつた。

エミルは手でエミルを受け止めて無感情な瞳で見下ろしていたが、むんずと彼女を掴むとテーブルの上に下ろした。

「うにゃ」

エミルの奇怪な鳴き声。

そちらには興味がないように、ファーミエルは優雅な様子で椅子に座ったまま言ってきた。

「なあ」

「……え、うん」

呼びかけられて、リュータは曖昧にうなずく。さすがに相手は吸血鬼で、しかもこの国をつくることになった偉人である。そんな彼女に対して、恐怖がないわけではない。

そんなリュータを見ながら、ファーミエルは目を細めた。

「やっぱりお前、噛まれてみないか」

「う。それは、ちよっと……」

「だめだな、一度興味がでると、気になってしょうがないというか。最近はそのでもなかつたんだが……」

なにやらひとりごとのようなことを言いながら、小さな吸血鬼はわずかに笑いで見せた。

「大丈夫……ちよっと試しに噛んでみるだけさ。死ぬわけじゃない。たぶん」

「たぶん!？」

叫ぶが、吸血鬼はなにも否定してはこなかった。

誘いを聞かなかったことにして、リュータは無理やり視線をアイリ達のほうへ移した。視界の隅で、ファーミエルがつまらなそうな顔をするのが見える。帰る気はないらしい。

「それで、魔法講座だけど……」

リュータの言葉を聞いて、エミルがテーブルから静かに浮かび上がった。

「おおつ。じゃ、親友、さっそく朝の訓練の続き……もいいんだけどさ」

「ん?」

「とりあえずさ、心構えでも聞いておこうかと思って。親友って、

どうして魔法使いになんかなるうと思っただんだ？」

くるくると回転して上下逆さまになりながら、エミルが訊ねてくる。妖精だからなのか、黄色い花びらのようなスカートは逆さまになっても下がってこない。

なんともなしに目をそらしながら、リュータは煙の立ち込めるピルのことを思い出していた。

「昔、すごい魔法使いがいてさ。ほら、エンスジョン通りのデパートで火事があったんだけど、その魔法使いはたくさんの人をデパートから助け出したんだ」

テーブルに置かれた紅茶のカップに指を触れる。

陶器の取っ手は、ひんやりと冷たかった。

「僕は無力で、なにもできなかったけど……魔法を覚えたら、あのようになれるんじゃないかって」

「ふーん」

予想できなかったわけではなかったが、エミルの反応は自分から聞いてきたにもかかわらず薄いものだった。べつにそれほどなんらかの反応を期待していたわけでもなく、リュータは苦笑した。

なにを考えているのか分からないが、桃色髪の妖精は上下逆さまのまま落下して、こつん、とテーブルにぶつかる。

「あたしはあれだ、母さんから教わったかな」

「待て。妖精の母に会ったのか？」

軽く言うエミルに声をかけたのは、どこか疑わしげ眼差しをしたファーミエルだった。妖精は、頭のとっぺんをテーブルにつけた格好で、そのままうなずいた。

「おうつ。簡単な魔法だけだったけどね。そんなに会ったことないし」

「そんなに会ったことない……？」

会話に不思議さを感じて、リュータはつぶやいていた。自分の母親にそれほど会えない理由とはなんだというのか。

ファーミエルはリュータをちらりと見ると、やや嘆息してから答

えてくれた。

「妖精の母。すべての妖精の源……妖精を司る導き手。妖精霊。世界に数えるほどしかいないと言われる、精霊のひとつだ。妖精はすべてその精霊から生み出される。それが妖精霊の力なんだ。授業で習わなかったか？」

「むう……妖精、興味なくって」

「なんだとお!？」

逆さのままわめいているのはエミルである。

だが、ファームエルはそれを無視して話を続けた。

「ふん。魔法も使えず知識もからきしじゃ、ただの役立たずだな。とにかく妖精つてのはその精霊から生み出されるわけだが、聞いた話じゃ生み出すための場所に薄い膜が作られて、その膜の中から妖精たちがいつせいで出てくるらしい。生まれるその場所に妖精霊が立ち会う必要はないのかなんとか」

視線がエミルに集中する。そのことについてなにも思うことがないのか、彼女は目をぱちくりさせた。

「本当に会ったのか、お前。大多数の妖精は会うこともないって話だぞ」

「なんで嘘つかなきゃなんないんだよ。本当だって! ええい、アイリはどうなんだよ。きっかけ!」

その言葉に、無言のままのアイリを見た。彼女はいきなり話を振られたにもかかわらず落ちついた様子でいた。

無感情な瞳がエミルを見下ろしている。

ゆっくり、その薄い唇が開かれた。

「……昔、すごい魔法使いがいて」

沈黙。

少しして、エミルがうるたえたように訊ねた。

「……え、なに? 親友と同じ出だし? ていうか、まさか同じ結論?」

「……」

アイリはなにも答えてこなかったが、小さな吸血鬼、ファーミエルは手を伸ばし、わめくエミルの足をつまみあげた。

ぎよっとするエミルをつまらなそうに眺めてから、彼女は口を開く。その奥に、小さく犬歯が見えた。

そして、語りはじめる。

「昔な。すごい魔法使いが……」

「あたしだけ仲間はずれかよっ!？」

叫ぶエミルはじたばたと暴れてようやく吸血鬼の細い指から解放された。ひゅん、と光の軌跡を残しながらテーブルの上を一周すると静止し、エミルは短い指をこちらに突きつけてきた。

「よし、親友。さあ、魔法講座を始めるぞ!」

「なんだったのさこの茶番」

ぜえはあと息を整えているエミルを見やりながら、リュータはつぶやいた。

が、その話を聞かなかったことにしたように、エミルが彼のまぶたをつついてくる。

「さー、目を閉じろ」

「む、……」

魔法講座は自分の望んだことでもある。

リュータは言われるままに目を閉じようとして

がたん!

いきなり、大きく椅子の音を鳴らしてアイリが立ち上がった。普段は大抵無表情だが案外表情が素直に出るアイリが、顔を真っ赤にしていることにさほどは驚きはしなかった。

だが、なぜ急に立ちあがったのか。

そして、落ちつかない様子で彼女が顔をどこかに向けているのは珍しいことに思えた。

「……」

そのまま、静かにアイリが席に着く。どうやら他者が自分を見る視線に気がついたらしい。

けれども顔は赤いままだった。

「……………？」

彼女の行動の意味をはかりかねて悩むが、結局リユータは答えが出ない。

心配そうにエミルはぱたとアイリの前で手を振っていたが、気を取り直したようにリユータへ向き直ると言ってきた。

「ええと、そんじゃ目を閉じて」

「あ、ああ」

言われるまま、今度こそ暗闇が訪れる。自分の意思で、テラスも、知り合いの姿も見えなくなる。感じられるのは、近くを通り過ぎる人々の雰囲気と、いまだに口をつけていない紅茶の匂い。

興味深そうなファームィエルの声。

そして妖精は、最初のように敵かに告げてきた。

「また、乳白色の壁を思い浮かべて」

「浮かべた」

「それを触る自分の指」

「触つ……………た」

朝の訓練のおかげなのか、ここまででは容易にイメージすることができた。指を複雑に動かそうとすれば難しくなるが、それも訓練になるのだろう。

妖精は次のステップを指示してきた。

「じゃ、じゃあ、くっ、視点をもつとうしろに引いて行って」

「え？」

「乳白色の壁を、親友はその目で見てるんだろう？ イメージの中で顔をゆっくりと後ろに持っていくのさ。いいか、ゆっくりだぜ？」

「わ、分かった」

あくまでもイメージの中で、顔を後ろへと持っていく。想像の中で、大きく見えていた自分の手のひらがやや遠くなっていく。

「いいか親友。遠くから見ると、分かってくるものもあるぜ……………」

聞こえてくるエミルの声は、どこか震えていた。

「自分の手、指、乳白色の壁、その壁はぶにつぶににやわらかい、アイリのから」

「……………。ぶっ!?!」

エミルの言葉の意味を急速に理解してリユータは嘔き出した。顔を真っ赤にして目を見開く。

眼前では桃色髪の妖精がげらげらと笑ってた。その向こうでファームエルはうつむいて握った拳をテーブルに押し付けているが、笑いをこらえ切れていない。

当のアイリは依然として頬を赤く染めたまま視線をそらしてこちらを向いていない。

「くっ、いや、だってさあ親友、訓練だって、ほら、やる気の出るものを想像したほうが効果出るって。はっ、あはははは!?!」

「その声ですでに真面目さが感じられないだろ!?! ふざけんな!」

「あは、あひ、ううゝ……………」

そして妖精の笑い声に包まれて、本日の、エミルとアイリのドキドキ魔法講座は終了した。

リユータは確かにドキドキしていた。

つごめく悪魔たち

深く暗い 闇の底。それは夜の最果て。

たとえ射し込むのがわずかな光であったとしても、それに困る生命は存在しない。この闇の中にあるのは、光を必要としないものたちだった。

しかしそんな闇でさえ、今だけは明るく、まばゆい。

重さの影響しないその空間に浮かぶ少女の両手の間に、明るい色から暗い色まで、様々な彩りの光がうねるようにして球体を作っていた。

薄く笑いを浮かべながらその光を見つめる少女の傍らに、女がひとり。つまらなそうに目元を歪ませている。

「最近、楽しそうねえ。……ふん、金色吸血鬼はひとまず、危機を脱したのかしら」

「それによって予定の進行は遅くなった……ふふっ、それを一番喜んでるのはあなたじゃないの」

冷たく言い返されて、女は不満げに顔をしかめた。その女の態度を気に留めず、少女は自らの作りだした光へと集中し続ける。

そのことは気付いているのだろうが、女は話しを続けてきた。無視されても、それでもどうしようもないほどに、退屈を持って余している。例え約束の日が近くとも。

「捧げられる供物は増えつつあるわあ。金色吸血鬼がどうなることも……時間はけっして、わたしの敵にはならない。活発化した悪魔たちの動きによって、状況に対応するように私の力も増大しつつあるものねえ。あの女に、感謝しなければならぬのかしらあ……くくくっ」

「せいぜい、その女の力も増していることを忘れないようになさい。油断すれば、また敵わずに逃げ帰るのがオチよ」

やや嘆息を交えて、女へと忠告を口にする。

そのことに、女は不思議そうに首を傾げたようだった。そのまま疑問を語りかけてくる。

「おかしいわねえ……？　あなたなら、油断したところを嘲笑うのがせいぜいと思っていたけれど……どういう心変わりかしらあ」

「あら、心配してあげているのよ。つまらないことで露払いが消えてしまわないかとね」

少女が発した嘲笑の言葉に、女が鼻を鳴らし、頭を振って長い髪が揺れた。

けれども重さのないこの空間にあつて、それでも乱れた髪はゆつたりと元の整いへと戻っていった。望めば息が白く吐かれ、たとえば動かずとも身体が漂うように、願うだけでそれは叶う。

「弱りゆくあなたに、身の程を教えてあげても構わないけれど……」

間延びした中に、険しさを含んだ声音。

振り向かずとも、女が目つきを鋭くしたのが感じられた。

「いったい、それはなんのなのかしらあ？」

集まり束ねられ、さらに増えてゆく光。幾重にも紡がれる神秘。

それを指して、女が問う。

そして、少女は嘲りの笑みを深めた。

女は本当に気付いていないに違いない。自らもかつて、同じことを行ったはずだというのに。それを理解するだけの知恵もない。

「そうね、特別に答えてあげる。あなたにそんなつもりはないでしょうけれど、あなたがここにいてくれるからあの女の干渉を気にせず、私はこの子に集中していられる」

「この子……？」

困惑の色を深める女へと、少女は告げる。

「約束の日、世界滅亡の日へ向けて。これはね。ふふっ、気に入るかしら。最新にして最高の　精霊よ」

一説によれば悪魔というのは魔界に巣食う。そして、魔界を統治

する魔王たちの下僕であるのだという。しかし魔王のもとから離れて活動する悪魔もないわけではないし、魔界でなくこの世界に根差す悪魔も見ることが出来る。結局のところ、悪魔の生態というのは、人間や獣人たちにとって、少なくとも賢セウコルス国家連盟に名を連ねる国々の間では、解明されていないと言っている。

しかし、それでも理解できることはある。悪魔たちが魔界を離れ活動する理由や、魔王の支配から離れていかなる行動原理を持っているかは分からずとも、大事なことだけは理解できてしまう。つまり。

悪魔たちは大抵が、人間を襲う。たとえば人肉を食らい、あるいは無意味な殺戮に興じ愉悦の笑みをこぼす。

力なき者たちはその悪意の影に怯えることしかできない。

「……………」

漆黒の翼、そして口からのぞく長い牙。細長く開いた両目は濁っていて、耳がわずかにとがっている。細い四肢は黒い光沢を見せていて、尾が鞭のようにしなっていた。

それは悪魔だった。

いくつか確認されている悪魔の種類の中でも、頻繁に報告されている種類である。

その悪魔たちが群れをつくり、家々に閉じこもる人間たちを襲おうと奇声をあげる姿を見下ろしながら、彼女は愛用の黒マフラーを自らの首に巻き付けた。

石造りの、粗末な民家の屋根の上。

彼女は高らかに声を響かせる。

「そこまでだ、低級悪魔どもっ！」

突然の声に異形の生物は動きを止め、そしてざわめきもなくこちらを振り向いてくる。そして、忌々しいことに口を開き、言葉を発した。

「なにもの、だ……………おまえたちはあ……………」

しわがれたその声に、彼女は苛立ち紛れに鼻を鳴らす。

そして、手にはめた黒手袋を確かめつつ答える。

「D1。デモンズハンター……第一号っ」

その彼女の言葉に続くようにして、真横に立つ少女が落ちついた
声音で名乗りをあげる。

「同じくD2。デモンズハンター、第二号」

しん、と静まり返った夕闇の街並みの中で、ぐぎやぎやぎやぎや
ぎや、という悪魔たちの奇声が響き渡り、そして殺戮が始まった。

彼女は軽く屋根の縁を蹴るようにして飛び降りると、そのタイミ
ングを狙って放たれてきた悪魔たちの電撃の魔法を、宙を蹴って方
向を変え、容易にかわす。そのまま空中で、彼女は虚空へと袈裟斬
りのように手刀を放った。手刀から巻き起こる衝撃波に斬り飛ばさ
れた、悪魔たちの腕や胴が舞う。

着地の間際、殺到してくる炎に彼女は笑みを浮かべた。黒い手袋
のはめられた両手をそれぞれ勢いよく突き出すと、敵の魔法を受け
流すようにはじきとばす。

瞬間、周りの地面や悪魔が凍りつき、彼女は相方の少女の魔法の
技に感嘆の声を漏らした。そのまま感心に浸ったまま残った悪魔を
無視するわけにもいかず、彼女は頭上から飛びかかってきた悪魔に
身を引いて避け、渾身の力で拳を打ち付ける。打突点から破裂した
悪魔には目もくれず、次の相手へ。手当たり次第になぎ倒していく。
そして。

動く者はなく、悪魔たちの死骸がその場に残った。その死骸もや
がて黒い霧となり、どこへともなく消えていくことだろう。

自らの無事も悪魔たちの撃破にもさほど喜びの表情を見せず、彼
女はあたりを見回しながらつぶやいた。

「最近動きが活発化してやがるな。悪魔たちがこれほどの数で、そ
れもどうどうと行動を起こすなんて……。けっ、うざったいったら
ない。あたしたちの妹も無事だといいいけどな」

「離れて三日しか経ってないわよ。それに、ラクシスは案外、平和
な国でしょう」

冷静に答えてくる自らの相方、つまりは双子の妹の言葉を聞きながら、彼女は西方へと顔を向ける。

故郷ラクシスへ残してきた末の妹への不安は、やがて聞こえてきた、閉じこもっていた人々の安堵の歓声によって掻き消されていた。

放課後。リユータは取り囲まれていた。

今まで嘲笑の対象にされ嫌がらせも何度か受けていたが、こつも直接的にクラスメートに取り囲まれることは初めてで、思わずつばを飲み込む。

なにか、こちらから声を出すべきか。そもそもこの緊張感の中で声が出るのかはいまいち分からなかったが、教室の壁を背に、彼は自分を取り囲むクラスメートたちを見回した。確信は持てないが、どうやら怒っている様子ではない。が、興奮している。

最前列の真ん中に立つ、大柄な男は分かりやすかった。この集団のまとめ役で、いつもクラスでは目立っているほうだ。その彼は、興奮を隠し落ち着きを装うとしているものの、それを隠しきれないでいる。

結局、リユータが恐怖と疑問でぐるぐると思考を巡らし対応を決めかねる間に、その真ん中の男が口を開いた。

「昨日、お……お前と会っていた女は誰だ？」

「へ……？」

言われて、さっと考える。まさかエミルではないだろう。とすれば、アイリのことか。

しかし、相手は続けて言うてくる。

「すつとぼけるんじゃない。金髪の女と一緒にいたな？」

その言葉にリユータは、げ、と吐き出しそうになった。

間違いない、問いたただかれようとしているのはファームイル・デア・ラークシエスタのことだった。だが、どうしてこの国を造った

偉大な人物と一緒にいたかなど、答えようがない。そして万が一答えられたとしても今より面倒なことになるのは目に見えていた。

クラスメートの圧力から逃れるように視線をそらして上に向けると……手のひらサイズの少女がいた。

「やつほー、親友。なにやってんだ、こいつら。親友なんか取り囲んでさ」

桃色の髪に、黄色い花の衣装。可愛い顔の中で、くつきりとした二つの眼がこちらを見下ろしている。

その妖精を見上げて、リユータは聞き返した。

「なにやってんのさ、エミル」

「んー、せつかくいいことを思いついたからさ、親友を呼びにきたんだけど」

「エミルのいいことってるくなくないと思う……」

リユータが心の底から言葉を吐き出すと、エミルは顔をしかめた。

「ぬ、失敬な奴だぜ。ところで親友、こいつら吹っ飛ばしてもいいの？」

「だめに決まってるだろ!？」

物騒なことを言うエミルに叫び返す。

と、彼女はリユータの顔の前に降りてきた。全員が彼女を見つめる中、彼女は周囲の人間に向き直ると気負いもせず手をパタパタと振った。

「しっしっ、邪魔だからあっち行きな。通れないぜ」

「話を聞くまでは通すわけにはいかねえよ」

「言ってきたのは真ん中の大男である。」

だが、エミルはあっさりしたものだった。

「あの吸血鬼のこと？」

「や、やつぱりかつ。じゃああれはファームミエルさまなんだな……」

!?!? なんて、こんな奴と一緒にいたんだ」

男は妖精に目を向けたまま、その太い指でリユータのことを指しとくる。

エミルは笑顔を見せた。

「ふっふっふ、よくぞ聞いた！　なんと親友、あの吸血鬼と出会いがしらの喧嘩を売って、紆余曲折の血みどろの戦いの後で友情が芽生えたんだぜ！」

「そんな冗談はいい。本当のことはどうなんだよ」

たちまち機嫌を悪くした男に対し、リユータはとりあえずつぶやいた。

「あながち嘘とも言い切れないような……主に戦ったのはエミルだけど」

その時はファームエルと共闘したのであって、敵はどこその秘密結社だったが。

「ふふん、血みどろになったのは主に親友だけだったぜ。保健室運び込まれてさ」

「うう……」

エミルに言われ、リユータは情けない気持ちでわずかにうなだれた。

うめいてから顔を上げると、エミルが凶悪そうな顔で周囲を見回していた。

「さーて、答えたし道を開けてもらっぜ。これ以上親友にかかわったら、これからどんな恐ろしいことに巻き込まれるか……」

彼女の言葉を真に受けて、クラスメイトがざっ、と道を開けた。その道の中を、エミルを先頭にのろのろと進んでいく。

道を開けた中に隣の席の女子がいて、困ったような笑みをこちらに向けていた。

もしかしたら今回のことで、嫌がらせは減るかもしれない。だが、いっそう教室には自分の居場所がなくなるのではないかと、リユータは嘆息した。

校舎を出て、学園の中を歩いていく。

「どこ行くつもりなんだ？」

「んー、行けばわかるけど……うむ、プールで女子観察だぜっ」

「あほかお前は!？」

思いもしなかった言葉に即座に怒鳴り声をあげる。

「えー、なんだよ親友。ノリが悪いぜっ」

「なんでお前はそんな男子みたいなこと……ん？」

ふと、問いかける。

「そういえば、エミルって女なのか男なのか、どっちだっけ」

「いや、魔力で構成されてる集合体にそんなこと言われても……まあ、あたしの気分次第なんじゃないかな」

こくり、と首をかしげて微笑みを浮かべるそのさまは、ひどく可愛らしい様子だったが。花の咲いたような愛らしさのエミルから、直視することができずに視線をそらす。

「んにゃ、どうしたのさ、親友？」

「い、いや、なんでもない……。で、なんでプール？」

「親友に会わせたい知り合いが……。まあ知り合ったばかりかなんだけど、向こうの魔技師の区画にいるんだよね。ちょうどプール近いし」
そこまで聞いて、リユータは吹き出した。

「こ、断るっ」

「まあまあ、そんなこと言わずに。いいじゃんかプールぐらい」

「プールに女子見に行くのはともかく、魔法技術師科は嫌だっ」

「んん？ として？」

問い返されて、リユータは唇を軽く噛んだ。ぷかぷかと浮かぶ妖精のほうは見ないようにしつつ、言葉を口に出す。

「知り合いが、いや、友達がいるっていうか……」

「……？ なおさらいいことじゃん。ほら、さっさと行くっぜ」

「気まずい別れ方したのに、どんな顔して再会したらいいのかわからないんだよ。向こうは、僕のことをまだ友達と認めてくれてるかもわからないのに」

「とりあえず」

その言葉に、リユータもエミルも無言。

「プールまで、行ってみれば」

「おう、そこまでなら親友もへーきなはずだしね」
うんうんとうなずいて、エミルがアイリの言葉に同意した。
そして、いつの間にか後ろについてきていたらしいアイリは、うるんげな瞳で見つめられて不思議そうに小柄な体をわずかに震わせ、短い栗色の髪を揺らした。

授業がまだ終わっていないなかったため一度エミルを追い返したアイリは、授業が終わるなり、さっさと身支度を整えると、教室を出て行った。その際、こちらに向けられたクラスメートの瞳に映る蔑みも恐怖も、もはや慣れたものである。決してクラスメートと仲良くなることはできないが、読心魔法に手を出した以上仕方のないことなのだろう。

アイリは前もって話を聞いていた通り、エミルの言っていたプールへと足を向けたが、授業が終わってからそれほど時間が経っていないことに気付いた。

もしかしたら、あの妖精は、教室からリュータを連れ出している最中かもしれない。そう思って、彼女はリュータやエミル通りそうな道へと向かった。

(……?)

そして、今、なぜだかその二人から、力ない眼差しを投げかけられていた。

エミルが、大きく息を吐いてから言ってくる。

「いつの間にも後ろにいたんだよ？」

「ついさっき」

「全然気づかなかったけど……ほんとびっくりしたぜっ」

その場を飛び回りながら大げさに言うエミルへ、リュータは再び歩き始めながら、うるんげな瞳をそのまま移動させた。

「妖精自慢の特殊聴覚とやらはどうしたのさ……」

「聞こえたり聞こえなかったりするからこそその特殊聴覚だぜっ」

妖精は、なぜだか自慢げにそんなことを言ったりしているが。

『そりゃ、集中してなかったし、あちこちうるさかったら聞こえないって!』

などと内心思っているようだった。

その特殊聴覚とやらに制約があるのは、それほど意外なことでもない。

魔法と多種族の肉体機能を同じに考えるのはいけないかもしれないが、アイリの使っている読心魔法にも欠点はある。その時相手が考えている以上のことは読み取れないことや、うまく読み取るうとするならばつきりと相手を意識しなければならぬことなどがそうだ。一度に多人数の心を読むのには向かない。

たとえそれでも、読心魔法が、恐ろしい能力であるのには違いなかったが。

この読心魔法が自分から他者を遠のけているとはいえ、便利な能力ではある。だが最近、困っていることもあった。

(大丈夫……のはず)

エミルであれば心を読むことに苦労はない。が、アイリはちらりと、リユータへと視線を向けた。

もし彼が不埒なことを考えていたら、どうしようか。

他の女の子のことにに関して、えっちな考えを持っているのなら、それは別段困らないのだが、自分のことであつたらと思うと心を覗くの躊躇が出る。

そもそもこんなことで悩むようになったのは、目の前の妖精が、アイリの身体をイメージすることを魔法の訓練法として提案したからなのだが。荒唐無稽ならまだしも、理屈は一応筋が通っているのだから否定もできない。

(困った……)

そもそも、歩きながら、しかも他人と話をしながら女子に対して妄想していることもないだろう。

そして、アイリが意を決して、心を読もうとした瞬間だった。

「あ」

リユータの声に、アイリはぎくりと一瞬動きを止めた。もちろん、自分の動揺などわずかにも外へは出さないが。

「プールはあれかな」

「おうつ。最近魔法で作ったらしいけど、去年より大きいよね」

「どちらかというと、なんで春も中頃にプールなんか作ってるのか不思議だけど。」

「いいじゃん、親友だって女の子の水着姿、早めに見られて喜んでるんだから」

軽い調子で言いながら、妖精がふわふわとプールへと飛んで行った。

地面をそのままくりぬいた形で作られている穴に、水を入れてプールにしている。毎年行われていることではあるが、先日行われたダンジョン大会の地下迷宮を作る手間を考えると、大したことではないのだろう。

水着の人々は大勢と言わないまでも、プールの中や周辺に並べられた石畳の上でそれなりにたむろっている。

それを見たリユータの第一声。

「おお、そうか……女子ばかりじゃないんだよな」

「……」

アイリがなんとも言えない気持ちでリユータを眺めていると、プールで泳いでいた女子から悲鳴が上がった。どうやら足が攀つたらしい。暴れて水しぶきを上げる女子に対し、周囲は助けようにもどうすればいいのか困惑している。

だが。

気にする間もなく、リユータが水の中に飛び込んでいった。

アイリの近くへ戻ってきていた妖精が一言。

「親友って泳げんのかな」

「……、さあ」

小首をかしげる。

それでも、しかし、アイリはつぶやいた。

「服着たままは、泳げないと思う」

「うなづ。か、考えなしだ!？」

「でも、彼の長所、だと思う」

普通はなにも考えずに、人を助けに行けるものではないだろう。そういうところは嫌いではない。

ざぱん。と音を立てて、おぼれていた女子と、リュータの体が水中から浮き上がった。アイリの行使した、物体移動の魔法が、二人の体を持ち上げたのである。

妖精がぼつり。

「周囲の混乱とか親友の勇気とか、全部無駄にする冷静な判断力だよな……」

そんな言葉を聞きながら、すとん、と目の前の地面に二人を降ろす。リュータは咳き込んでいるが、調子を取り戻したらしい女子が、こちらを見て怯えた様子で言ってくる。

「あなたは、だいま……。あ、ありがとう」

彼女の言葉に、アイリはわずかにこくんとうなずいてやった。それから視線をリュータのほうへ向けると、女子は逃げ去るようにして走って行った。

隣ではエミルが、なんだあいつ、とつぶやいていたが、アイリ自身はその答えをすでに分かっていた。

あの女子は、読心魔法の使い手であるアイリの悪名を知っていたのだ。

女子を助けようとしておぼれ、結局アイリに助けられるはめになったリュータを遠くから眺めて、ファームエルはこらえきれずに笑っていた。

「くつくくくくつ、ぷつ、あは、あはははは」

「笑いすぎですよ」

校舎の二階、笑い続けるファームエルの傍らに控えながら、しかも面でそう言ってきたのはマリナだった。

アイリの姉である彼女は、この学園の年若き教師でもある。

「だってな……くくくっ」

「ほんつとにあなたは。大体、学校を真昼間から出歩いて……。いいですか、私は悪魔について話があるっていうからわざわざ来たんですよ？」

「わざわざつてお前な……よくも私にそんな口を利けるな。それに、私は歩きたいときに歩きたいところを歩くさ」

今までは、特に必要も興味もなかったから外出しなかっただけである。別に騒動を嫌ってのことではない。これだけ笑えたのだから、出歩いた価値はあっただろう。

ファームエルはどうか笑いを抑えて、本題を話し始めた。

「ふう。こないだ、各地に設置した探知機に悪魔の存在が引っ掛かった話はしたな。複数……それも強大な力を持った奴だと推測されてる」と

「……はい。だから、その悪魔たちの狙いを探ろうと」

「いいや。なあ、マリナよ。悪魔とはなんだ？」

漠然とした問いではある。

マリナも困惑したようだった。

「それは……魔の世界に巢食う悪なる生物、人間の敵でしょう」

「ああ。そしてただの獣ではなく知性を持って、あえていうなら精霊や妖精に近く思える。必要あれば魔法を用い、主人の指揮下であれば群れることもある」

「……つまり」

「そう、悪魔は組織になりうる。悪魔の反応は最近感知されたもの。マリナ」

一息吐いて、若き教師の瞳を見据え、彼女は問う。

「秘密結社、フォールダストとは、なんだ？」

窓もなく光が通ることのない暗い一室。

部屋の両側には蝋燭がわずかに灯り、大きな異形の影を映してい

る。それは人の姿に似て、決して人ではない。

たたずむその異形へと、暗がりの中、椅子に座る男が話しかけた。
「將軍」

しわがれた、しかし力強い声。

「計画の進行はどうなっている」

「神器の収集は滞りなく進んでおります。しかし、要の神器はいまだ発見できず」

一瞬、異形は男への恐怖に負け、身じろぎをした。

しかし、男はそれを無視して言葉をかけてくる。

「電子精霊のさらなる横やりを入れさせるわけにはいかん。將軍、最終作戦のエネルギーは蓄えられつつある。至急、要の神器を手に入れるのだ。我らフォールダストの最終目標……世界滅亡の日。金色の夜は目の前まで迫っている」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9385h/>

女の子にモテたいっ！

2011年3月2日10時55分発行